

---

# 真・恋姫無双～蒼き忠将～

ワコウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫無双～蒼き忠将～

### 【NNコード】

N2749M

### 【作者名】

ワコウ

### 【あらすじ】

魏の大將軍『夏侯惇』元譲。

彼が気が付いたら見知らぬ土地にいた。そこは彼が元々いた世界と同じようで少し違う世界であつた。  
そんな世界で夏侯惇は。

誠に申し訳ありませんがこの作品の更新を打ち切らせて頂き、新たに書き直させて頂きます。どうか御了承の程を宜しくお願ひ致し

ます。

## プロローグ（前書き）

この作品は真・恋姫無双の二次創作です。原作とは異なる展開になりますので御了承下さい。多少、演義と正史を参考にしてあります。

主人公は作者の勝手な想像で構成されておりますので実在した人物とは違います、御了承下さい。

このような作品ですが宜しくお願い致します。

## プロローグ

数多の戦場に立ち、幾多の功績を上げ、何度も自軍を勝利に導いても人は老いには勝てない。

病に伏し、老いていく自分の身体を見つめながら空虚に包まれ薄れ行く意識を永遠の闇へと手放した。筈だった。

「…………」こは？

気が付いたら見知らぬ平原に立っていた。透き通るよいな青い空に浮かぶ太陽は暖かい光りを放っている。

そして思わず呟く声は優しく吹いた風に運ばれて消えて行く。全く状況が理解出来ない。

（私は死んだ筈ですが……）

病に伏し消え行く意識の中、国の未来を案じていた。そして意識を手放した。筈だったのだが。

（何故、このような地に？　ここが話に聞く“あの世”でしょうか

?)

そう考えるも、頬を撫でるそよ風や、鼻腔をくすぐる大地の香り、陽光の暖かさ等、現実の物としか思えない程である。

(困りましたね……ん? あれは )

彼は少し離れた場所で自分と同じく呆然と立っている少年を見付けた。

十代後半くらいだろうつか。何故かどこかで見たような気がしてならない。

その少年もいひりをまじまじと見つめている。

(……む? もしかして……)

彼の脳裏にある者の名前が浮かんだ。有り得ない、と思いつつその者の字で少年を呼んでみた。

「……妙才?」

「……げ、元譲殿!?」

彼は自分の従弟である夏侯淵の字で呼んでみたら少年は驚愕の表情を浮かべ、彼夏侯惇の字を叫んだ。

「妙才、どうして貴方がここに？　それに何故、若返っているのですか？」

夏侯惇は全く理解出来なかつた。目の前にいる短く切り揃えた黒髪に人懐っこいそうな眼が特徴的な長身の少年は確かに自分の従弟の夏侯淵である。

しかし何故、若返っているのだろうか。夏侯惇の疑問は深まるばかりだ。

「元讓殿こそ、何故若返っているのですか！？」

その声に夏侯惇は慌てて自分の頭や顔を触つてみる。

髪は耳が少し隠れるくらいの長さ。肌は老人のような皺も無く、艶やかであった。

夏侯惇は嫌な予感がした。

「妙才……私は何歳くらいでしょうか……？」

「えーと……十代後半頃、十七か十八歳頃くらい……です」

夏侯淵の答えに夏侯惇は思わず崩れ落ちそうになつた。  
脳裏には浮かび上がって来るトラウマの数々。そのまま落ち込んで  
行きそうになる気持ちを向とか立て直す。

「……とにかく、ここはなじのでじょうか？ 妙才、分かります  
か？」

「いや、俺には全然見当も付きません……」

その答えに夏侯惇は溜め息を吐き、空を仰いだ。

（……全く理解が出来ません）

夏侯惇はそつゝ嘆息するしかなかつた。

## 昇龍との出会い（前書き）

視点がよく変わりますので御了承下さい。

## 昇龍との出会い

「おー、そこの兄ちゃん達」

どこからか声がした。男の声である。夏侯淵は声がした方を向いてみた。

するとそこには二十人程の男達がいた。全員、頭に黄巾を巻いている以外は統一性がない服装や装備だ。

ある者は槍を持っていたり、ある者は剣を携えている。意外にも服がボロボロという点では統一感があった。

人は見掛けで判断してはいけないと、よく言ったものだが思いつきり賊にしか見えない。

「何でしうが？」

夏侯惇が涼やかな声でにこやかに尋ねた。かなり中性的な声である。

恐らく田の前の男共は夏侯惇の事を女性だと思つてゐるのだろう。

生唾を飲み込んでいるのが見て取れる。

確かに、とは思つ。改めて隣にいる夏侯惇の顔を見ても女性にしか見えない。

少し耳が隠れるくらいの長さの艶やかな黒髪。整った顔。瑞々しい肌。色っぽい唇。少し切れ長だが優しそうな眼。長身だが全体的に線の細い身体。

軽鎧や小手、脛当を身に付けているが、実戦で邪魔にならない程度に装飾されている事もあってお洒落にしか見えない。腰に携えている剣でわせ、そんな風に見える。

更に穏やかな物腰もあってか、かなりの美女に見える。少なくとも外見は。

だが夏侯淵は知つている。十代後半頃の夏侯惇はかなり荒れていった。主に彼自身の容姿の所為だろう。

しかし、かなり暴れ回っていたクセに何故か人望はあった。

その仲間内　いや、夏侯惇を知つている者の中で彼に言つてはいけない禁句が幾つかあった。

その禁句を目の前の男共が触れないのを願うばかりである。

「へ、へへ。こりゃ、かなりの上玉だぜ」

夏侯淵は凍り付いた。小声だったが、しつかりとハツキリと確實に聞こえてしまった。

（……い、いや、ままま、まだ諦めるな俺！　げ、げげげ元譲殿には聞こえていなかつた可能性も　）

そう思いつつ夏侯惇の顔を盗み見て　終わつた、と感じた。

彼はまだ、穏やかな笑みを浮かべている。しかし、眼は笑つていなかつた。むしろ、絶対冷凍の冷たさを宿している。

（い、いや、まだだ！　まだ諦めるな夏侯妙才！　外見は若返つても精神的には大人だ！　まだ大丈夫だ！）

そう願う夏侯淵。少し前に気が付いていた事だが、外見が若返つたのと同じく精神的にも若返つてているような感じがする。

それは夏侯惇も気が付いている筈だ。だが、それを踏まえても大人としての矜持を活かし。

「おー、兄ちゃん。ちよつと悪いんだが金田の物を置いていつて貰おうか。それと、そこの美人の姉ちゃんも、

（……終わった。何もかも……）

最早、手遅れだと悟る夏侯淵。しかも、あからざまな賊発言をしてしまっている。

悪氣の無い一般人ならば厳重注意で済んだだらう。しかし、賊ならば話は別である。

隣から漂つて来る静かな殺氣から逃げ出したい夏侯淵であった。

「……『美人の姉ちゃん』とは誰の事ですか？」

「ああ？ あんただよ。姉ちゃん

尋ねる夏侯惇に男の一人が答える。何気に優しく答えていく所を見ると、夏侯惇が謙遜していると思つてゐるらしい。

（……頼む。頼むからこれ以上、火に油を注がないでくれ……）

夏侯淵の切なる願いだつた。最早、身体の震えが止まらない。恐らく顔色は青を通り越して紫になつてゐるに違ひない。

夏侯惇から漏れる殺氣は夏侯淵の身体中を槍で突き刺しているかのようであった。

夏侯淵の内なる叫びも虚しく男達は一ヤ一ヤと笑つたままであつた。

「つまり、貴方達は賊ですか？」

「賊？　冗談はよせやい。俺達や、誇り高き黄巾党だぜ。そー」いらの賊と一緒にすんなよ、姉ちゃん！」

(……ん？ 黄巾党？ あれ？)

男が言つた事に疑問を感じる夏侯淵。夏侯惇も同じ思いらしく少

し眉をひそめている。

黄巾党はかなり昔に討伐された筈である。残党か、とも考えたが先程の言い方では違うような気がする。

「さあて、お喋りはここまでだ。そつそと金皿の物を置いて行きな

一人がそう言つて剣を抜くと、他の者もそれぞれの得物を持ち始める。

それに対しても夏侯惇は穏やかな笑みを浮かべつつ男共に近付き、一番近くにいた男の前で止まる。

「先に抜いたのはそちらですかね」

穏やかな声でそう言いながら右手を腰に携えている剣の柄へと持つて行く。

あまりにも自然な行動だった為、男共は気が付いていないようだ。

「ああ？ 何を言つ

男が言えたのはそこまでだった。夏侯惇は腰から剣を抜き放ち、

横に一閃させた。

男の首が空へと舞い上がる。残った胴体はゆっくり崩れ落ちながら鮮血を噴き出させる。

夏侯惇はそのままの勢いで隣にいた別の男を斬り捨てる。男は何が起きたか分からぬ、というような表情のまま地に伏した。

周りの男共は呆然としていたが夏侯惇が三人目を斬った時にようやく動き始めた。

何やら喚いている。しかし夏侯淵はそれを無視し腰に携えた剣を抜き、夏侯惇に気を取られている男の一人を斬り付ける。

鮮血が飛び散り、男は崩れ落ちた。そのままもう一人を斬り捨てる。

辺りに響き渡る怒号、悲鳴、絶叫。そして濃厚な血の臭いが漂う。夏侯淵は剣を振るい続ける。もう一人、二人と倒す。そして次の敵を探そうと辺りを見渡したのだが。

「……マジですか……」

「ん？ どうかしましたか妙才？」

夏侯淵の眩きに夏侯惇が涼しげに反応する。しかし彼の周りには肉塊が転がり、血溜まりが何ヶ所もあった。

どうやら全員倒してしまったらしい。余りにも早過ぎるし、更に返り血も浴びていなかつた。

「さて、盗み見はあまり良くないと思つのですが

夏侯惇は視線を転じ近くの茂みに顔を向けて言い放つ。誰か隠れている。

夏侯淵も気が付いてはいた。しかし、このよつた対応は面倒臭いので全て夏侯惇に任せつづりであった。

茂みがガサガサと動く。そして中から人が出て來たのだが。

(へ？ 女？)

そう茂みから出て来たのは白い衣を身にまとつた少女だった。

頭には衣と同じ色の白い被り物を被り、髪は透き通るよつた青色、顔立ちは整つており、瞳は紅玉のよつに紅い。

その容姿は世間一般的に言う美少女であろう。その少女はバツの悪そうな表情をしていた。

「いや……済まなかつた。助太刀しようつと思ったのだが貴殿の太刀筋があまりにも美しく……その……見惚れてしまつて」

少女は消え入りそうな声で恥ずかしそうに言つた。勿論、自分の太刀筋ではない事は百も承知である夏侯淵。

チラツと夏侯惇の横顔を盗み見る。少し驚いた顔をしていたが、すぐに温和な顔になる。

「そうでしたか。いやはや、御足労をお掛けして申し訳ありませんでした」

「いえ、そのよつな……」

夏侯惇が優しい声色で言い、少女が慌てたように応じる。夏侯淵はそれを見ながら少女が持っている長槍を見ながら思う。

（……女が武器を持つて戦う……のか？）

恐らく夏侯惇も同じ疑問を抱いている筈だ。彼らの常識的には女性が武器を持つて戦うのは一揆くらいなものである。

女性を戦場に連れていくのは不吉とさえ言われている程である。

（……いい、どうだよ）

改めて夏侯淵は思った。少女の髪と瞳の色を見て西域より西の国か、と予測する。夏侯淵達の国では黒髪に黒眼が一般的だ。

いたとしても茶髪。異民族に青い眼を持つ人間もいたがごく少数である。

だが、夏侯惇の言葉が通じる。そして彼女の言葉も自分達に通じる。

異国であれば通じる事はないだろ？。疑問は更に深まるばかりだ。

夏侯淵が考え込んでいる間にも会話していたらしい。話題が先程と違っていた。

「成る程……ここは義陽郡、という事ですか……」

「つむ、そうだ」

夏侯惇の言葉に応じる青髪の少女。義陽郡と聞いて首を傾げる夏侯淵。

義陽郡といえば荊州の北部である。北に行けば許都や陳留といった曹魏の中心地がある。

何故、義陽郡なのか訳が分からぬ。そもそも死んだ筈の自分がここに存在している時点で理解出来ない。

（それにしても、流石は元譲殿だ。誘導尋問はお手の物だな）

何気に失礼な事を考へる夏侯淵であったが、ここである事に気が付いた。

(……元讓殿の顔が険しい？)

傍から見たら優しそうな微笑みを浮かべて会話しているように見える。しかし、夏侯惇との付き合いが長い夏侯淵には分かる。

かなり険しい表情をしている。眼には困惑や動搖の色が浮かんでいた。夏侯惇のこんな表情を見たのは久しぶりである。

(……どうしたんだ？ 一体何が……)

夏侯淵が心配していると夏侯惇が青髪の少女と共にこちらを向いた。

「紹介が遅れましたね。こちらが『夏侯威』字を『李權』と言います

す

(えー?)

夏侯淵は驚く。夏侯惇が青髪の少女に紹介した名は夏侯淵の息子の名であった。

夏侯淵は夏侯惇に真意を訊こうとしたが、止めた。夏侯惇が眼で

『話を呑ませぬ』と語っていたからだ。

「えー……と、夏侯威だ。よろしく」

「よろしくお願い致します、夏侯威殿。私は姓が趙、名は雲、字を子龍と申します」

（…………へ？）

夏侯淵は思わず真意を問いただすかのように夏侯惇の顔を見る。その視線に気が付いた夏侯惇は首を振っていた。

「……あ、ああ。よろしく趙雲……殿」

動搖を隠そうとしたが無理であった。意味が分からぬ。何故、この少女の名が趙雲子龍なのかが。

（……嘘を言う奴の眼じゃない。ていつ事は本当なのか？ いや、

同姓同名なのかも……）

夏侯淵の疑問は更に深くなつて行へばかりだ。

## 拍子抜けな出会い（前書き）

人名や地方名で漢字表記が出来ない物は違う漢字を使用するか力  
タ力ナで表記しますので御了承下さい。

## 拍子抜けな出会い

「ほう、夏侯霸殿は豫州の沛国出身でしたか」

「ええ。良い所でしたよ」

青髪の少女 趙雲の言葉に夏侯惇は応じる。

趙雲と出会いつて十数日が経過していた。

どうやら趙雲は全国放浪の旅をしている最中であるらしい夏侯淵と共に同行させて貰っている。

ちなみに夏侯惇は夏侯霸、夏侯淵は夏侯威と名乗つておいた。

趙雲に出会い彼女の名前を聞いた際、夏侯惇は嫌な予感がした。直感と言つても良いだろつ。

死んだ筈の自分達が若返つて蘇つた。黃巾党と名乗る集団。そして趙雲と名乗る彼女。

夏侯惇はとつさに名前を偽つた。後に彼女から様々な事を聞き出し、名前を偽つた事が正しい判断だつたと思う。

この国は夏侯惇が生きて存在していた国と全く同じであった。しかし幾つかの相違点があった。

ほとんどの武官文官が女性である事や孫堅が既に死去している等々。

正直、愕然とした。曹操が女性である事にも驚いた。そして曹操の下には女性となつた自分達もいる事にも驚愕した。全く理解し難い現実である。

余談だが偽名に夏侯淵の息子の名を使つた事で夏侯淵から愚痴を言われる羽目になつてしまつた。

仕方がない。あの時、思い付いたのが夏侯淵の息子の名だつたのだから。

「それにしても申し訳ありません。趙雲殿の旅路に御同行させて頂いて」

「なに、私は構いません。夏侯霸殿と出会つ寸前まで仲間と三人で旅をしていたのですから」

夏侯惇の言葉に趙雲はさう答える。どうやら他にも旅仲間がいたらしい。

燐々と降り注ぐ陽光の中、夏侯惇達は話ながら歩み続ける。若干、夏侯淵が会話に参加していないが気にはしないでおこう。

「それでも良い天気ですね」

「そう  
」

彼の右側にいる趙雲が空を仰ぎながら言つた事に応じようとしたが止めた。そして左側にある茂みを見る。何かの気配がする。

「む?  
どうかしましたか?」

「何かが来る

趙雲が疑問の声を上げ、夏侯惇の代わりに夏侯淵が答える。  
夏侯淵は既に剣の柄に手を乗せている。

夏侯惇も既に構えている。趙雲も慌てて槍を構えた。この十数日の間に少しだけだが趙雲と手合せをし、指導をしていた。

夏侯惇達の剣捌きを見て自分より上だと感じたらしく、趙雲から

請うて来たのだ。

手合せを通じて夏侯惇達の実力は趙雲が思っていたよりも更に上  
だという事を明確に実感したようだ。

その為か賊達に襲われた時等で夏侯惇達の指示を聞くよりになつた。

氣配はどんどん近付いて来る。何か叫んでいるようだ。更に氣配が近付いた時に、やつと何を叫んでいるのか聞き分けられた。

「何だ？ 来るなつて？」

「夏侯威殿、私に訊かれましても……」

「…………恐らく何かに追われているようですね」

夏侯惇は冷静に答える。声色からして女性。気配からして複数の

「……獸？」

「げ、マジで？」

「流石は夏侯霸殿！　この距離で、しかも気配だけで分かるとは…。」

趙雲が感嘆の声を上げ、夏侯淵は心底嫌そうに呟つ。まあ、当然の反応だな、と夏侯淵の反応に納得する。

「李権、そんな反応しないで助ける準備をしましょ！」

「いや……でもね、げ　ち、ちぢぢ仲権殿」

夏侯惇の事を元讓と呼びそつになつた夏侯淵を軽く睨み付ける。すると夏侯淵は少し震えながら自分の息子である夏侯霸の字で呼んだ。

「昔、虎に襲われたからといつてそこまで恐がらなくて良いでしょ！」

「なー!? 昔、虎に襲われた事があるのですかー!?」

「ええ、一度だけですけどね」

驚愕の声を上げる趙雲に応じる夏侯惇。襲われた事は一度だけである 逆に襲つた事は何度もあつたが。

「あれは……仲権殿が虎を襲い過ぎたから、その復讐に虎が」

「李権、何か言いましたか?」

ボソッと呟いた夏侯淵の方へ視線を向ける。すると夏侯淵は何故か知らないが言葉を止め余計に震え始めた。

少し睨んだだけなのに、化け物を見たかのように震える何て物凄く失礼な奴だ、と内心思つてしまつ。

「さて、お喋りは止めて……来ますよ」

夏侯惇は剣を構える。そして、背の高い茂みから人が飛び出して來た。

長身の少女だ。髪は白と黒。まるで牛だな、と思ったのは内緒だ。

眼は切れ長で普段ならば勇ましさを醸し出してくるだらうが、今は田一杯に涙を流している。

服は黒を基調とした動き易そうな物だ。ただし、へそ出し。この国は服はよく分からぬ物が多い、と頭の片隅で思う。

「た、たた助けてええええええええええええ！」

白黒髪の少女は涙声で叫びながら夏侯惇に抱きついて来た。

（なー？　しまったー？　これでは剣が抜けないー！）

夏侯惇は顔を歪ませる。夏侯淵も剣が抜けない事が分かつたのであろう。

慌てて夏侯惇の前に出て、盾にならうとする。

しかし、遅かった。茂みからは何匹もの獣が夏侯惇田がけて飛び付いて来た。

夏侯惇は身体を捻り、白黒髪の少女だけは守ろうとしたが。

「？」

七

夏侯淵と趙雲が間抜けな声を上げる。夏侯惇も啞然とした。唯一、白黒髪の少女だけが泣き叫んでいる。

「犬ですか」

夏侯惇は睡然としたまま呟いた。何と言つか正直、拍子抜けである。

可愛らしく尻尾を振りながら、じゃれて来る犬に本気で恐がつて  
いる白黒髪の少女だった。

## 混沌な一日（前書き）

（注意）

現在位置は、まだ義陽郡です。

## 混沌な一日

あの後、事情を訊く為に白黒髪の少女を伴つて近くの村の飯屋に来た。

座っている場所は夏侯淵と趙雲が夏侯惇の向かい側。隣に白黒髪の少女といつ配置である。

「……成る程、貴方が尊敬する方の下へ行き仕合しようとしたが断られた、という訳ですか」

「ああ……『お前にはまだ早い。もっと見識を深めて』と言われた……」

夏侯惇の問いに白黒髪の少女は無念そうに言つた。

「あー？ そんなことに甘つんじゃねえよ！ 違つてよー！」

「フフフ、これで私が優勢になつたようだな

「何故、私の仕官を認めて頂けないのですか桔梗様ああああああああ！」

「はあ」

夏侯惇は溜め息を吐き、頭を抱えたくなつた。話が進まない。夏侯淵と趙雲は携帯式の囲碁を楽しんでいた。それに、いつの間にか趙雲は夏侯淵に対して敬語を使わなくなつてゐる。

仲が良くなつたのは良い事だが、時と場所をわきまえて欲しい。

白黒髪の少女は少女で、断られた時の事を思い出したのか頭を抱えながら泣き叫んでいる。

「くそうーーまだだ、まだ終わりはせんーー むう…………見え  
たーー そーだあああああああーー」

「ぬわあああああにいいいいい！？」

「桔梗様ああああああああ！」

「あはは」

再び溜め息を吐く。素晴らしい運気と見ていい。もう自分の手に

は負えない。

この店の主人や周りの客は好奇の目でこちらを眺めている。

「ぬわああこの「アーッ」」やさしきの事でやうせはせんー やうせはせんぞおおおおおおおー」

「ぬう、やるな。だが、まだ聞合ひが甘いー。」

「ぬうおおおおおおおおおおおおおおおおーー。」

「桔梗様あああああーー。」

「あ、申し訳ありませんが、この飲み物をお願いします」

最早、気にしないでおこう。夏侯惇は無視する事にした。次いで近くにいた店員に飲み物を注文する。

「へんうーー だが、どこかに活路がある筈だー。」

「ハハハハハ！ 压倒的ではないか、我が軍はーー。」

「ううう、桔梗様ああ」

「注文の品は一通りでよろしかったでしょうか?」

「はい。ありがとうございます」

もう他人の振りである。偶然にも窓側の席であった為、外を眺める事が出来た。

雲一つ無い晴天である。蒼穹に浮かぶ太陽が発する暖かい光が彼を優しく包み込む。

外では人々が行き交い、話し合つ。平和そのものだ。

「見えた! そこだ!..」

「なんのー てやー」

「おぐほえあ! ? 謀つたな、謀つたな趙雲ー! 」

「ううう……桔梗様ああ」

「フフ、謀られる方が悪いのだよーー。」

「…………はあ」

再び溜め息を吐く。本当に平和だ

一部を除いては。

## 防衛戦（前書き）

（注意）

三国志の時代の一里は約四百メートルです。

あの後、白黒髪の少女も一緒に旅をする事になった。何度も賊の襲撃もあつたものの、ようやく義陽郡を抜ける事が出来た。

「それにしても、まさか彼女が魏延殿だつたとは」

「そうですねえ。魏延殿が義陽郡出身つていう事は知っていたんですけどね」

驚いた事に白黒髪の少女は魏延だつたのだ。しかも年齢が少し違う。

夏侯惇達が知つてゐる魏延は趙雲よりも若い。だが、彼女はどこからどう見ても女性の趙雲と同じくらいの年齢だ。

「私達が生きていた国とは、似てゐるよう違つてこいつ事を改めて思ひ知られました」

夏侯惇は自分と隣にいる夏侯淵の前を歩いてゐる一人の少女を見ながら言つた。夏侯淵も隣で頷いてゐる。

「さて、これからどうしましょつか

「へ？ 陳留か許都に行くのでは？」

夏侯惇の言葉に夏侯淵は間抜けな声を上げながら応じる。確かにその一つは曹魏の中心地である。しかし。

「……妙才。黄巾党を討伐している時、我が君は太守ではなかつたでしようが」

「…………あ」

そう曹操は黄巾党を討伐していた時は騎都尉であったのだ。討伐が終わつた後は濟南の相だ。

「そついえば……騎都尉だ。え、それじゃ……」

「騎都尉の後は濟南の相。濟南の相を務めた後は西園八校尉。そして反董卓連合の後に東郡太守です」

そう言いながら昔の記憶が蘇る。曹操達と共に必死に駆けたあの頃。いつ滅びてもおかしくはなかつた。

実際、何度か危つかつた事もある。しかし生き延び、そして広大な曹魏を築いた。懐かしき日々だ。

「……じゃあ、ビリビリか分からないつて事?」

「……そうなりますね。まあ、趙雲殿の話によりますと、ここいらにまだ黄巾党は来ていないらしいですし……ゆうべ探しましょつ」

落ち込んだように呟いた夏侯淵を励ます。恐らく曹操はどこかを駆け回つてゐるのであらう。

夏侯淵の様子からすると再び曹操に仕える気のようだ。無論、夏侯惇もそのつもりだった。

しかし、田の前で会話しながら歩いてゐる青髪の少女 趙雲と旅をする中である疑問が浮かび上がってきた。

初め夏侯惇はその疑問は杞憂だ、と思つた。しかし趙雲と旅を続ける内にその疑問はどんどんと大きくなつて行つた。

そして田の前で趙雲相手に会話している白黒髪の少女 魏延に出会い、その疑問が確信へと変わって行つたとしている。

信じたく無い。もし夏侯惇が考へてゐる最悪の場合であつたら。

夏侯惇の心は一つの思いの間で揺れ動いていた。もし夏侯淵のよう夏侯惇がずっと曹操の傍らにいる事がなければ、これ程苦しむ事は無かつただろう。

しかし、夏侯惇は曹操の片腕として傍らにいた。曹操の傍らで様々な事を学んび、様々な事を考慮して物事を考察するようになった。これが悩みを作る原因になつてしまつた。

(……私は……私はどうすれば……)

悩み続ける夏侯惇。しかし突然、我に返つた。何かの臭いがする。嗅ぎ慣れた臭いだ。

「…………妙才」

静かに呼び掛ける。夏侯淵も気が付いているようだ。先程までとは違つ表情 将としての顔だ。

「…………一里半（約六百メートル）つて所でしょうか……クソッ、追

い風でなければもつと早く分かったのに

「……それを言つても仕方ありません。それよりも早く行きますよ」

夏侯惇は走り始め、夏侯淵もその後に続く。魏延と趙雲を抜かす。背後で何か言つてゐるようだが今はそれどころではない。

田の前にある小高い丘を風を切りながら駆け上がり頂上へとたどり着いた。

「夏侯霸殿、急に走り出してどうかし　これは！？」

「まつたく、なにを走つて　な！？」

趙雲と魏延も追い付いたようだ。二人共、目の前に広がる光景に驚きの声を上げる。

村の各所から黒煙が上がつてゐる。そして怒号、悲鳴、喚声が聞こえて来る。

村と言つてもかなり大きい。その村の外側から中央へと向かって行く兵士達。

その兵士達の頭には黄巾が巻いてある。明らかな戦だ。村の各所でぶつかり合いが起きているらしい。一番大きいのは中央である。

「馬鹿な…… 黄巾党はまだここには進行していない筈では……？」

（黄巾党か…… 内部に侵入した者達も含め、およそ一千から三千程度。村の防衛戦力は一千以下だろう）

趙雲の声を聞きながら冷静に判断する夏侯惇。喚声は更に大きくなつて行く。

「李権、私は中央に行きます。貴方は各所で孤立して戦っている部隊を掌握して下さい。掌握後、中央で合流しましょう」

「御意……」

夏侯惇は呼び方を変えながら夏侯淵に指示を出す。中央の戦力が一番多いのが見て取れる。防衛勢力の本陣はそこだろ？

「趙雲殿、魏延殿は私に付いて来て下さい。よろしいですか？」

「は、はい！」

「え、あ……ああ」

「では、行きますよ

夏侯惇の問いに詰まりながら答える一人。その答たえを聞いたのと同時に夏侯惇は声を掛けながら走り始める。それと同時に夏侯淵も走り始めたようだ。

夏侯惇は田の前にある、村の南口へ向けて駆けて行く。少し後方から足音があるので趙雲と魏延も付いて来ているようだ。

南口の前には十数名の兵士がいた。しかし誰もが夏侯惇に背中を向けている。丘の上から確認した時から気が付いていたのだが、黄巾党の兵士は練度が低い。

命令系統がしつかりしていないのか部隊同士の連携も出来ていない。その上、全部隊を完全に掌握していないのだろう。だから田の前の兵士達のように動いていない兵士が目立つ。

南口へと近づく。まだ兵士達は気が付いていない。夏侯惇は剣を抜く。

更に近付く。よつやく夏侯惇に一番近い者が足音に気が付いたのかゆっくつと振り返つて来た。しかし、時既に遅し。夏侯惇の間合いである。

気が付いた兵士に向けて剣を横に一閃させる。首が宙に舞い上がつた。一瞬後に鮮血が噴水のように噴き出した。

そのままの勢いで隣にいた兵士の胸を剣で貫く。何が起きたか分からぬ、といった表情のまま貫かれた兵士は息絶えた。

貫いた剣を引き抜きつつ絶命した兵士が持つていた槍を奪い、左手で持つ。

剣を引き抜く勢いを利用して身体を半回転させる。そして、その勢いで向かつて来た兵士に槍を投げた。

槍は唸りを上げながら兵士を貫く。貫かれた兵士は悲痛な叫び声を上げながら倒れ込んだ。

左側から一人、雄叫びを上げ突っ込んで来る。夏侯惇はそのまま左側に飛び間合いを一気に詰める。

一気に間合いを詰めて来るとは予想していなかつたのだろう。兵

士は戸惑った様子で一瞬止まる。

夏侯惇はその兵士の顔へ左肘を叩き込む。

叩き込まれた兵士はうめき声を上げながら仰向けに倒れた。すかさず夏侯惇は右足を振り上げ、倒れた兵士の喉へと踵を振り落とす。

足から伝わる喉を碎いた感触を無視しつつ近くにいる兵士との距離を詰める。その兵士は手に持った槍で突きを放つて来た

夏侯惇は最小限の動きで避ける。槍が頬を掠め、耳元で唸り声を上げる。一気に間合いを詰めて行く。

兵士は慌ててもう一撃を放とうとするがもう遅い。剣で兵士の喉を貫く。右手を剣から離し逆手で槍を奪う。そして、右片腕だけで背後に槍を突く。

槍から伝わる感触で背後から近付いて来た兵士を貫いた事が分かった。背後にある兵士はうめき声を上げている。

喉に刺さったままの剣を引き抜き、振り返る。膝立ちで腹を槍に貫かれた兵士がいた。

その兵士の首を刎ねる。血が舞い散る。風に運ばれて来る血の臭いが鼻腔を刺激する。

辺りを見渡すと黄巾兵は全員倒れていた。どうやら趙雲と魏延が片付けたようだ。その一人は夏侯惇から少し離れた場所に立ち、若干青い顔でこちらを見ている。

（まあ、もう少し返り血を浴びましたからね。そんな事よりも急がないこと……）

「二人共、次に行きますよ」

夏侯惇はそう言いつつ村の中央へと足を運ぶ。村の至る所に黄巾兵がいたので斬り捨てながら進んだ。

しばらく歩いて、ようやく中央付近にたどり着いた。数百名規模の部隊が中央へ向けて突撃を繰り返しているのが見て取れる。

しかし防柵が巧妙に仕掛けられており中々突破出来ずにいる。どうやら村を守る側に知恵者がいるようだ。確実に黄巾党軍に損害を被っている。

「いのまま横撃します」

趙雲と魏延に言つたつもりだが、返事を待たずに敵部隊の横腹へ

と向かつた為、聞こえていたか分からぬ。

黄巾兵達は攻めるのに夢中で夏侯惇が近付いて行くのに気が付いていないようだ。

(夏侯元讓、参ります!)

心の中で叫び、黄巾の群れへと突っ込んだ。一人目の首を斬り裂き、手に持っていた戟を奪う。

すぐさま奪つた戟で手近にいた兵士を突き、斬り裂く。そして敵部隊の中央へと進む。

中央は他とは違い、比較的動きがしつかりとしている。恐らくそこに部隊長がある筈だ。しかし比較的だ。しつかりと訓練を受けた正規軍と比べたら確実に劣る。

中央へ進む途中で戟を投げ捨て、倒した兵士の武器を奪う。なまくらな武器が多いからである。何度も斬つていたら壊れる。

(それに比べて、この剣は業物ですね。切れ味も落ちませんし……)

気が付いた時に身に付けていた剣は中々、切れ味が落ちない。流石に刀身に血糊がべつたりと付着していたら切れ味は落ちるが。

奪つた武器を更に敵兵に向け、投げ捨て新たに剣を奪う。敵を蹴散らしながらようやく敵部隊の中央へとたどり着いた。

「てめえ、何者だ！？」

部隊長らしき男が叫んで来た。隣には副隊長らしき男もいる。

「その首、頂きます」

「何を言つ

言葉が終わる前に首を刎ねた。驚愕の表情を浮かべたまま、首は地に落ちる。もう一人の男が慌てて腰から剣を抜こうとするが遅い。

先程、奪つた剣で胸を貫く。貫かれた男はゆっくりと地に伏した。いつの間にか辺りは静まり返っている。

「敵将、この夏侯仲権が討ち取つた！！」

夏侯惇はこっちを呆然と眺めている黄巾兵達を睨み付けながら大聲で叫んだ。

黄巾兵達が動搖しているのが見て取れる。そのまま睨み付け続けた。ふいに夏侯惇の後方から喚声が聞こえてきた。

どうやら夏侯淵が孤立していた部隊を集めてこっちに来たようである。

喚声は大きくなつていく。

黄巾兵は一人、また一人と逃げ始めて行き、しばらぐすると一気に逃げ始めた。

「夏侯霸殿、お怪我はありませぬか?」

趙雲が心配そうに尋ねて來た。隣には同じように心配そうな顔をした魏延もいる。夏侯惇は優しく頬笑みながら応じた。

「ええ、大丈夫です。趙雲殿や魏延殿は?」

「フフ、私がこの程度で怪我をするとでもお思いですか?」

「ふん、ワタシがこれくらいで怪我をするとども思つたのか？」

二人同時に同じような事を言い、顔を見合わせている。まつたく頬笑ましい光景である。

「李権、ただ今戻りました仲権殿」

「御苦労様です李権」

隣にやつて来た夏侯淵にねぎらいの言葉を掛ける。夏侯淵はチラツと趙雲達を見た後、更に近付き小さな声で話し始めた。

「孤立していた部隊を全て集めましたが、戦える者は三百程度です。敵部隊を少し蹴散らしましたから当分の間は攻めて来ないかと」

「いや、恐らくまた来ます。あれは先陣でしょう」

夏侯惇も小声で答えた。その答えを聞いて夏侯淵は険しい顔をする。

「……どうであつたが退いた訳だ。どうします、これから？」

「乗り掛かった船です。最後まで付き合いましょう。後はこの郡の太守へ援軍を要請します。最悪の場合、隣郡の太守やこの州の刺史にも」

「……こちらの総戦力はおよそ五百ですかね」

防柵の向こう側からこちらの様子を窺っている者達を見て予測する夏侯淵。夏侯惇はその言葉に頷く。

「どうせ戦っても厳しい戦になるでしょう」

防柵からこちらに向かつて来る者がいる。数は三人。どうやら代表者らしい。

「……また女かよ。しかも何だよあれは……」

夏侯淵が呆れたように呟く。出て来たのは銀髪の少女に紫髪の少女、そして茶髪の少女。

「まあ、やうこつ國だと思つておきましょ」

そう口では言つ物の夏侯惇でさえ流石にあれは駄目だらう、と思つてしまつ。

銀髪の少女はまだ良い。軽鎧に手甲に脚甲を着けている。紫髪の少女、及び茶髪の少女は論外だ。論外過ぎる。

紫髪の少女は尋常ではない程、露出度が高い服を着ている。特殊な性癖でもあるのだろうか。もしそうであれば、あまり近寄りたくない。

茶髪の少女はまだ幾分かマシだが胸の下から腰にかけて完全に露出している。こちらも少々特殊な性癖の持ち主なのだろうか。

「……ここは変態の集まりか？ といつか、よく守り切れたな」

「……妙才、それは言わないでおきましょう」

しみじみと言つ夏侯淵に注意を促した。本当に全く完全に違う國へと来たという事を嫌でも教えられる光景だ。

（……先行きが不安です）

じこまでも透き通るよつに青い空を仰ぎながら心底心配していく  
う夏侯惇だった。

## 夏侯惇の決断（前書き）

（注意）

・刺史、牧

簡単に言えば州の長官。

・太守

簡単に言えば郡の長官。

・県令、県長

簡単に言えば県の長官。

ちなみに

州の中に郡

郡の中に県

と二つようになっています

あれから八日経つた。現在、夏侯惇は自分の部屋としてあてがわれた一室にいる。

黄巾党を撃退した後、夏侯惇は急いで村の防備を固めた。更に二日目までは攻めて来ないだろう、と予測した。それ以降になると、どうなるか分からぬ。

とにかく夏侯惇は夏侯淵とその他数名で近隣にいる豪族の下へそれぞれ向かった。豪族は私兵を少なからず持つてゐるからだ。

その私兵を少数でも良いから借りに行つたのである。成果は思つていたよりも良かつた。豪族も自分の私有地を黄巾党に荒らされたくないのだろう。

二日間、集めに集めて一千名集めた。正規軍よりも劣るが一般的の黄巾党よりはマシだろう。村の方は兵士を集めている間に大量の罠や防柵を設置させておいた。

更に負傷者や女性、子供、老人は近くの村に避難させた。本当は村人全員を避難させたかったのだが、男達は自分達の村は自分達で守る、と言つて残つてしまつたのである。

正直、邪魔だった。戦闘訓練を受けていない者が戦場に出ても足を引っ張るだけだ。しかし言つ事を聞かないで裏方の仕事に撤して貰う事にした。

三日目の晩、黄巾党が攻めて来た。夏侯惇の予想通り、始めて攻めていたのは先陣だつたらしい。黄巾党の兵力は約八千。

数に物を言わせて力攻めで来た。しかし幾重にも仕掛けた罠や防柵を巧みに利用し、全て防いでいる。

早くして三日後には援軍が来るであろう。それまで防ぎ切る自信もある。食料や水も心配無い。だが、夏侯惇には頭を悩ましている事が幾つかあった。

まず、村の代表者として夏侯惇達の前に現れた三人の少女である。銀髪の少女は自分の事を樂進と名乗った。同僚の名前であったが、あまり驚かなかつた。正直、慣れてしまつた。

銀髪の少女は夏侯惇が知つていてる樂進に似ていた 似ているだけだが。

問題は紫髪の少女と茶髪の少女だ。

紫髪の少女は李典と名乗つたのである。もう、止めてくれ。本気

でそう思つた。智将 李典の面影は全く無かつた。畠や防柵を設置する時、役に立つてくれたが。

しかし、まずはその服をどうにかして欲しい。一度、本気で相談したがキッパリ断られたので諦めた。

これだけでも充分だからもう厄介な事は遠慮したい。しかし神は何かと意地悪なようだ そもそも神を信じてはいないのだが。

茶髪の少女は于禁と名乗つたのだ。魏の名将 于禁の名を。どこが于禁なんだ、いい加減にしてくれ、と言いつこうになる。

（戦闘中に服の汚れを気にする程ですからね。正気か、とも思つてしまひましたよ）

紫髪の少女と茶髪の少女の名前を聞いた瞬間、目眩がする程であった。夏侯淵は泣きたくなつたらしい。

更に彼女達の戦い振りを見て今度は頭痛までするようになつた。

夏侯惇が知つてゐる三人であれば個人の武力は樂進、于禁、李典の順である。

兵の指揮では于禁が飛び抜けて秀でており、樂進と李典が同じく  
らしい。

知力や知識では李典、于禁、樂進だ。

それがこの国の樂進達になると個人の武力では樂進、李典、于禁。

兵の指揮は樂進、李典、于禁の順だがほとんど差は無い。  
知力や知識では李典、樂進、于禁である。

于禁が物凄く酷い。夏侯惇が知つてゐる于禁とは差が激し過ぎる。  
もう泣きたくなってきた。  
だが恐ろしい事にこの三人に関する問題はまだまだある。

三人の中で一番優秀と思われる樂進だが時が読めない。退き時が  
読めないのである。更に一度戦い出すと周りが見えなくなる。

(これでも三人の中では一番マシなんですよね……はあ)

そしてもう一つ夏侯惇の頭を悩ませてゐる事があった。兵の指揮  
である。

勿論、夏侯惇と夏侯淵は問題無い。問題なのは趙雲達であった。

趙雲達は兵を率いた経験がなかったのだ。

全くの盲点だった。しかし、よくよく考えれば気が付く事柄だ。どこの勢力に属していれば兵を指揮する機会にも恵まれるだらう。

だが残念な事に彼女達は在野。余程の事がない限り兵を率いる事は無い。

しかし、不幸中の幸いにも夏侯淵が助けた者の中に李通がいたのだ。李通は曹魏の中でも勇将として名高い。

そして、この国の李通は数百程度の兵の指揮を経験した事があるのだ。どうやら雇われ部隊長をやっていたらしい。

更に喜ばしい事にこの国の李通は男だった。夏侯惇は歓喜のあまり李通と握手していた。

とにかく趙雲、魏延、樂進、李典、于禁にはそれぞれ四十名ずつ率いて貰つた。夏侯惇と夏侯淵は三百名ずつ。李通は残りの一百名を率いる。

最後に一つ、夏侯惇を悩ませてゐる事があった。趙雲達に出会つて生まれた疑問である。

それは樂進達に出会つた事によつて確信に変わつてしまつた。それでも悩みに悩む夏侯惇。どうすれば良いのか分からぬ。

いや、分かつてゐる。分かつてゐるのだが決心出来ないだけである。

『決断の時だ！！ 元譲！！』

聞き覚えのある声が真正面からした。いつまでも悩み続けた夏侯惇がいつの間にか、ウトウトとまどろんでいた時である。

夏侯惇は驚き、急いで声がした方を向く。

『「」の言ふ道を行け！！ いつまでも幻影に捕われるな…』

そこには背の低い男が立つていた。しかし威風堂々とした、その身体からは凄まじい霸気が満ち溢れていた。

知つてゐる。その男の事は誰よりも知つてゐる。誰よりも強く、誰よりも氣高く、誰よりも雄々しく、誰よりも賢い。そして誰よりも孤独であった。

「我が君！？」

夏侯惇は叫びながら立ち上がった。しかし、もうやれることは誰もいなかつた。

夢を見ていたのであるつか。しかし心が軽くなつた。

（己の信ずる道……ですか）

決めた。もう悩むまい。幻影に捕われるな、全くその通りである。捕われ過ぎていたのだ。これから自分の信ずる道を行こう。

（……民の平和。これ以上、民が苦しむ所を見たくありません。その為の道）

いつの間にか窓から口が差し始めた。夜が明ける。彼の心にも口が差し闇を打ち払い、進むべき道を照らしている。

まずは夏侯淵に話そう。恐らく始めは拒否するだろう。しかし、気が付いている筈だ。話せば必ず分かつてくれる。

「夏侯霸殿！！ もう少しで援軍が到着するよつです！－！」

扉の外から趙雲の声がそう伝える。援軍が来るのが少し早い。有

能な者に率いられているな。そう思いながら夏侯惇の頭の中が切り替わる。決着を付ける時だ。

「分かりました。全軍に出撃準備を。援軍が到着したのと同時に打つて出ます」

「はせつ……」

もつ悩むまい。」  
れと決めたら後は突き進むのみ。どんな困難な道であるつとも行くのみ。夏侯惇はそう決心しながら部屋を後にした。

## 疾風怒濤（前書き）

（余談）

（本編には全く関係ありません）

- ・『正史』と『演義』の違い

日本で一般的『三國志』と言われているのは『三國志演義』です。

これは『明』の時代に作られた『歴史小説』です。  
事実もありますがフィクションも含まれています。

七割事実、三割フィクションらしいです。

（私としてはフィクションの割合がもう少し多いのではないかあ、  
と思うのですが……）

これに対しても『正史』は『歴史書』です。事実が書かれているとは  
思うのですが、勝者からの視点から書かれているので多少誇張され  
ている箇所もあるかと……。

まあ、『正史』と『演義』の違いを簡単に言えば……。

関羽の『青龍偃月刀』

## 張飛の『蛇矛』

この一つは有名ですよね。  
しかし実際には三国志の時代である、後漢末期から三国時代には存在しません。

呂布の『方天画戟』でさえ存在していたか怪しい所です。

他には、有名な『諸葛亮』孔明

物凄い軍師ですよね……『演義』では。

『正史』では……ね。

差程……まあ……ねえ。

どうひかと言つと政治家ですね。

まあ、とにかく『正史』と『演義』の違いを探すと色々樂しいです  
よ。

皆様も興味を持たれたら一度、調べてみては如何でしょうか。

ちなみに私は『正史』も『演義』も大好きです。

（注意）

あくまでも余談ですから。

あと私は専門家ではありませんので間違いがあるかも知れません。

もし、ありましたら御手数を掛けますがお知らせ下さい。

燐々と光り輝く陽光を浴びて反射する兵士が持つ剣の刀身や鎧。そよ風が優しく馬上の夏侯淵の身体を包む。

「さあて、行きますか」

夏侯淵は臨時に編成した騎馬隊を率いて村の西口へと進み始める。数は百騎。

敵主力は北から来るこりらの援軍に備えて西口辺りに展開している。

今までの防衛戦で兵士百五十名を失い、総戦力は八百五十。部隊も再編し、夏侯惇が歩兵四百名。李通が歩兵三百名。そして夏侯淵が騎兵百騎である。

残りの五十名は負傷者で村で待機。ちなみに趙雲と魏延は夏侯惇隊。樂進、李典、于禁は李通隊に所属している。

「ひらは百五十名の損害だが、敵はその十倍以上の損害を出している筈だ。」

敵軍が見えて来た。北ばかりに備えて、こちらは全く備えていない布陣だ。

(陣形が粗いし、士気も低そうだ)

夏侯淵は黄巾党の陣形を眺めて思つた。兵力も五千弱だろうか。

視界の端に土煙が見えた。北から上がつてゐる。どうやら援軍のようだ。黄巾党にも緊張が走るのが見て取れる。

(それでも、俺達は全く無警戒かよ。まあ、良いけどな)

夏侯淵は後ろをチラリと見る。夏侯惇隊、李通隊の順に整列している。

夏侯惇と田が合つた。夏侯惇が頷く。行け、の命令だ。

「よし。お前ら、とにかく俺に付いて来いよー 行くぞーーー！」

夏侯淵は駆け始めた。続いて騎馬隊も駆け始める。敵は北に氣を取られて、まだこちらに氣が付いていない。

たちまち敵との距離が詰まる。夏侯淵の真正面にいる敵は歩兵ばかりだ。夏侯淵は槍を構える。一いち方に気が付いたようだ。

しかし構わず突っ込む。敵軍とぶつかった。槍を振り回し歩兵を蹴散らす。そのまま分断して行く。敵は混乱の極致だ。

無理せずに退く。混乱から立て直つた一部の敵は追つて来る。急に九十度、右に曲がる。敵は騎馬隊の急な動きに付いていけずそのまま直進する。

そこにいるのは『』を構えて手ぐすね引いて待つている夏侯惇と李通の部隊だ。

夏侯淵は再び騎馬隊を敵本隊へと向け、風を切り裂きながら突撃する。敵とぶつかつたらすぐに退き、先程誘導した敵部隊の方へ向かう。

敵は再び追つて来る。夏侯淵の目の前には先程、夏侯惇達の『』兵による一斉射により混乱している敵がいる。

その敵へ突撃し向こう側へと突破する。その間にも槍で敵兵を蹴散らした。

背後をチラリと確認する。混乱している敵と夏侯淵を追つて来た敵がぶつかり思つよう動けずにいた。合計で一千程だ。

そこへ再び夏侯惇達の一斉射。混乱は更に深まつていく。本隊は本隊で北から来る援軍が目の前に迫つてゐる為、増援を出せないでいる。

援軍は視認出来る距離まで近付いていた。数は騎馬一千、歩兵四千の合計六千だ。黄巾党軍の本隊は援軍の方へと進軍する。

行ける、ここだ。夏侯淵はそう思いながら馬を敵本隊へと向ける。敵は移動した為、一瞬だけ陣形が乱れている。

夏侯淵は騎馬隊を率いて突撃する。残りはハ十二騎。敵本隊は三千以上はいる。

震えた。無論、恐怖からでは無い。武者震いといつ奴だ。槍を捨てて弓を構えた。

射つ。矢は唸り声を上げながら命中する。本隊にぶつかるまでに八人を射殺した。弓を片付け剣を構える。

敵兵の顔が恐怖で歪んでいた。ぶつかる。四人、首を刎ね飛ばし

た。そして突き進む。その間にも敵兵を斬り裂く。中央に牙門旗とその周りに騎馬隊がおよそ八十騎。

敵将はそこにいる。周りの騎馬は旗本だらう。夏侯淵はそこに突き進む。

背後をチラリと確認した。付いて来ているのは五十数騎。戦死ではなく、夏侯淵に付いて来れない者の方が多いのだろう。

突然、夏侯淵と敵の八十騎の間に別の騎馬隊が割つて入つて來た。黄巾を巻いている。どうやら本陣が危ないと感じたのでこちらに來たのだろう。数は三十騎程。

「邪魔だあああああああ！」

夏侯淵は叫びながら敵騎兵を斬り裂く。片腕が舞い上がり、敵騎兵は落馬した。更に左から來た騎兵の首目がけて剣を一閃させる。

風を斬り裂き、皮膚を喰い千切り、骨を粉砕する。首は天高く舞い上がり、血が噴水のように舞い散る。

一人、また一人と斬り倒す。ひたすら敵の牙門旗の下へと向かう。

「我が行く道を遮る者は叩き斬る！！」

夏侯淵はそう言つた後、吠えた。練度や兵数が同じくらいであれば、後は気迫の問題だ。

夏侯淵の気迫により敵は明らかに怯えている。馬も怯えているのが分かる。そして援軍部隊も攻撃を開始したようである。敵は更に乱れる。

夏侯淵は剣を構えて牙門旗に向かつて突撃した。

胴を薙ぐ。返り血をもろに浴びたが関係無い。首を刎ねる、腕を吹き飛ばす、身体を貫く。牙門旗の傍に敵大将らしき者がいた。

馬上で斧を構えて、こちらに向かつて来る。夏侯淵も剣を構え直し馬を走らせ、交差した。

剣から伝わる確かな感触。背後から何かが落ちる音。念の為に背後に振り替えた。馬上には首から上が無い死体。地面には何が起きたか分からぬ、といった表情の生首。

夏侯淵は血塗れの剣を天高く掲げ戦場全体に届くよくな声で叫ぶ。

「敵将、討ち取つたあああああああ！」

一瞬の静寂。そして喚声。残りの黄巾兵は逃げて行く。それを追

撃する援軍部隊。夏侯淵はそれを視界の端に捉えながら生き残りの騎馬隊を集め村へと帰還する。

後は正規軍の仕事である。逃げて行く黃巾党の兵士達を追つて行く援軍部隊を眺めながら村へ馬を進めた。

## 夏侯惇、心中を語る（前書き）

最近、何かと忙しくて更新が遅れてしまいました。  
誠に申し訳ありません。

## 夏侯惇、心中を語る

時は深夜。夏侯淵は夏侯惇と向かい合って座っている。黄巾党を撃退してから一日が経つた。本来ならば援軍に来た将と会談する予定だった。

しかし、援軍部隊の一部が退却した黄巾党を追つてまだ戻つて来ていないらしい。

その為、会談はその部隊が合流してから、という事になつたので現在、村の復旧作業を進めている。

夏侯惇から話がある、と呼ばれたのはそんな時であった。目の前にある机には湯飲みが置かれており、中には湯が入つていて、

「それで話とは？」

ゆつくつと湯気を上げる湯を飲んでいる夏侯惇にそう切り出した。夏侯惇が湯を飲む姿はその顔と相まって、どこか艶やかである。夏侯惇はゆつくつと湯飲みを机に置く。

「……妙才、貴方はこれからどうぞと思つていますか？」

「これからですか？」

「何を今更？」と夏侯淵は思つ。答えは決まつてゐる。

「我が君に仕えます。丁度、援軍が我が君の軍でしたし」

そう、援軍の旗印は『曹』そして『夏侯』。つまり曹操の軍であつたのだ。少し不安があるとすれば、曹操と思われる人物が金髪の少女という事だけである。

そして、その少女の傍らにいた青髪の女性は雰囲気からして夏侯惇だろう、と検討付けていた。

「……そうですか」

夏侯惇はそう言つと何かを考えるように目を伏せる。夏侯惇にしては珍しい表情だ。しばらく静かな時間が続いた。

「……私は、もしかしたら曹操軍に仕官しないかも知れません」

夏侯惇が不意にそう言つ。しかし夏侯淵は一瞬、夏侯惇が何を言

つたのか理解出来なかつた。

「な、何を……何を言つてゐるのですか元讓殿！」

信じられない。あの夏侯惇がこのよつた事を言つなんて。曹操の片腕であり腹臣中の腹臣である夏侯惇がである。

「妙才、私は別に絶対仕えないと誓つてません。この国の曹孟徳の考え方次第です」

「考え方？」

夏侯惇の言葉に首を傾げる。そんな夏侯淵を見つめながら夏侯惇は口を開く。

「ええ。貴方はこの時期の漢王朝をどう思つていましたか？」

『この国』ではなく『この時期』と夏侯惇は言つたので自分達が元々いた漢王朝だと判断する夏侯淵。

「荒れていましたね。役人には不正が蔓延し、更に役職が平然と金で売買されていましたし。中央も宦官や外戚の権力争いで乱れてい

ました。役職を金で買った者が欲望のままに民へ重税を課す。だから黄巾党が反乱を起こした訳なのですが」

夏侯淵はここで湯飲みわ手に取り、生温かくなつた湯を飲み更に続ける。

「しかし、それでも四百年続いた漢王朝の権威は衰えを見せるもの、まだ存在していました」

「やつ、そこです」

真剣な表情で夏侯惇が反応した。

「権威や権力、威光は衰えてはいるものの、まだまだ健在でした。趙雲殿達の話を訊いた所によると、こここの漢王朝も私達が元々いた漢王朝とほぼ同じ状態らしいです」

夏侯惇はこちらを射ぬくような視線でそう語る。

「妙才、もしこの時期に誰かが漢王朝を潰したらどうなりますか?」

「どう、と問われましてもすぐさま乱世に突入するでしょう。漢王

朝の権威や権力、威光がまだ健在であるから各諸侯が表立つて力を蓄える事が出来ずにいるのですから」

「何を当たり前な事を？　」と夏侯淵は思わずにはいられなかつた。しかし、そこで夏侯惇が言わんとしている事が分かつた。

「まさか……この国の我が君がそのよつた事を考へてゐる」と、

「そうかも知れません」

夏侯淵の問いに夏侯惇は答える。何を馬鹿な、と思つてしまつ。自分達が仕えていた曹操は滅び行く漢王朝を延命させたのである。漢王朝を潰すような事を曹操が考へる訳が無い。

「妙才、貴方も知つてゐる筈です。我々がいた国の者と、この国で同じ名前を持つ者は違つてこの事を」

夏侯惇は夏侯淵の心の中を読んだように言つ。夏侯淵は夏侯惇の言葉に反論する事が出来なかつた。気が付いてはいた。この国の趙雲達は、自分達が知つている趙雲達に多少似ている所はあるものの全く違う別人だという事に。

「確かに我々の主である曹操であれば漢王朝をすぐさま潰す事は

しないでしょ。しかし、この国の曹孟徳などどのような考えを持っているのか分かりません」

夏侯淵は無言のまま夏侯惇を見つめ続けた。夏侯惇は更に言葉を続ける。

「もし、この国の曹孟徳が漢王朝を存続させる考えを持つていたら私は粉骨碎身、仕えましょ。しかし、漢王朝を潰すよつた考えであれば私は仕えません」

「……つまり元讓殿が望んでるのは漢王朝の復興ですか？」

「ええ。その方が民に無駄な犠牲が出ません」

夏侯惇の眼からは意志の強い光が垣間見る。成る程、と夏侯淵は思つ。そして夏侯惇に従おう、と自分でも驚く程あつさつと決めた。

夏侯惇は少なくとも愚かな判断はしない筈である。

「元々、このようなややこしい話は自分には似合わない。ややこしい事を考えるのは昔から全て夏侯惇に丸投げしていたのだ。それに夏侯惇は少なくとも愚かな判断はしない筈である。

「分かりました。自分は元讓殿に従います」

「……案外あつさつと決めましたね」

夏侯惇は少し意外そうな表情で言つて來た。

「そりや、もう畠からせりやー」この事の対応は全て元讓殿に任せていますか？

そう言つと夏侯惇は苦笑する。そして『ありがと、妙才』と呴いた。

（さて、これからどうなるのかな？ まあ、俺は元讓殿の命令に従うだけだな）

夏侯淵は窓から見える夜空を見ながら思つ。心なしか先程より月が明るく見えた。

## 決別と新たな同行者（前書き）

最近、何かと忙しい為に更新が不定期及び遅くなりますので御了承下さい。

## 決別と新たな同行者

大きな宿屋にある部屋の一室。彼の視線の先で、漆黒に染まる長髪をなびかせる女性が長大な剣を引き抜きこちらを睨み付けて来た。

まるで猛獸の眼である。その女性の端整な顔には怒りの表現が出来ている。溢れ出る殺氣。普通の者であれば、それだけで何も出来なくなるだろう。

しかし、彼の隣にいる一人の青年は全く動じていない。一人は短い黒髪で、くつきりとした人懐っこいそうな眼が特徴的。

もう一人は耳が隠れるくらいの長さの艶やかな黒髪。そして少し、切れ長の眼。瑞々しい肌。どこからどう見ても絶世の美女にしか見えない。

彼自身も身動きする事は出来る。しかし、背中から冷や汗が出ているが。

彼 李通はもう一度、目を正面に向けた。そこには長い黒髪の女性以外にも一人いた。

一人は青い短髪で殺氣を放っている長髪の女性とは正反対に冷静

沈着だ。

もう一人は金髪の少女。しかし、その少女からは長髪の女性の殺気が可愛く思える程の霸氣を醸し出している。

「もう一度、言つわ。この曹操の下に来なさい」

「再度、申し上げますが断ります」

金髪の少女　曹操の誘いを一刀両断する美女のような青年  
夏侯霸。

その言葉に長い黒髪の女性　夏侯惇の殺気が増大した。

「貴様！　華琳様が直々に言つておられるのだぞ……」

夏侯惇が凄まじい形相で吠えた。それと同時に窓越しに雷鳴が響き渡る。昼間なのに夜のように暗い。

雨が屋根を叩く音が部屋の中についても聞こえる。まるで、この部屋の状況のようだ。

「別に構わないわ、春蘭。で、私の誘いを断るのならば、それ相応の理由があるのよね？　聞かせてくれないかしら？」

曹操の口調は丁寧だが、凄まじい威圧感を感じる。息まで苦しくなつて來た。しかし、隣の二人は全く平然としていた。

いや、むしろ人懐っこそうな目が特徴的な青年 夏侯威は曹操達を睨み返している。明らかに機嫌が悪そうだ。

夏侯霸は夏侯霸で、いつも通りの穏やかな微笑を浮かべているのだが眼が笑つていらない。むしろ据わっている。

実は」と李通は曹操の霸氣よりも夏侯霸の眼に押されていた。静かな殺氣と表現しても良いだろう。そんな感覺だ。

「貴方が目指している物と私が目指している物が違つからです」

「それは先程、貴方がした漢王朝についての質問かしら？」

曹操の言葉に夏侯霸はゆっくりと頷いた。その瞬間空気が更に張り詰める。

一触即発、とはこのよくな状況の事なのだろうか。

（早く終わつてくれ……頼むから早く終わつてくれよ……もう少し過ぎだ）

こんな事なら戦場にいる方が余程マシである。ちなみに李通にも曹操から誘われたが、夏侯霸達に付いて行く事に決めてあるので断つた。

夏侯霸達は見ず知らずの、この村を黄巾党の魔の手から助けたばかりか復旧作業にも進んで手伝ってくれていた。

その義侠心や人柄に惚れた。無論、恋するという事では無い。そもそも、そんな趣味は無い。  
とにかく夏侯霸達に付いて行く事にしたのだ。

夏侯惇は相変わらず大剣を持ちながら睨み付け、それに夏侯威が睨み返す。

夏侯霸は夏侯霸で曹操と無言で睨み合っている。

重苦しい雰囲気の中、ふいに曹操が口を開いた。

「分かったわ。でも気が変わったら、いつでも私の下に来なさい。  
歓迎してあげるわ」

「そうですか。それはありがとうございます。では、我々はこれで

そう言い夏侯霸は立ち上がり、部屋を出て行こうとする。李通はその後に続いた。背後から夏侯威の気配もするので、彼も付いて来てるのである。

「いの村を出ます」

しばらく歩いた時だった。夏侯霸が唐突にやう言つ出した。外は相変わらず激しい雨が降っているらしい。

「やうですね。早く出ましよ」

「李通殿はやうですか？」

「え？ あ、はい。夏侯霸殿や夏侯威殿がそう言つならば異存はありません」

あつさつと決まっていく段取りに若干付いていけない李通。更に夏侯霸と夏侯威は一人でどんどん決めていく。

「えー……と。何故、そんなに急ぐのですか？」

「殺されるかも知れないからです」

我慢出来ずに李通が尋ねたが、夏侯霸から返つて来た言葉は李通の想像を越えた答えた。

「自分で言つのもなんですが、登用出来なかつた有能な人材が敵対する勢力に仕官したらどうなりますか？」

「何故？」と訊こうとした李通の心を読み取つたよつに夏侯霸が答える。そして理解した。

「……有能な人材が敵になる前に殺しておぐ、という事ですか……」

「ええ、そうです。曹操殿が刺客を放つ可能性もありますから」

確かにそうかも知れない。念には念を、という事だろう。自分と同じくらいの年齢なのにそこまで考えるなんて、と感心する。その後、荷物を取りに行く為に夏侯霸達と別れた。

夏侯霸達は別の宿屋に泊まつてゐるらしい、外へと出て行く。

李通はすぐに自分の部屋へと向かい、荷物を持つ。相棒の槍、剣。

路銀や、その他諸々。

準備を手早く終え、夏侯霸達と合流すべく走り出す。いつの間にか雨が止んでいた。雲と雲の間からは青空も見える。

合流地点は北門。ぬかるむ大地の上を駆けながら胸が昂ぶる。どんな旅になるのか楽しみだ。

しばらく走っていると北門が見えて来た。夏侯霸達は既に準備を終えて待っているのが確認出来る。

しかし何か少し変だ。樂進達三人組の姿も見えるのだが樂進達は頭を下げる何か頼んでいる。

李通は夏侯霸達に近付く。夏侯霸はどこか困った顔をしており、夏侯威は顔をしかめている。

趙雲と魏延はどこか面白くなさそうな顔付きだ。

「どうかしたんですか？」

「ん？ ああ、李通か。いや何、こいつら三人が一緒に付いて行くつて言ってんだよ」

「いつも三人とは楽進達の事であつた。李通は視線を転じ、樂進達の方へ向けた。

「お願いします！ 夏侯霸様達の戦い振りを見て我々がどれだけ未熟かを悟りました。我々の修行の一環として、どうか旅に御同行させて下さい！」

そう言つて頭を下げる樂進。李典や于禁も同じように頭を下げている。

「……はあ。私は別に構いませんが……」

夏侯霸はそう言つて視線を自分達に向けて来た。恐らく自分達の意見を聞きたいのだろう。

「私は夏侯霸殿がそう言つのであれば異論はありませんぞ」

「ワタシもだ」

趙雲と魏延がそう言つた。その言葉に若干、嬉しそうな表情を見せる二人。

「俺も別に構いやしませんよ」

「夏侯霸殿達の決めた事ならば自分も異論はありません」

夏侯威の次に李通もそう答える。三人は顔を綻ばせ口々に感謝の意を唱える。かなり大所帯の旅になるが期待感に胸を躍らせる李典であった。

## 河北の大地を駆ける義勇軍

大地を駆け巡る喚声。飛び交う怒号。轟く絶叫。

兵士が互いに命を奪い合い漂う濃厚な血の臭い。煌めく刀身。倒れ行く兵士。

そんな中、星は槍を扱い黄巾党の兵士を貫く。絶叫を上げ、鮮血の飛沫を撒き散らす。しかし敵の数はこぢりよりも多い。

「今です！ 夏侯威隊と李通隊に合図を…！」

そんな夏侯霸の叫びが聞こえた。夏侯霸の言葉に応じて旗が振られる。すると右手の丘と左手の森から軍勢が飛び出して来た。丘側は『夏侯』の旗を、森側は『李』の旗を携えて黄巾党の軍勢へと突撃する。

「全隊反転！ 敵を打ち破ります！」

夏侯霸の心地良い声が響き渡る。その声と同時に守勢だった自軍の兵士達が攻勢に転じる。地を搖るがす喚声と悲痛な絶叫が戦場を支配した。

伏兵の所為で浮き足立っていた黄巾党の軍勢が、こぢりの攻勢を

押さえ切れる筈もなく撤退して行く。

無論、夏侯霸がこの程度で終わる訳がない。

「夏侯仲権、行かせて頂きますーー！」

夏侯霸が旗本、五百騎を従えて敵軍の背後日がけてがけて突撃する。その後を三千騎の騎馬隊が続く。

一陣の風の如き速さ、そして鋭さで敵陣を貫いて行く。改めて夏侯霸の旗本の動きが凄過ぎると感じてしまう。例えるならば最早、五百騎で一つの生き物に見える。

「はあ、終わつたな」

「ああ、そうだな」

漆黒と純白の髪をなびかせながら焰耶は近付いて来るなりそう言つてきた。その声からは疲れを感じさせる。星も槍を持つのでさえ辛いと感じる程だ。

「」最近、戦つてばかりいる。曹操と別れた後、星達は河北に入つた。

河北は黄巾党の動きが活発で豪族の兵を借りて、よく黄巾党の討伐

等をしていった。

そんな時だつた。共に黄巾党と戦つてくれないか、と誘われたのだ。勿論、夏侯霸に対してである。

夏侯霸の指揮振りは思わず見惚れてしまつ程に素晴らしいものだつた。

別に共に戦つ事に異論は無かつた。しかし、誘ってきたのが黒山賊の張燕だつたのが驚きであつた。

黒山賊は河北や中原を中心的に活動している賊である。

しかし張燕曰く、それぞれの頭目が黒山と名乗り勝手に暴れ回つているだけらしい。張燕が率いる黒山賊の本拠地周辺では彼らの評判はかなり良かつた。

時には自分達で田畠を耕し、時には山で採れた珍しい物を町で売つたり、時には農民達の手伝いをしたり、時には周辺の豪族達と共に黄巾党から農民達を守つたりと、賊がするような事では無い事ばかりしていふようだつた。

ならば賊と名乗らなくても良いと思つたのだが張燕には張燕の意志といふか意地があるらしい。

そんな張燕が仲間内から聞いた情報によると五万にも達する黄巾

党の軍勢が向かって来ているとの事。

対する張燕や豪族達からなる連合軍は二万八千程らしい。

二万八千の内の一万五千は張燕の配下だ。黒山賊の頭目の中でも上位に入る兵力と豪族達との連合軍でも流石に黃巾党の大軍に抗する事は難しい。

そんな時、夏侯霸の勇名を聞いて頼みに来たという訳だった。ちなみに夏侯霸は河北や中原では『義の将』と称されていたりする。

最初は張燕が来た事に驚いていた夏侯霸だったが張燕の誘いは笑顔で了承した。星は夏侯霸の判断に従つつもりであったし、他の者も異論は無いようだつた。

その後、すぐに張燕の配下の訓練を開始。星達も参加していたのだが、あれ程まで厳しい訓練だとは思いもしなかつた。

軍規も厳しく、違反した者は問答無用で処断。現に十名程が夏侯霸に首を刎ねられた。その時の夏侯霸に対して住む世界が違うとまで思つてしまつた程だ。

たが兵士達を休ませる時は休ませ、一人一人丁寧に悪い箇所を指摘し直させたおかげか、かなり強くなつた。それに兵士達は夏侯霸を慕うようになった。

「李權、李通殿、張燕殿、御苦勞様でした」

「…………いえいえ……そんな事はありません」

夏侯霸達が一緒に帰つて來た。どうやら追撃もそこそこで切り上げたようである。少う夏侯霸の言葉に答へる李通。しかし、その言葉の端々から分かる疲労の色を隠せずにいる。

「俺も…………大丈夫…………ツス」

夏侯霸の隣にいる茶色の短い髪に活潑そうな眼が特徴的な長身の青年　張燕が息絶え絶えに言つ。

後から付いて來る兵士達も疲労しているのが分かる。連戦なのだから当たり前だ。当たり前なのだが　。

「どうしますか、仲權殿？　もつ行きますか？」

「少し休息し、元候と合流した後に進軍します」

何故あの二人は疲れないのだろうか。星は夏侯霸と夏侯威を眺め

ながらそつと思つ。 もも、 いのへりこは当たり前といつた雰囲氣だ。

星達がこれ程までに疲れているのには訳がある。 それは夏侯霸の作戦と指揮だ。

張燕の配下を訓練し終えた夏侯霸は、 なんと一万の兵力で戦うと言い出したのだ。 つまり張燕の配下、 一万五千の内の一万だけである。 残りは本拠地の防衛だ。

流石に全員驚き皆、 口々に反論した。 しかし、 その反応に夏侯霸は苦笑し夏侯威は呆れた表情をしていた。 そして夏侯霸はこいつ言った。

『別に、 たつた一回の戦闘で五万を叩きませんよ。 つまり持久戦ですね』

という事らしい。 つまりじわじわと何回も攻めて兵力を削ぎ落としていく作戦らしい。 その他にも理由があるらしいのだが教えて貰えなかつた。

とにかく五万の兵士相手に一万の兵士で戦い続けたのだ。 夏侯霸の的確な指揮もあって、 こぢらの損害の十倍以上の損害を出している筈だ。

だが、その夏侯霸の指揮が一番の難関である。とにかく早いのだ。小刻みに命令を出したり、急に命令を出したりと多種多様な命令を出す。

確かに的確なのが正直辛い。それでも星達や兵士もしつかりと付いて来ていると思っていたのだが、夏侯霸や夏侯威は不満のようだった。

そして夏侯霸は敵を完全に撃破するのではなく、適当に叩き周辺に存在する黄巾党の部隊と合流させ、再び適当に叩くというような作戦を実行している。

つまり、周辺に散らばっている黄巾党の大小の部隊も一網打尽にしようといつ事だ。今の所は上手く行っている。

しかし。

「今回の敵は八万つて所でしたね。まあ、三万は削りましたけど

「そうですね。本音を言つと、それから黄巾党本隊と合流してくれたら楽なのですが」

夏侯霸と夏侯威はそつ言葉を交わす。そつ、上手く行けば行く程に敵の兵力が増えて行くのである。

こちらの兵力も義勇兵が参加して来ているので増えてはいる。

「本隊と合流されたら十万は軽く越えますよ。まあ、殺れつて言われたら殺りますけど」

「ハハハハ。最高でも十万以上、三十万以内ですね。まだまだ大丈夫ですよ」

何やら恐ろしい事を話しているのは氣のせいだらうか。改めて彼らが歴戦の者だという事を確認出来る会話だ。

夏侯霸は夏侯威と、にこやかに会話を続ける。時には「冗談を挟みながら」。夏侯霸が自分達に見せる笑顔とは、また違う笑顔である。しかし、何故か悔しい気持ちが込み上げて来る。

頭では理解出来るのだが心では納得出来ない感じだ。夏侯威の次に付き合いが長いのは自分だ、と思ってしまう星。

胸が変な感じだ。言い表わすならば胸がモヤモヤするといった所だろうか。星はこんな感覚や感情は知らない。初めての事である。

何となく胸が苦しい。そんな感覚を振り切るように夏侯霸に話しかけようと口を開けた。しかし、別の声によつて遮られてしまつ。

「孫礼、高順、ただ今戻りました」

二人の青年が十名ばかりの兵士を引き連れて夏侯霸に言つた。孫礼と高順、この二人は義勇兵として加わつた者達である。中々の実力である為、夏侯霸はそれに一隊づつ任せている。

「御苦労様です。それで敵軍はどこに向かいましたか？」

「IJのままで敵本隊と合流します。それと敵本隊と官軍が対峙しています。司令官は盧植といつ方で、職は北中郎将だそうです」

そう報告する孫礼。それに対して夏侯霸は頷いていた。

「そうですか。では敵の総戦力は？」

「……今の所は二十万以下です。恐らく十七万から十九万といった所でしょう」

普段寡黙で冷静な高順が険しい顔で言つた。今の所は、と言つた

ところが事はその数よりも多くなるかも知れないからだ。」

「……今回ばかりは官軍との共闘になりそうですね」

そう呟く夏侯霸。物思いに耽るその横顔から目が離せなくなる星。何故か、今度は切ないような気分になる。しかし、決して不快ではない。むしろ心地良く感じる。

「少し休息したら進発しましょう。李權、樂進殿達は？」

「多分、疲れて寝ていると思いますよ。まあ、進発する時には大丈夫でしょう」

夏侯霸と夏侯威が段取りを決めていく中、この切ないような感じは何なのだろうか、と思ふに悩む星。

空を仰ぎ、そこに悠々浮かぶ雲を見る。雪のよつて白い雲を眺めても答えが出る筈も無かった。

## 敵陣を貫く一陣の風（前書き）

（五胡）

五胡とは『匈奴』『鮮卑』『羯』『泰イ』『羌』五つの非漢民族の総称です。

（泰イは漢字で表記出来ませんでした）

その他にも鳥丸などの異民族が漢にはいました。

ちなみに五胡は総称であって、五胡といつ組織として動く訳ではありません。

## 敵陣を貫く一陣の風

陽光が煌めく中、風が血の臭氣と兵の喚声を運ぶ。光を反射し、輝く刀身が迫り来る。

それを彼女 華雄は自分の得物である大斧を扱い防ぐ。そして剣を弾き飛ばし敵兵を斬り裂く。血飛沫が白銀の大斧を染め上げる。状況は極めて不利だ。河北にいる討伐軍と合流しようと進軍していた時だつた。黄巾党の大軍と遭遇し済し崩し的に交戦した。黄巾党の兵力は約十万程。それに対して、こちらは三三万。

相手の数こそ多いものの、今まで何度も黄巾党と戦つて来た自分達の方が練度は高く強い、と思っていたのだが実際には違つていた。敵の堅陣を崩す事が出来ない。同僚である張遼や呂布と共に突撃しても押し返された。更に敵は隙を突いて、こちらを分断し始めたのである。

その為、呂布や張遼の部隊と分断されたばかりか彼女達の君主である董卓がいる本陣とも分断されたのだ。

本陣の兵力は一万五千。残りは華雄、張遼、呂布がそれぞれ五千づつ率いていた。どうにかして華雄は張遼と合流出来たものの劣勢

である事には変わりない。

「アカン！ 斬つても斬つてもキリがないで…」

華雄の隣で偃月刀で敵兵を薙ぎ払う張遼。彼女の偃月刀が吠える度に鮮血が舞い、偃月刀の刀身を真つ赤に染め上げる。

「クソ！ こよつけ雜兵！」とさbane…」

華雄も負けじと大斧を振るうものの、敵兵の数は一向に減る気配を見せない。逆にこちらの兵士の姿が少なくなつてゐるような気さえする。

いや、確実に少なくなつてゐるだろう。風を斬り裂きながら敵兵を喰らう大斧。雄叫びを上げる偃月刀。しかし、華雄と張遼の奮戦も虚しく更に状況は悪くなつていく。

「張遼様！！ 敵軍が我々を包囲しようとしています…！」

「こまでは全滅してしまいます…！」

近くにいた張遼の部隊の隊長格の兵士達が叫ぶ。確かに敵軍はこ

ちらを包み込むとしている。だが、ここで下手に退いても戦線を保てず崩壊するだろ。

「華雄様、一回退きましょう。」のままで全め

華雄に近寄つて来た隊長格の兵士の声が途切れる。華雄が視線を転じて確認すると首から上が無い隊長格の兵士が地に伏していた。

（クソ！…）このよくな所で私が！　私が！…）

華雄は内心毒づきながら大斧を煌めかせ敵兵を斬り裂く。辺りから兵士の絶叫が聴覚を刺激する。

「華雄様！　援軍です！…」

「何だと…？」

近くにいた兵士が指差した方を見る。すると左手の丘から軍勢が現れた。

しかし装備はしつかりしているものの、統一性が無い。恐らく義勇軍なのだろう。数はおよそ二万。

「たつた二万程度の義勇軍が援軍に来ても焼け石に水やで…」

張遼が叫ぶ。その声には失望の色が含まれていた。義勇軍は正規軍とは違い、練度が低いのが普通だ。

たつた二万ばかりの兵力では、この戦況を覆すのは無理である。

それを知つてか知らずかその義勇軍は黄巾党軍へ向けて突撃を仕掛けた。

そして滑らかな動きで軍勢を三つに分け始めた。

思わずその光景を見つめる華雄。義勇軍の動きでは無い。むしろ歴戦の部隊と表した方がしつくり来る。

その三つの内の一つは一いつ矢矢に向かつて来た。兵力は騎馬が五百程。歩兵が五千から六千。

残りの一つの兵力は、それぞれ騎馬が一千五百くらいくと歩兵が五千から六千。

その中でもこちらに向かつて来る五百の騎馬隊が凄まじい。まるで一頭の巨大な獣が動いているかのよつだ。

風を切り裂きながら向かつて来る騎馬隊。それに対して迎撃態勢を整えよつとする黄巾党軍。

しかし、そこへ騎馬隊から何か放たれた。矢だ。矢は天に舞い上がり、大気を貫き黄巾党軍へ降り注ぐ。迎撃態勢を整えようとした前衛が次々に倒れていく。

「んな、アホな！？」

張遼が驚愕の声を上げた。それもそうだろう。馬上で矢を放つつまり、騎射はそうそう簡単に出来る代物では無い。それをこちらに迫り来る義勇軍の騎馬隊がやつてのけたのだ。驚かない方がおかしい。

前衛が倒れた空間に騎馬隊が突っ込んで来た。ぶつかった、と思つた瞬間に敵陣を紙を裂くかのように貫いて行く。

僅か五百の騎馬隊が疾風になりて敵陣を乱す。騎馬は敵陣中央に向かい貫く。何かが苗を舞つた。  
それを見た敵軍の動きが止まる。

その間に五百の騎馬隊は敵陣を突き抜けた。騎馬隊が敵陣を貫いて出来た穴に歩兵隊が突っ込んで来る。突き抜けた騎馬隊もすぐさま旋回して再び鋭い突撃を仕掛ける。

歩兵隊との挾撃。敵の陣形が乱れる。悲痛な叫びが幾重も戦場に

轟く。その中を貫く騎馬隊。彼らが通った後には鮮血が舞い上がり、死体の山を築く。

騎馬隊は敵陣を何度も貫いて行く。最早、彼らに抗する力を残していない黄巾党。その騎馬隊がこちらに近付いて来た。

「無事ですか？」

先頭にいた女性が涼やかで心地良い声で話しかけてきた。その顔に思わず見惚れてしまう華雄。美に関する事に疎い華雄であつても、これだけは分かる。美しい、と。

艶やかな黒髪を風になびかせ、切れ長で強い光を放つ眼には優しさに満ち溢れている。瑞々しい肌と唇は見る者全てを魅了するかのようだ。

そんな彼女の右手には長剣が握られていた。白銀の刃を血で深紅に染め上げている。

「……物凄い、ベッピンさんや

張遼の惚けたような咳きが聞こえて来た。珍しく華雄も同じ事を思っているのだった。目の前の女性は若干、首を傾げながら再び口

を開いた。

「あの、本当に大丈夫ですか？」

「え、あ、ああ。大丈夫だ」

華雄は慌てて答えた。戦場なのに戦つ事も忘れて六が空きそうな程、見つめていた自分に恥ずかしさを覚える。

「そうですか、それは良かつた。被害の方はどうでしょうか？」

「ちょっと損害が大きいけど、まだ戦えるで」

黒髪の美女の問いに答える張遼。確かに損害は大きいが、まだ戦える。

「夏侯霸殿！ 敵軍が後退して行きます！！」

一人の青年が駆け寄りながら目の前にいる美女にそう報告する。どうやら美女の名前は夏侯霸といふらしい。

「そうですか。所定位置へと追い込んでいますか？」

「はい、夏侯威殿達が上手くやつてくれています」

「ならば私達も行きましょう。付いて来て下さー」

「ちりにちりにそり声を掛けるなり馬を返して騎馬隊と歩兵隊を引き連れ進軍し始める夏侯霸。華雄は慌てて部下を引き連れ付いて行く。張遼も少し遅れて付いて来る。

後退する敵軍を追い回している部隊の中に『『』』の旗が見える。更に少し離れた場所には『董』の旗があった。ビビりやつぱり布や董卓も無事らしい。密かに胸を撫で下ろす華雄。

その時だった。後退を続ける黄巾党軍の前方にあつた雑木林の中から軍勢が飛び出して来た。数は一万五千程だろうか。

恐らく先程、美女 夏侯霸が言つていた事はこれだったのだろう。その采配振りに舌を巻かずにはいられない。

「馬鹿な！？ 早過ぎるーー！」

大きな叫びを上げる。驚いて思わず夏侯霸の顔を伺つた。すると先程まで存在した穏やかな雰囲気は消え去り、顔を歪めていた。

「高順殿！ 私は先に行きます！！ 貴方は彼女達と共に逃げる敵を討つて下さい！！ なるべく大きな集団のを狙つよつにして下さい」

そう言つなり夏侯霸は騎馬隊を率いて風の如く駆け出して行つた。全く状況を理解出来ない華雄は呆然とするしかなかつた。張遼も同じ思いなのだろう。

張遼は高順と呼ばれていた青年に訊ねた。

「一体何が早いんや？」

「……伏兵部隊だ。本當ならばもつと待つてから出るべきだつた。そして敵の退路を塞ぎ追撃部隊と挾撃し、南へと撤退するように誘導。撤退して来た敵を我々が横撃する手筈……だつた」

忌々しそうに伏兵部隊を睨みながら言つ高順。凄いとしか言いようのない作戦だ。本当に彼らは義勇軍なのだろうか、という疑問さえ浮かび上がつて来る。

伏兵部隊と追撃部隊に挾撃され四散して行く黄巾党軍。しかし伏

兵部隊の大半は追撃部隊よりも動きにキレが無い。

旗印は『劉』や『関』『張』、そして『十』だ。先程の高順の態度からして彼らの部隊では無いのであろう。もしかしたら官軍から借りて来た部隊なのかもしれない。

四散した部隊を切り裂いて行く夏侯霸の騎馬隊。鋭い槍のよう敵陣を貫く。

「……我々も行くぞ」

高順は戟を構えて行く。張遼がその後に続き、華雄も大斧を構えて進む。とにかく眼前の敵を倒すのが先決だ。全身に風を浴びながら混乱している敵の一部へと突撃して行つた。

## ある日の従兄弟

「だから、たつた五百騎で一万の軍勢に突っ込むなんて普通は誰もしないですよ！ というか、もう今後一切やらないで下さい！」

部屋に轟く怒号。夏侯惇と机を挟み向かい合わせで座っている夏侯淵が、語氣を荒くして言って来た。

正直、半月も前の事を蒸し返さないで欲しい。だが、そう言つてしまた怒鳴られるのが目に見えているので言わないでおく。

黄巾党討伐の戦いから半月が経つた。黄巾党と決戦の際に首領である張角、張梁、張宝の三人は曹操が捕縛し処断したという情報が入っている。

現在、討伐軍の大半は周辺の村等の復興作業を手伝つており、夏侯惇達は一段落したので休憩している所だ。

「分かりました、今後気を付けます」

「本当に止めて下さいよ……そつにえれば、この国の曹操殿はかなり危ない事をしてますよね」

夏侯淵は多少訝しげに、じらりを見た後にそつとつて来た。夏侯惇はその言葉に頷く。

黄巾党の首領である張角、張梁、張宝は曹操が処断したという事になつてゐるが、實際には生きて曹操軍の保護下にいるらし。

これは夏侯惇が独自に集めた信憑性の高い情報だ。恐らく、この国の曹操は三人を利用して黄巾党の残存兵力を手中に収める気なのだろう。

しかし、それは諸刃の剣だ。もし朝廷に嗅ぎ付けられたら逆賊扱いされるだろう。民衆に知られてもマズイ。自分達を苦しめた勢力の首領が、のつのつと生きてゐるのである。

誰もが怒り狂う筈だ。そうしたら民心は離れて行き曹操の名声も地に墮ちるだろう。夏侯惇としては、そんな勢力には少なくとも入りたいとは思わない。改めて曹操の誘いを蹴つておいて良かつたと思う。

「ああ、そういうえば妙才。最近、この国の私と仲良くしていらしいですね。曹魏で一番の女たらしの異名を持つ貴方の本領發揮ですか？」

「そう言つてみたら夏侯淵が思いつきり睨んできた。『いい加減にしろ』と田で語つて来る夏侯淵。

そんな夏侯淵に微笑みで対抗してやる。そして『じゃあ、どうこう

事か説明しや』と曰で語り返す。

「……『』の前の決着を付けよつ』って一騎打ちに誘われまして……」

「それで？」

「……俺が勝つたんですけど……何故か知らないのですが、真名を教えてもらいました」

嫌そつに言つ夏侯淵。ちなみに夏侯惇と夏侯淵が真名といつ物を知つたのは、つい最近である。

「流石は『曹魏で並ぶ者無し』と言われた程の女たらしですね」

「だ！ か！ ら！ いい加減にして下せよ！ といふか、そのあだ名が付いたのは元讓殿の所為ですよ！…」

声を荒げて反論する夏侯淵。やはり、『』の奴をからかうのは楽しいと思つたのは内緒だ。

「心外ですね。何故、私の所為なのですか？ 人の所為にするのは

良くないですよ」

「心外なのは」ちらりですよ！！！ 元譲殿が幾人もの女性の女心を黙殺するからでしきうが！！ それで元譲殿が自分の代わりに落ち込んだ女性達を慰めろって言つたから、こうなつてしまつたんですよ！！」

「正直、勝手に私に惚れた方が悪い」と思ひののですが

本当にそう思つ。確かに自分に対して恋心を抱いていた女性の気持ちに気付かない振りやらその他色々と様々な手段を使い、諦めるように仕向けた自分も悪いとは思つ。

だが武人に恋だの愛だのは必要無い、と本気で思つてゐる夏侯惇。

「……酷いですね。といつか、もしかして……今回も……ですか？」

「ええ、武人に恋だの愛だのはいりませんから。そんな物がなくても、しつかりと働けますしね」

「……本気で止めて下さいよ……もひ、俺は嫌ですからね。これ以上、女たらしの称号に甘んじるつもりは毛頭ありませんから……」

夏侯淵はこちらを疲れた視線で見つめながら囁く。若干、夏侯淵が萎びて「いる」ように思えるのは「氣のせい」だろ？

「……元讓殿……正妻や側室の一人や一人、三人や四人、五人や六人くらい作りましょ？……俺からのお願いです」

「慎んで断ります」

「即答！？ しかも断られた！？」

当たり前だ。いつ死地に赴くかも分からぬのに生への執着を残してどうする。それに悪戯に未亡人を増やす趣味は持っていない。ちなみに、この考えを他人に強要するつもりは無い。あくまで自分に対する戒めである。

「元讓殿、趙雲はどうするんですか？ 趵雲自身、気が付いていないようですが明らかに元讓殿に惚れていますよ」

「気が付いていないのなら気が付いていない今まで良いではないですか」

「……魏延は？」

夏侯淵はいつになく粘る。だが、そんな事くらいで心動かす夏侯惇ではない。

「劉備殿に一日惚れしたよつですよ」

「いやいや、それは自分の本当の気持ちに気が付いていないだけですよ。絶対、魏延も元讓殿に惚れています」

「まあ、魏延殿が劉備殿を好いているのならばそれで良いではありますか」

夏侯惇の言葉に夏侯淵は顔をしかめる。しかし、まだ諦めていいようだ。

「樂進は？ どこからどう見ても元讓殿に好意を抱いていますよー」

「のうへうへうへと避けます」

「.....」

無言になる夏侯淵。何を言つても無駄である。例えるならば、五万の兵力で五十万の兵力を相手にしているよつたものである。

「……じゃあ、この国の俺は、何気に仲良くしてこねりはじやないですか」

「そこまで仲良くありませんよ……そろそろ止めましょうか。このまま続けても平行線のままですし」

夏侯惇がそういひと渋々といった感じで頷く夏侯淵。しかし、まだ諦めていなこよつである。

「……そういえば、仕官先はどこにするつもつですか？」

夏侯淵は思い出したように訊いて来た。仕官先は決めていたが、確か夏侯淵に話していなかつたような気がする。

「一応、劉備軍に行こうかと」

「何故ですか？」

夏侯惇の言葉に夏侯淵は若干、驚いた顔をしながら訊ねて来た。

「まあ、この国の董卓軍でも良かつたのですが劉備軍の方が動き易いと思つたので」

「……と、言いますと？」

「そうですね……考え方の違いですかね。確かに董卓軍の方が精強ですし、董卓殿は劉備殿より君主として、しつかりとした方です。しかし、防御思想なんですね。自分から他勢力に攻め込まないでしょ」

「確かにそうですね……成る程、元譲殿が考えている事が分かりました。つまり劉備殿の方が裏から操り易いって事ですね」

「……そこまで言いますか？　まあ、あながち間違いではありますか……」

夏侯淵の言い方に苦笑する夏侯惇。董卓の方が意志がしつかりしている分、自らのやり方を変えないだろう。つまり、徹底的な防御策。君主としては立派だがそれでは天下統一など出来はしない。

それに対しても劉備の方がまだ、やり易いと夏侯惇は判断した。それに中途半端に大きな勢力の董卓軍よりも弱小勢力である劉備軍の

方が動き易い。

「劉備殿から誘いも来てますし、丁度良いと思つたのですが

「まあ、俺としては元讓殿に付いて行くだけですから構いませんよ。他の奴らも同じでしよう」

「いやかに笑いながら言つて来る夏侯淵。その後、しばらく夏侯淵と今後の事で色々と話し合つた。

「兵力は一千から三千程度連れて行こうと思います。残りは張燕殿に預けて黒山賊の拠点に行つておいてもらいます。補佐は孫礼殿で「そりや、そうですよね。劉備軍と合わせれば三万に到達しますもんね。今回の功績で劉備殿が、どうぞの太守になつたとしても三万もの兵力は養えませんよね」

「ええ。それにござとこうときに予備の兵力はあつた方が良いですか」

会話は弾み、時には冗談を挟みつつ話す夏侯惇と夏侯淵。話題は巡りに巡り何故か。

「だから……この際、誰かと付き合つ

」

「……ません。ところより何故、この話題に戻つたのですか？」

「そんな事はどうでも良いです……それより誰かの思いを受け入れたうぢですか……あまりにも可哀想ですよ……この頑固者！」

「その言葉をそつくりそのまま貴方に返します。それに私に対して恋心を抱いている事さえ気が付いていないのですから、別にそのまま放つておいても構わないではありませんか」

不毛過ぎる口論が続く。何だかんだ良い事を言つてゐる夏侯淵だが実際には、これ以上女たらしの称号に拍車を掛けたくないだけだろつ。

「もう止めませんか？ そんな事を何回言つても私の考えは変わりませんよ」

「…………分かりました、もう止めましょ……今回だけは

夏侯淵はこちらを睨みながら言つ。そんなに女たらしといつ称号が嫌なのか、と思つ夏侯惇。もう勘弁して欲しい。

夏侯淵は、まだまだやる気満々のようだが自分の考えは変わることはないだろう。密かに溜め息を吐く夏侯惇であった。

## ある日の墨（前書き）

かなり不定期更新になるので御了承下さい。

曙の光りが辺りを照らし風に誘われて木の葉が擦れ合つ音を奏でる。

その音と共に大気を斬り裂く鋭い音が星の耳に伝わって来た。

星の視線の先には己の持てる限りの剣技を出し続ける青年の姿があつた。

艶やかな黒髪を風になびかせ、しなやかな身体を滑らかに動かし、その瑞々しい肌から飛び散る汗を陽光に煌めかせながら斬撃を放つ。

そんな彼 夏侯霸の姿を少し離れた場所から眺め続ける星。彼女にとつては至福とも言える一時である。

夏侯霸達と共に劉備軍の傘下に入つて多少、日が経つた。当初は慣れない事もあつたが、近頃は馴染み始めて来たが様々な事に不満を感じる事もある。

しかし、今はそんな事よりも彼の姿を見つめ続ける方が先決だ。夏侯霸は斬撃を放つた勢いのまま回転し上段蹴りを出す。

この鍛練から夏侯霸の一日が始まる。そして、この鍛練を見て星の一日も始まる。彼と始めて出会い、しばらくしてからこの鍛練に気が付いた。

それ以来、彼の鍛練の見学が毎日の日課になつた。星の視界の中で刀身が朝日に煌めき輝く。

長剣を大きく横に薙ぎ、鞘に収める。ビリヤリ今日の鍛練は終了らしい。

星は深呼吸し、ゆつくつとある決心を胸に夏侯霸に近付いて行つた。

以前、気配を消して背後から近付いたら斬られそうになつたので気配を消さないよう注意しながら彼の下へと歩み寄る。

夏侯霸曰く、微妙に気配を消して近付いて来たから暗殺者の部類が襲つて来たのかと勘違いしたらしい。

その時もいつもと同じ笑顔だったのだが、その時程彼の笑顔が怖かつた事は無い。それ以来、夏侯霸に近付く時は気配を消さずに近く付く事にしている。

「おはようございます、夏侯霸殿」

「はい。おはようございます、趙雲殿。今日も良い天気になつそうですね」

胸の高鳴りを感じながらも普段通りの声が出るように意識し挨拶する星。それに夏侯霸は傍に置いてあつた布で汗を拭きながら星に挨拶を返す。

「ええ、そうですね……その、夏侯霸殿……一緒に……朝食を食べませぬか?」

星は少し詰まりながらも言い切つた。何故か不思議な事に早朝鍛練を終えた夏侯霸はどこを探しても見つからないのである。という訳で今回は鍛練を終えた直後を狙つてみたのだ。

とても顔が熱い。恐らく真っ赤になつてているだろう。皿の前にいる夏侯霸は一瞬、驚いた表情をしたがすぐにいつも通りの笑顔に戻る。

「ええ、趙雲殿が宜しければ私は別に構いませんよ。ただ、汗をかきましたので着替えてからで宜しいですか?」

「え、ええ」

喜びを噛み締めながら何とか普段通りに答える星。更に嬉しさのあまり何を言つたか覚えていないが、成り行きで夏侯霸が汗を拭いた布を星の自室にある洗濯物と一緒に侍女に渡す事になつた。

星は夏侯霸と別れ自室へと向かう。その足取りは軽く、鼻歌を歌いそうな気分である。そんな星を祝福するかのように小鳥達のさえずりが辺りに響き渡つた。

自室に戻つた星は自分の洗い物を引っ掴み夏侯霸が使用した布と共に侍女へ渡す為に歩き始める。

（つは！？ いかんいかん。何をはしゃいでいるのだ私は。将たる者、いかなる時も平常心を保たねばならん……）

夏侯霸の教えを思い出し気持ちを落ち着けようとする星は大きく深呼吸をした。しかし、それが間違いだつたのかも知れない。星の嗅覚を微かに刺激する匂いが漂つて来た。

（あ……夏侯霸殿の……）

夏侯霸の汗の匂いと意識した瞬間、心音が苦しくなる程に大きくなつた。息も荒くなり湿り気を帯びていふようだ。

星は再び大きく息を吸う。すると先程よりも鮮明に夏侯霸の匂いが鼻腔を刺激する。身体が熱い。汗まで浮かんで来ている。

（わ……私は何をしているのだ……早く侍女に渡さねば……）

そう考えるものの、もう少しだけと自分に言い聞かせる。いつの間にか足も止まっていた。

そして気が付いたら左手に自分の洗濯物を抱えながら右手に夏侯霸が使用した布を持っていた。

湿り気を右手に感じつつ星の視線はその布から離せなくなる。異様な喉の渴きを覚え、唾を飲み込む。

穴が空く程、見つめながら徐々に右手を顔に近付けて行く。その間に段々と夏侯霸の汗の匂いが強くなる。右手は顔の少し手前で止まつた。星の嗅覚を支配する匂いで頭の中に靄が掛かったような感じになる。

嫌な匂いでは無い。むしろ、ずっと嗅いでいたいと思ひ程に好きな匂いだ。例えると、さっぱりとした甘さの果物。

一度食べたら夢中になってしまいうような感じだ。少なくとも星はやう思つてゐる。

喉の渴きが強くなり何度も唾を飲み込む。更に息も夏侯霸の厳しい訓練を受けた時みたいに荒くなる。

身体はまるで燃え盛る炎のように熱い。

頭の片隅で警鐘が鳴り響く。こんな事はすぐに止める、と。しか

し、もしかしたら右手に持つた布がこの耐え難い喉の渴きを癒してくれるかも知れない。

更に気になる事は調べたり確認した方が良い、と夏侯霸も言つて、いたと自分に言い聞かせ納得させる星。

そう、これはただ単に知的好奇心と探求心に基づいた行動であり、決して疚しい事では無い。

そんな事を何度も頭の中で繰り返しながら意を決して一気に顔を布に押し付けた。そして大きく息を吸う。

それと共に肺の中が彼の匂いで満たされる。頭の中で靄が強まつたような気がする。何度も何度も唾を飲み込み、息を吸う。

しかし、どこか切ない。胸が彼の匂いに満たされるのにどこか切ない。胸が張り裂けそうだ。その切なさを誤魔化すかのように星は更に布を押し付ける。

「趙雲様、どうかなさいましたか？」

突如、背後から女性の声が聞こえた。星は飛び上がりんばかりに驚きながら急いで背後に身体ごと向く。その際、右手を背中に回し

隠した。

声を掛けて来たのは洗濯係の侍女だった。侍女は少し首を傾げつつ言葉を紡ぐ。

「顔が赤いですが、どこか体調でも悪いのですか？」

「い、いや、何ででも、いや、いや……」

思いつきで噛みつい答える星。そんな星を不思議そうに眺める侍女は『やつですか』と呟つた。

「あ、ああのな、しゃんしゃんこを……」

「しゃんしゃんこも……あ、洗濯物ですか！……これは御足労をお掛けして申し訳ありません」

侍女は何度も頭を下げつつ星が持っていた洗濯物を受け取り一礼して去つて行つた。

（……しまつた。夏侯霸殿の布を渡せなかつた……）

今、侍女を追いかけて渡しても怪しまれるかも知れないの仕方なく自室に置いておく事に決めた。

走つて自室に戻つた星は掃除係の侍女に見つからない場所に夏侯霸が使用した布を隠す。そして急いで食堂へと向かった。

そろそろ夏侯霸の着替えも終わる筈だ。怪しまれないようにしなければならない。しかし、先程やつてしまつた事を思い出し罪悪感に苛まれながら夏侯霸にいつも通り接する事が出来るかどうか心配な星だった。

ある日の福井（前書き）

誠に申し訳ありませんが、一部の文章がとても長いので御了承下さい。

# ある日の焰耶

焰耶は気合いを入れた雄叫びを辺りに轟かせながら剣を振り下ろす。陽光に煌めく刃が風を引き千切りながら彼へと向かつて行く。

しかし、渾身の一撃は空を斬った。避けられたのだ。だが、すぐさま剣を斬り上げる。彼はその漆黒の髪をなびかせつつ、後方に跳んで避けた。

しかし予想の範囲内。焰耶は一気に間合いを詰め、鋭い突きを放つ。空気をえぐるような突きは彼の瑞々しい肌に迫る。

「良い突きですね。しかし

「うわー！」

焰耶は一瞬、何が起きたのか分からなかつた。彼が消えたと思つた瞬間に足へと衝撃が走り、焰耶の視界一面に青々しい空が広がつていた。　足払いをされたと気が付いた時には固い地面に仰向けに倒れており、更に彼の剣が首へ突き付けられていた。

「私の勝ちですね」

「……はあ。まさか、あの突きを避けられるとは思わなかつた」

彼 夏侯霸に差し出された手を掴み立ち上がるのを助けてもらいながら言つ。三回聞、考えに考え抜いた戦法だつたのだ。

「しかし、中々に良い突きでしたよ」

夏侯霸は微笑みながら言つて来る。汗で濡れた髪の所為で異様に色っぽい。

更に彼の上着は袖無しの薄着であり、汗を吸いピッタリと体に引っ付いていて色っぽさを倍増させている。

焰耶は夏侯霸を直視する事が出来ず、チラチラと見やるしかなかつた。

現在、焰耶は夏侯霸と剣の訓練中である。夏侯霸は自分の得物以外に最低でも一つは他の武器使えるようにしておけ、と焰耶達に言つていたのだ。

これは自分の得物が使用不可、又は手元に無い場合の為らしい。  
確かに納得のいく理由である。

「剣の訓練を始めたばかりの頃は笑いが込み上げて来る程の腕前で  
したね」

「う……うわわわわわ。昔の事だろうが」

クスクスと笑う夏侯霸に言い返す焰耶。こんな何気ない会話なのに何故か心が温まる。

夏侯霸を一言で言い表わすならば摩訶不思議である。質実剛健でも良いのだが摩訶不思議の方がピッタリのよつた気がする。

同じ年齢くらいなのに、そこらの名将と呼ばれる将軍よりも全てを上回る。人望も厚い。兵士からも慕われている。本当に凄まじいとしか表現出来ない。

しかし、よく考えるとおかしいのである。例えば夏侯霸の指揮能力。最早、歴戦の将としか思えない指揮振りだ。

だが、見た目から判断して夏侯霸の年齢は十代後半から二十代前

半だろ？。

大抵、一般的には十四歳か十五歳くらいで元服だ。もし夏侯霸の年齢が二十歳だとして元服したのは十四歳としても、僅か六年である。

僅か六年間で夏侯霸と同じ指揮が出来るかと訊ねられたら『絶対無理』としか答えようが無い。

夏侯霸の指揮は例えるなら一生を戦の中で過ごし、何万、何十万といつ兵士を率いてきた將軍の指揮である。

次に武力。これは指揮能力と同じだ。ただ単なる『力』であれば納得の出来る範疇だ。

しかし『技量』は明らかに別物だ。夏侯霸の技量は十年や二十年で達する領域を遙かに凌駕している。

そもそも夏侯霸の年齢で剣に始まり槍、戟、弓、棍等々、何種類もの武器を使いこなす事が出来るのだろうか。

後は商才。義勇軍の時に夏侯霸は兵糧を買い集めて売り、そして再び買い集めて売っていた。

それを何度も繰り返す内に兵糧が一番最初に集めた量の四倍になっていた。

(何といつか……訳が分からぬ……)

愉快そうにクスクス笑う夏侯霸を見ながら心底思つ焰耶。

(あ、そういえば……)

そこで、ふと思い出す。それは黄巾党討伐が終わった時の事だった。

焰耶が陣中を歩いていたら夏侯霸が大量の軍資金を視察に来た宦官に渡していく所を発見したのだ。

功績を挙げなくて宦官に賄賂を渡しておけば多少良い官位が貰える。

つまり賄賂だ。発見した際憤りを覚えたが仕方ない事だ。

無位無官の義勇軍は所詮使い捨ての駒。どんなに功績を挙げても、あまり高い官位は貰う事が出来ない。

夏侯霸の事であるから私利私欲の為に賄賂を渡したのでは無い筈だ。恐らく自分達や兵士を養う為に官位が必要だったのだ。だから宦官に賄賂を渡したのだろう。

実際に彼が渡した金は太守職であれば楽に貰える金額であった。しかし幾ら待っても任官の沙汰は来ず、夏侯霸に比べれば埃にも等しい功績であつた桃香が太守職を貰つていた。

そして夏侯霸は劉備軍の傘下に加わった。全く意味が分からない。確かに夏侯霸が任官されなかつたから桃香と運命的に出会えた訳なのが納得出来ない。

ぶつちやけ劉備軍の功績は夏侯霸が挙げた功績に比べれば と  
いつより比べれるのも失礼な程の微々たる物であったのだ。

（なのに何故……何故にワタシが尊敬し、信頼し、大好きな……つて恋愛とか、そんな意味での好きじゃなくて！ ワタシには桃香様が！ ももも勿論、夏侯霸の事は良く思つているがワタシにはワタシにはワワワワワタシには！…）

少し前の事を思い出し機嫌が悪くなる焰耶だつたが何故か暴走し、勝手に自爆してしまつた。

ちなみに劉備軍に加わつた際、夏侯霸以外に真名を授けたり授かつたりした。そう夏侯霸以外と。

そこで再び焰耶が暴走し始める。

（だあ”あ”あ”あ”！　そもそも何で夏侯霸はワタシ達全員の真名を受け取らないんだ！－－（中略）確かに夏侯霸は真名が無いと言つてはいたが！－－（中略）流石に『真名は自分の命と等しいのですよね。そして真名を受け取つたら真名でお返しをしなければならない。ですが私には真名がありません。もし、お返しする物が無い状態で貴方達の真名を受け取つてしまつたら貴方達への冒涜になつてしまひます』とか言つてええええええええええええ！－－確かにそうだが確かにそうだが、だが、ワタシ達が別に構わないと言つてているのに受け取らないか普通！－－）

凄まじく長々しい焰耶の憤り。そんな焰耶を不審に思つたのか夏侯霸が声を掛けて來た。

「どうかしましたか？」

「……何でもない」

夏侯霸の言葉に素つ気なく答える焰耶。まだまだ憤りの波が来るかも知れない。

「本当にそつですか？　まるで鬼のよつたな凄まじい形相を」

「誰が鬼だ！－－」

「……ククク……フフフ」

間髪入れず、焰耶はツツ「ミミを入れる。すると夏侯霸の表情が崩れ笑い始めた。始めは微かにしかし、すぐに愉快そうな笑い声を上げる。

焰耶は思わず、その光景に見入ってしまった。こんな夏侯霸の表情を見るのは初めてである。普段は大人びた雰囲気を醸し出している夏侯霸が子供のようにあどけない顔で笑っている。

何故か胸が締め付けられるような感覚が走った。更に思わず抱き締めてしまいそうにもなり無理矢理、根性で押さえ込んだ。何故、急にこんな感覚に襲われたのか理解出来なかつた。

「はあはあ……すみません。あまりにも魏延殿をからかうのが……  
楽しくて、つい」

息絶え絶えに言葉を発する夏侯霸はどこか艶やかだつた。顔が熱くなり、夏侯霸を抱き締めたいという衝動が夏侯霸の胸に飛び込みたいという衝動に変わつた。

しかし、何とか押さえ込む。一步間違えれば実行していたに違いない。それに物凄く胸が苦しい。切ない。しかし何故か心地良い。

「フフフ、本当に魏延殿は可愛いですね」

焰耶に近付き笑いを耐えながら、そんな言葉を発して来た。夏侯霸本人は何気なく言ったつもりだったのだろう。だが、焰耶はその言葉が耳に入った瞬間、止まってしまった。

彼は今、何と言った？ 自分に對して何と？ そんな事を脳裏で繰り返す焰耶。いきなりの事で理解出来ず固まってしまった彼女の頭を誰かが優しく撫で始める。

「フフフ、すみません……フフフ」

若干、いつもとは違う口調で話し、上品に笑いながら焰耶の頭を撫でる夏侯霸。その瞬間、彼が自分に言った言葉の意味を理解した。そして身体全体に電流がほとばしる。

「な、な、なななな！？」

顔がいや、身体中が熱い。呼吸が早まる。胸が破れそうに苦しい。焰耶は彼の顔を直視出来ず俯く。

その間にも絶えず撫でられる頭からは快感が伝わって来る。自分で自分の身体を力強く抱き締める。じやないと何か色々と溢れ出そうだった。

「ハハハハ……はああ、それでは帰りましょうか

「あ……ああ」

歩き始めた夏侯霸の後に付いて行く焰耶。夏侯霸はまだ笑っているのか時々、身体を震わせていた。

焰耶は焰耶で違う意味で震わせていた。身体中に走った快感の余韻を味わうかのように、無論、焰耶が意識してやっている訳ではないが。

突如として機能停止した頭で自分はどうしてしまったのだろうかと戸惑う焰耶。その手は自分でも気付かぬ間に右手で夏侯霸の上着の裾を掴んでいるのであった。

## ある日の天の御使い（前書き）

今回は結構、短めです。

## ある日の天の御使い

ある一室で現在、北郷一刀は愛紗、桃香と軍備の事に関して相談していた。

ちなみに朱里や雛里は内政に関しての仕事が忙しい為、この場にはいない。

「ようやく兵力が一萬を越えたね」

「そうですね、御主人様。しかし、あの夏侯霸が全兵力を連れて来ていたら……」

「まあまあ、愛紗ちゃん。今更そんな事を言つても仕方ないよ」

「……分かりました」

桃香にそう言われて不機嫌ながらも了承する愛紗。確かに夏侯霸が劉備軍に参入する時に彼が率いていた全兵力をそのまま連れて来ていれば楽だつた。

しかし何故か夏侯霸は僅か数千の兵力を連れて来ただけだった。一刀達にとつては夏侯霸達の兵力も目当てだった為、正直がっかりしたものだ。

とにかく、その後もどんどん話は進んで行った。

「何故、桃香様や御主人様より夏侯霸の方が民に人気があるのか全く分かりません！ 桃香様はこの地を治める太守であり御主人様は天の使いであられるのに何故、あのような者の方が！！」

「ハ、ハハ。愛紗ちゃん、落ち着いて」

乾いた笑いを上げながら愛紗をなだめる桃香。一刀はその言葉や姿に苦笑するしかない。

愛紗は夏侯霸の事をあまり良く思っていないようだ。確かに桃香や一刀よりも夏侯霸の方が民衆には人気だった。

一刀もそれが不思議で仕方ない。一刀が抱いている夏侯霸の印象は武力に秀でた武将である。

黄巾党との戦いでは二万にも達する兵士を率いていながら実際に彼が直接、指揮していたのは僅か五百騎。この事から指揮能力はあまり良くないのだろうと一刀は判断した。

なので現在、夏侯霸が率いている兵力は五百騎のままである。ちなみに彼の従兄弟である夏侯威も同じ理由で五百騎だ。

一刀が知っている三国志では夏侯霸も夏侯威も大した事の無い武将だったような気がする。

黄巾党との戦いで夏侯霸の義勇軍があれ程の功績を挙げたのは星や焰耶、凪達のおかげだろうと一刀は思っていた。

夏侯霸の能力を推測すると指揮能力は凪より劣り、武力は星より少し下だろう。しかし何故か内政関係に精通していたので、一刀は夏侯霸に武官の仕事と平行して文官の仕事も任せていた。

「ああ、そういうえば愛紗」

「はい？ どうかしましたか、御主人様？」

一刀の言葉に応じる愛紗。一刀は最近、考えていた提案を愛紗に言った。

「実は夏侯霸が今、率いている騎馬隊を愛紗の部隊に編入しようかと思っているんだ」

「え？ よりしいのですか？」

「ああ。夏侯霸には俺から話しておくから」

愛紗がまるで新しい玩具を与えられた子供のような顔をした。それもそうだろう。恐らく夏侯霸の騎馬隊は劉備軍の中でもトップクラスの強さだ。

夏侯霸の騎馬隊は全員が匈奴出身らしい。匈奴は遊牧騎馬民族であり、生まれた頃から馬と共に生活している。

だから、あれ程までに凄い動きが出来るのだ。更に夏侯霸の訓練のおかげでもあるのだろう。一刀は夏侯霸に新兵の訓練も任せようかと考えていてる程だ。

「あの騎馬隊が我が部隊の中核になれば、もっと御主人様の為に働いてみせます！」

愛紗は顔を輝かせて嬉しそうに言つ。今まで頑張つてくれたプレゼントのつもりであつたが愛紗に喜んでもらえて何よりである。

「えー、愛紗ちゃんだけズルい。御主人様あ、私にも何か下さいよ

「お

桃香が頬を膨らませながら子猫のよつに甘えて来た。その姿がとても愛らしく感じる。

「はいはい、分かったよ。今度、何か買ってあげるから」

「やつた！ 御主人様、大好き！！」

そう言いながら一刀に抱き付いて来る桃香。それを見て少し機嫌が悪くなる愛紗。何とも微笑ましい光景である。

「あ、御主人様。一つ気になっていた事があるのですが」

「ん？ 何だい愛紗？」

「夏侯霸が我が軍に入る際に言つていた事は」

「漢王朝の事？」

愛紗の問いに答える一刀。その答えに愛紗は頷いた。

「ううん……やっぱり漢王朝は一度、潰れた方が良いと思つんだ」

漢王朝の力は、ほとんどなくなつていて。再び建て直す事は不可能だと思っている。それに漢王朝が民衆に何か良い事をしたのか？いや、していない。逆に迷惑を掛けている。

だつたら一度、潰して新しい王朝を建てた方が良いと思っている。その方が民衆の為にもなる。今後の歴史を知る一刀はそう考えていた。

この事はすでに桃香や朱里、離里とも相談済みであった。その上で彼女達も協力すると言つている。

「しかし、夏侯霸達には……」

「ああ、嘘を言つた。じゃないと仲間になつてくれそうになかつたから」

愛紗にそう返す一刀。夏侯霸が率いていた二万の兵力も魅力的だつたし、星や焰耶、凪達がいたのだ。

人材不足の劉備軍には喉から手が出る程、欲しかつたから仕方ない。

「大丈夫だよ。話せば分かつてくれるよ

「もうだよ愛紗ちゃん。夏侯霸さん達も私達がしつかり話せば分かってくれるよ」

「もう……ですね」

迷いが吹っ切れたかのように頷く愛紗。夏侯霸はこんな些細で分かり切った事で、「ちや」ちや言つ人でもないだろ？。

もう思いながら愛紗や桃香と楽しく世間話をする一刀であった。

全てを覆い尽くす漆黒の闇。そして辺りには赤黒く燃え盛る炎。天高く手を伸ばす焰は互いに競い合つかのように燃える。

そんな中、彼の目の前には一人の少女が地に伏し息絶えていた。年齢は十代後半。少女にしては高い背と凜々しい顔付き、切れ長な眼が特徴的だ。

更に艶やかで耳を隠すくびりの長さの黒髪は乱れ、その瑞々しい肌を鮮血に染めている。

左肩から右腰にかけて斬り裂かれ、溢れ出た血が辺りに水溜まりを作っていた。

そして、こちらを見上げる顔には憎しみに満ちていた。それを確認してから彼は自分の身体を見やる。

着用している軽鎧は鮮血で染め上がり、右手に持つ長剣にも血が滴つており、燃え盛る炎に反射し妖しい輝きを放つ。

『後悔しているか?』

脳裏に響くような声が聞こえて来た。彼は視線を上げ前方を見る。すると、そこには血塗れの少年がこちらを見つめていた。

年齢は倒れている少女と同じ十代後半だろう。その手に持つ槍も鮮血に染まっている。

『後悔しているか?』

再び脳裏に響く声が問うて来た。視線の先の少年から発せられる声だろうか。少年はまるで可憐な美少女のような容姿だ 眼以外は。

少年の切れ長の眼は、まるで猛獸の眼である。鋭い光を宿し、見る者全てを殺すかのような勢いだ。

「……後悔? そんな物しませんよ。持つていて後々後悔する物は、あの時あの場所に全て捨てました」

暗闇に響き渡る彼の声は冷たさを宿していた。彼の脳裏に蘇る記憶。その記憶を無理矢理、押さえ込み言葉を紡ぐ。

「私に残つたのは『義』『忠』『仁』のみ。他は必要ありません」

そう言つた後、一気に間合いを詰めて剣を横に薙いだ。炎の明かりに煌めく剣は少年の首を斬り裂いた。宙に舞う首。鮮血を吹き出しながら倒れる体。

「貴方もその一つです」

鮮血を頭から浴びながらそう咳く。もう一度、地に伏す少女へと視線を戻す。

「……私を憎んでくれていたら、どれ程良かつた……」

彼はそう言い、目を閉じる。過去の記憶が走馬灯のように巡った。そして再び目を開ければ見慣れた自室が視界に入つて來た。

「…………はあ」

彼 夏侯惇は先程、見ていた夢の内容に大きく溜め息を吐き、座っている椅子の背もたれに寄り掛かる。目の前の机には内政に関する様々な木簡や竹簡。

仕事の途中で居眠りしてしまったようだ。窓の外はすっかり暗く

なっている。夏侯惇は再び溜め息を吐いた。

「……疲れていますね」

流石に慣れない文官の仕事をやり過ぎた所為だらうか。いや、ただ単に働き過ぎただけだろう。だが休めない。休む事は出来ない。劉備軍は武官には充実しているが文官は絶望的に少ない。

大きな問題であれば諸葛亮や鳳統が対処するが細々とした問題は通常の文官が対処しなければならない。それを劉備が分かつているのか分かつていないのである。

そもそも劉備が君主なのか夏侯惇には最近分からなくなってきた。その原因は北郷一刀である。劉備や関羽達は一刀の事を『御主人様』と呼び、まるで臣下のような態度で接している。

夏侯惇には理解が出来ない。何やら占い師の予言による『天の御使い』という救世主らしい。

物凄く嘘臭い。というより神や奇跡を信じない夏侯惇にしてみれば、そんな戯れ言を信じる暇があつたら兵法書を読んでいた方がよっぽど有意義だと思つ。

とにかく文官の人数が壊滅的に少なく、その分を補う為に夏侯惇が頑張っている訳である。

（……あー、流石に三日間徹夜は無茶でしたか……）

そう思いながら手元に置いてあつた手鏡を覗く。問題児三人組が遊びに来た時に置いていった代物だ。

（……この眼では人前に出れませんね……）

そこに映っていたのは、見る者全てを抹殺するかの如き旦付きをした夏侯惇がいた。もう一度、溜め息を吐きながら前髪を搔き上げ目付きを元に戻そうと意識する。

「夏侯霸の旦那あ、入るでえ」

「お邪魔しますなの！」

「おい、お前、ひ

騒々しい音を立て扉が開き、更に騒々しい問題児三人組がそれぞ

れ言葉を発しながら入つて来た。

「……既に入つてから言わないで下さい」

「そんなケチケチせんといてや、旦那」

「そりなの。気にしないな」

「おい！いい加減にしろ！」

「そ、う、ら、し、い、で、曰、那、」

「ちつがああああああうー！」

「……はあ」

再び溜め息を吐く夏侯惇。今、一番会いたくない人間の栄光に輝く三人だ、と思う夏侯惇。そして再び前髪を搔き上げた。

「うわあ、色っぽいなー」

「それはウチらを誘つ……、冗、鼻血出るで」

「ああ……夏侯霸様……」

「冗い、戻つて来いやー。おーい、冗い」

「……はあ」

溜め息が忍きない夏侯惇。何やら部屋を物色し始める于禁。床に真つ赤な模様を描く樂進。それを連れ戻そうとする李典。

もう仕事は出来そうに無い。こうなつたら全員呼んで酒宴でも始めるよつかと一瞬だけ考える。

「夏侯霸殿、良いメンマと酒が手に入りましたので今宵、晚酌で

」

「あ、おおや！」

「わあーいなのー！」

「何故、お前達がここにいる……」

「ああ……夏侯霸様……」

「……はあ」

趙雲と口論を始める李典達。本当に溜め息が吐きてくれないと思  
う夏侯惇。それに段々と部屋の中が混沌としてきた。

「か、かか夏侯霸！ 良い酒が手に入つてな。いや、お前がこんな  
遅くまで仕事して可哀想だから、差し入れに……いや、お前の為に  
ではなくて、ただ差し入れに」

「まいど、おおきに」

「わあーい、増えたなの！」

「クッ！ 焰耶、貴様もか！！」

「ああ……夏侯霸様……」

「……樂進殿、そろそろ命が危ないので止めた方が良いと思つのですが」「

神は更なる混沌を望んでこりやうだ 夏侯惇は神の存在を信じていなが。そもそも魏延の言つている内容が矛盾しているような気がする。

「いやあ。大人氣ですね、元讓殿」

いつの間にか夏侯淵も来ており、夏侯惇だけに聞こえるように言ふ。「う。それに夏侯惇も応じた。

「良い迷惑ですよ。まあ、飲むなら飲みましょ。流石に限界なので休まないと」

そう言いながら夏侯淵が持つて来た酒を飲み始める夏侯惇。いつの間にか趙雲達も酒宴を始めていた。

そして夏侯淵は李典達と他愛も無い話をしていた筈だったのだが。

。

「仲権殿は意外に純情で、まだ女性を抱いた事がないんだよ

「ええええええ！？ マジかいな！？」

「嘘なのーー？」

「本当本当」

気が付けば何やら夏侯惇の女性関係についての話をしていた。更に趙雲や魏延、樂進も聞き耳を立てている。

「あの百戦錬磨の顔で……有り得へんわ

「……有り得ないなの」

「……何ですか、その眼は」

驚愕の表情でこちらを見つめる李典達。正直、他人からどんな風に思われていたのだろうか疑問に思つ夏侯惇。少し傷付く。

「しかも恋した回数は一度、幼なじみへの初恋だけ。しかも、相思

「なー?」

「…………」

「李権ー!」

全員がそれぞれ驚く。これは洒落にならない。これで趙雲達に夏侯惇への恋を諦めさせよ!といつ事も考えられるが、夏侯淵がそんな事をするとは考えられない。

そもそも彼女達は彼女達自身の恋心に気が付いていない。つまり夏侯淵は、この事で彼女達自身が抱いている恋心に気が付かせる算段なのだろう。

それも面倒だが、それよりも初恋に関しては触れないで欲しい。蘇る過去の記憶。楽しく充実し、一生で一番輝いていた瞬間だ。そして、それを上回る忌まわしさ。

「もー、見てるこっちが恥ずかしくなるくらいの仲だつたな。しかも両人とも自分の親に頼み込んで許婚にしてもらう程

「……あ、いや。ハハハ、私とした事がメンマの追加を持って来るのを許されました」

「ワワワ、ワタシはシマリを持つて来る」

「……私も少し……」

趙雲、魏延、樂進がそう言い残し部屋を出て行く。その後ろ姿を楽しそうな表情で見送る李典、于禁、夏侯淵。

「……李典殿、于禁殿。この時間でも開いている店があるので、酒を買つて来てはくれませんか？ お釣りは上げますので」

「ホンマー！ んじゃ、行つて来るわ！」

「行くなのー！」

金を受け取つた二人は何か話ながら部屋を出て行つた。

「これで自分達の恋心に気が付けば良いですけどね」

「……妙才」

笑いながら言ひ夏侯淵を呼びながら睨み付け、言い放つた。

「黙れ」

「……まさか……そんな……」

その時、自分がどんな表情をしていたのか分からぬ。しかし夏侯淵は何かを悟つたらしい。有り得ない、といった表情でこちらを見ている。

「そんな……何十年も昔の事ではありませんか!!　あいつだって元譲殿に幸せになつて欲しい筈です!!」

必死な表情で叫ぶ夏侯淵。そんな夏侯淵の胸ぐらを荒々しく掴み引き寄せる。

「妙才、別に俺はお前の行動を制限はしない。お前が何をしようともお前の勝手だ」

自分の声に殺氣が込もつてゐるが関係無い。そして田の前にある夏侯淵の瞳には自分の顔が歪んで映つていた。凄まじく鋭い眼光を宿している。

「誰がどいつと俺には関係無い。あいつらが俺に恋心を抱ひこいつが関係無い。そういう年頃だから仕方ない」

「…………

「だがな、俺の心には一歩たりとも踏み入れさすつもりも無い。失つて後悔するくらいなら初めから持つていない方が良い。だから俺は全てを捨てた。お前があいつらに何と言おうが俺は誰も受け入れない。分かったか、妙才」

そう言い放ち夏侯淵を投げるよつて離す。夏侯淵は無様に尻餅をつきながら悔しそうに呟いた。

「…………俺の馬鹿野郎…………

夏侯惇は聞かなかつた振りをしながら酒を飲む。脳裏に浮かぶ過去の記憶。

（恨むべきは己の弱也……憎むべきは己の弱也。大切な物は俺に弱点を作り弱くするだけだ）

窓越しに広がる闇夜に浮かぶ月を睨みながら、そう思ひ夏侯惇だつた。

## 変わり行く信念

青々とした空はじこまでも透き通り、そこに浮かぶ太陽は優しく大地を見下ろしている。

雲一つとして無い晴天。以前ならば己の武を更に高める為に鍛練をしている筈だった。しかし、最近は違う。

彼女は涼やかな風を感じながら田の前に広がる字の羅列を読み進める。初めは理解するのに苦しんだが最近では、それなりに分かるようになってきた。

（ふむ……軍を率いるには武だけではなく文武を統合し、戦争をするには剛だけではなく柔も兼ね備える……か。成る程、成る程。まさに『あの方』だな）

「お、こんな所で何してんの？」

（世人は将を論ずる場合、勇気という点を重視しがちだが、勇気は将の条件の何分の一にしか過ぎない。勇者は力に頼んで戦を始めるが、利害を考えずに戦うのは愚かな事である……まさに私ではないか……）

「おーい、聞こえとる?」

(将の心すべき事は五つ。管理、準備、決意、自戒、簡素化。ふむ、奥が深い)

「なあ、無視せんとしてや」

誰かの声が先程から聞こえて来ているような気がする。このまま無視し続けても良いのだが後々、面倒な事になりそうなので反応する事にした。

「……何か私に用か、張遼？」

「あ、やつと反応してくれた。もう、華雄は最近冷たいで」

彼女　　華雄の視線の先にいる紫髪と独特な服装が特徴的な同僚である、張遼がそう言つて來た。

「うむ。私は忙しいのだ」

「また兵法書なんか読んどるんか？　ここ最近、読みっぱなしやんか。ウチは華雄ちんを、そんな娘に育てた覚えは無いで」

「私はお前に育てられた覚えが無いがな」

冷静に返す華雄。以前であれば怒鳴り散らす所であつたが最近は冷静に受け答え出来るようになつた。

これも、の方のおかげであらう。

「わうこうお前」ハハ、最近兵法書にハマつてこらのだりうへ。

「あれ？ バレとつた？」

「ああ」

黄巾党討伐以来、張遼も変わつた。張遼も華雄と同じく武を重んじる傾向にあつたが、今では軍学にも手を伸ばしてこらのうつなのだ。

「まあ、華雄ちん程ではないけどな」

「馬鹿者、私はまだまだ序の口だ。もつと兵法書を読んで勉強しろ」

「いや、少し前の華雄ちんを知つてゐるウチからしたら異常やで。どうか、そんな頑張つても夏侯霸には迫いつ

「

「馬鹿者……」

張遼の言葉が終わらない内に華雄は叫ぶ。そして、殺氣を込めた視線を彼女に投げ付け、声を荒げて続ける。

「あの方を呼び捨てにすることは何たる事か……もう一度言ってみる、貴様を不敬罪で処断するぞ……！」

あまりにも大きな声を出してしまった所為か、近くの木にいた小鳥達が慌てて飛び去って行く。

「わ、分かった！ 分かったから、右手に持つとる戦斧を下ろしてや……！」

張遼が慌てて言つて来た。いつの間にか自分の右手には戦斧が握られている。しばらく張遼を睨み付けた後、仕方なく戦斧を下ろした。その光景を見て張遼はホッとしているのが見て取れる。

「……華雄ちゃん。もし、もしの話やで。もし、夏侯霸教つていう宗教が出来たら……」

「一番最初に入信する」

張遼が恐る恐るといった感じで訊いてきたので、言葉が終わらない内に答えてやつた。本当にそんな宗教が出来たら、例え地の果てにいとも一瞬にして駆け付け真っ先に入信するに決まっている。

「……今更やけど、医者を呼んで来るわ」

「む？ 何故だ？」

何故か怯えたように自分の事を見つめる張遼。何故だらうか。本当に理解出来ない。

本当に夏侯霸教なんて素晴らしい宗教が出来たら泣いて喜ぶくらい嬉しい筈だ。少なくとも華雄はそう信じて疑わない。

「あかん。こんな華雄ちんウチが知つとる華雄ちんとちやう。確かに夏侯霸は凄い将やし尊敬も出来るけど華雄ちんは異常や。はよ医者に診せなあかん」

何やらブツブツ呟き始める張遼。そんな光景を首を傾げ眺めつつ、張遼を医者に診せた方が良いかどうか悩み始める華雄。

「……華雄ちん。もし、夏侯 華雄ちんが尊敬するの方と戦う事があつたらどうするん?」

「そんな事、決まつている。の方に失礼にならんよう全力で戦うまでだ」

張遼は何を馬鹿な事を言つて居るのだろうか。一軍を率いる將は私情を公務に持ち出す筈がない。例え相手が血縁であろう敵ならば戦つまでだ。

「……なら、ええけど」

「当たり前の事を訊いてどうする。そもそも、近い内に戦う事になるだろ? 袁紹を中心に何やら連合軍を作つて居るらしいしな」

華雄がそう言つと張遼は啞然とした表情になつて居た。何故、それを知つて居る。自分もつこさつき知つたばかりなのに、と言いたげな表情だ。

「一軍を率いる將は常日頃からどんな些細な情報でも知つておかなければならぬ。更に戦場の地形や敵軍の戦力、將、士氣を事細かに把握し最善の手を打つ。それが一軍の」

「はいはいはい。分かった、分かったから」

張遼は長くなると判断したので止めたのだろう。それは正しい判断だ。

しかし、夏侯霸直々に教えて貰つた基礎を途中で止められるのはあまり良い気分では無い。

夏侯霸と共にいた時間は少なかつたが様々な事を教わった。そして自分がいかに馬鹿げた考えを持っていたかを悟つたのだ。

もし出来るならば過去の武ばかりを求めていた自分をハつ裂きにしたい。本気でそう思つてはいる華雄。

夏侯霸程の将になると敵軍から放たれる気のような物まで感じる事が出来るらしい。更に極めると目に見えるようになるらしい。

華雄はまだ何となく分かるだけだ。夏侯霸は肌に感じ取る事が出来る。いかに自分が未熟か痛感する。

「んじや、華雄さん。軍議を開くらしいから行くで」

「つむ、分かった。」そこにある物を全部読み終えてからな

「……ウチの見間違いかな。三十は越えども見えてるんやけど

張遼は田を擦りながら言つて來た。確かに見間違いだ。實際には

「ああ、見間違いだ。四十三はあるぞ」

「……ほひ、華雄ちん行くで」

張遼は無表情に華雄の手を掴み、引っ張つて行く。

「ま、待て！ あと、二十冊は読みませ

「あかん。行くで」

「わ、分かった！ せめてこの一冊読み終えてからー」

奮戦虚しく華雄は張遼に連行されて行く。何とか引っ張つられながら読んでいたが自分で歩けと怒られてしまつ華雄であった。

何か変だ。どこか引っ掛けた。先程から夏侯惇は心の中で首を傾げていた。

しかし、どこも変な所は無い。反董卓連合として参加し現在、何の障害も無く着々と虎牢関へ進軍している。

何陣かに分けて虎牢関を囲んでおり、第一陣は公孫賛軍と王匡軍を中心としている。

第一陣は曹操軍と袁術軍傘下の孫策軍が主力。

第三陣は第一、第二陣の後詰めの役割として劉備軍だけである。

そして第四陣は反董卓連合の大将である袁紹が率いる軍勢と残りの諸侯。その後方に補給物資の護衛をしている袁術軍がいる。

総勢で数十万の兵力だ。更に斥候部隊も欠かさず出して周囲を警戒している。第一陣から第三陣だけでも、かなりの兵力だ。陣形にも不備は無い。

しかし何かが引っ掛かる。そう、これは違和感だ。何故、違和感を覚えるのだろうか。分からぬ。

夏侯惇は空を仰ぐ。晴天とは言わないが良い天氣だ。だが少し浮かんでいる雲が、まるで夏侯惇の違和感を表しているかのようだつた。

（……何故だつ。この違和感は……それに、この胸騒ぎは一体……）

更に悩む夏侯惇。しかし答えが出る筈も無かつた。何度も考へても落ち度は無い。

この連合は袁紹がでっち上げた噂から出来た連合だ。この国の董卓が袁紹が言うような悪い事をしているようには思えない。

しかし、これは劉備軍の飛躍の絶好な機会なのだ。今、劉備は平原国の太守をしているが地理的に袁紹の勢力圏に近い為、将来的にマズい場所だ。

だから、この戦で功を挙げ違う土地に移らなければならぬ。袁紹と曹操による対立のとばっちりを受けてはかなわない。

とにかく何が何でも少しは功績を挙げなければならぬのだ。そう考えながらもう一度、北郷一刀に敵軍の陣容を確認しようと思つ

夏侯惇。丁度良い事に一刀は近くにいる。

何故、一刀に訊くのかといつと反董卓連合の軍議に参加したのは一刀と劉備と関羽であり、そして一刀の方が夏侯惇に近かつたからだ。

「北郷殿。もう一度、敵軍の陣容を確認したいのですが」

「うん？ ああ、良いよ。ええと、確か呂布に張遼に華雄に賈駆だつたかな？ それで大将が呂布だよ」

「……どうも、ありがとうございます」

自身無さ<sup>レ</sup>氣な一刀に呆れつつ一応、礼を言つ夏侯惇。そこえ別の声が割つて入つて来た。

「違いますよ御主人様。新しい情報で大将は徐榮といつ将だと軍議で言つておられたではありませんか」

「ああ！ そうだった。『メン愛紗。夏侯霸も』『メン

何か一刀が言つているような氣<sup>レ</sup>がするが、それよりも関羽が発し

た言葉に呆然とした。

彼女は今、何と言つた？ 夏侯惇の頭の中で何かが音を立てて組み合わさつた。更に胸騒ぎの正体を理解してしまつ。

そして、それと同時に最悪の展開が脳裏に浮かんだ。そんな筈はないと思いたいが、否定出来ない。むしろ全てにおいて納得出来る。

「全隊、進軍停止！！　すぐさま迎撃陣形を！！　両翼には騎馬隊を！　中央は歩兵隊を槍兵、弓兵、弩兵、重弩兵の順番で展開！　槍兵は一重に展開せよ！！　急いで下せー！」

夏侯惇は矢継ぎ早に指示を下す。その姿を一刀や関羽達が呆然と見ているが関係無い。急がないと本当に取り返しの付かない事になる。

「……あ、夏侯霸！　貴様、何を勝手に　」

「どうかしたの、愛紗ちゃん？」

関羽は我に返つたのか何か怒鳴りつとする。その時丁度、劉備が騒ぎに気が付いたのか近付いて来た。

「劉備様！　私に全軍の指揮権を任せてくれ……！」

「え？」

「だから貴様は何を言つて居る……！」

「そうだよ、愛紗の言つ通りだ。敵の大将は呂布じゃなくて徐榮だから大丈夫だ」

「全員が口々に言つが一刀の一言は信じられなかつた。相手が徐榮だから大丈夫だと？　何故、そんな事が言えるのか理解出来ない。」

「相手が徐榮だから急がないと駄目なんですよ……！　呂布の方が何十倍もマシですよ……！」

「何でだよ？　徐榮って董卓軍でも全く聞かない名前だし……それに確か、あまり強く無い筈だろ？」

夏侯惇が叫んでも一刀はのんびりとした口調で答える。『冗談を言つていると信じたい。いや、冗談であつても洒落にならない。』

「天の国の知識か何だか知りませんが貴方の武将に関する知識は間

違っています！！ 徐栄は「

最後まで言葉が続かなかつた。何故なら劉備軍の前方から喚声が空気を震わせ伝わつて來たからだ。

夏侯惇は急いで視線を劉備軍前方に向ける。第一陣辺りで土煙が上がつていた。夏侯惇は自分の頬が引きつるのを感じた。

「あれは一体？」

「何だよ、あれは？」

「何だろ？ ね？」

どうしようも無い程の間抜けな声を上げる関羽、一刀、劉備。その中で夏侯惇は何とか冷静さを保ちながら必死に打つ手を考えつつ言い放つ。

「第一陣は突破されたようです。敵兵力は三万五千。その内、一万五千がこちらに向かつて來ています」

「え？」

「は？」

「へ？」

何も理解出来ていない顔でこちらを見て来る三人。いい加減にして欲しい。もう時間が無いのに。

劉備軍でも迎撃体制を整えているのは夏侯淵は勿論の事、趙雲や魏延達など夏侯惇と共に行動していた者達だけだ。

「……そ、そんな馬鹿な。守勢側が数十万もの兵力に突っ込む馬鹿がいるか！」

「その油断が命取りになるのです！ そもそも守勢側が攻めてはいけないという決まりはありません。それに我々は長い行軍の末に兵士達には疲労が蓄積しています。この機会を逃す馬鹿はいませんよ！」

关羽に怒鳴り返す夏侯惇。前々から思っていたが、この国の人間は本当の戦を知らない。この国の曹操でさえ知らないのだ。最早、怒りを通り越して呆れが来る。

兵士達もどれ程、危険な状態か理解したらしく急いで陣形を整えてようとしているが、もう遅い。間に合つたとしてもギリギリだろう。

もう敵の旗印が視認出来る程の距離だ。旗印は『徐』と『曰』。その旗を睨みながら自分の騎馬隊を集めて駆け出す夏侯惇。

一刀達が騒いでいたが無視して敵軍の側面へと回り込むようにして展開する。僅か五百騎だが少しは圧力になる筈だ。

予想通り敵軍の一部がこちらに向かつて来た。数は一千騎、旗印は『徐』。

全て夏侯惇の予想通り。そして恐らく相手の将も。

聴覚に伝わる風を切り裂く震動を感じつつ向かつて来た騎馬隊とぶつかった。即座に一人斬り落とし、敵将らしき人物に斬り掛かる。

大気を斬り裂き、陽光に刀身を煌めかせながら相手の身体を喰い千切る筈だった。

辺り響き渡る甲高い音。夏侯惇の一撃は相手の剣に受け止められていた。

そのまま相手を睨み付ける。黒い短髪に鋭い眼光。騎乗していくも

夏侯惇より長身だという事が分かる背丈の青年。

一十代前半といった所だらうか。しかし田の前の青年が醸し出す  
雰囲気は夏侯惇の予想通り、知っている雰囲気だ。

自分達が幾度と無く煮え湯を飲まされた『あの将』の雰囲気。

「久しいですね、徐將軍。まさか貴方までこの国へ来ていたとは思  
いもしませんでしたよ」

「ほほう。この剣筋、雰囲気、用兵、夏侯惇殿か。まったく、再び  
敵として出念うとはな」

「そう若返つてゐるが彼はあの徐榮だ。夏侯惇達が元々いた国で反  
董卓連合の時に戦い、そして敗れた相手。

「ふむ、貴様が相手となると少し辛いな。まあ、良い。今回は挨拶  
代わりだったからな」

「挨拶代わりで、ここまでは貴方だけですよ、徐將軍」

「フフ、讃め言葉として取つておいて。では、さうまだ夏侯惇殿」

そう言い放つとすぐさま陣形を整えながら退却を始める徐榮。劉備軍本隊を襲っていた部隊も素早く合流し後退し始める。

引き際も見事。更に退却の仕方も見事としか言えない。もし追撃すれば逆に殺られるだろう。

「……流石は董卓軍で一番の名将と呼ばれた者ですね」

感心の言葉を発するものの冷や汗が止まらない。自分達以外に誰か、この国へと来っていてもおかしくは無い。まさか徐榮だとは思いもよらなかつたが。

（……これは本当にマズいですね……本氣で洒落にならません）

劉備軍全体の被害を日測で確認しながら心底感じる夏侯惇。空に浮かぶ僅かな雲が先程よりも、どす黒く感じられた。

## 混迷する戦況（前書き）

……四壁面のキャラが書き難いです。

## 混迷する戦況

深闇が支配する世界に轟く兵士の喚声は大気を伝わり彼女の聴覚へと届く。

風はむせ返りそつうな程の血の臭氣を運び、僅かな月明かりの下で鮮血が散つて行く花びらのように舞う。

至る所から湧き上がる悲鳴、絶叫、悲痛なうめき声。迫り来る刃は月光に妖しく煌めく。そして、彼女は自分が持っている剣で迫り来る刃を受け止めた。

甲高い音と共に飛び散る火花が一瞬だけ仄かな明かりを放つ。すぐさま相手の剣を弾き飛ばし剣を横に一閃させる。舞い上がる首と倒れ行く首無しの身体を尻目に次の獲物を探す。

「まつたく、私の寝込みを襲うなんて良い度胸してゐるじゃないの」

そう呴くものの辺りの喧騒に飲み込まれ消える。

情勢はかなり危険だ。誰もが予想も出来ない事態であつた。

初っぱなから敵に強襲され、どうにか陣立て直し虎牢関を攻めても敵はびくともせず逆に被害が増えるばかり。

攻めるのを止めて退いても追撃され、更には伏兵に会い被害甚大。虎牢関から出た所を狙おうとしても失敗続。

そして退くと見せ掛けて伏兵で叩こうにも見破られる始末。虎牢関の周囲には死体だらけ。兵の士氣も否応なしに下がっていく。

そんな時に夜襲だ。しかも他の陣営からも騒がしい声が聞こえる所から同時に複数の部隊が行っているのだろう。燃え盛る『孫』の軍旗を睨み付けながら、そう考える。

「雪蓮！ 一旦、陣を立て直す為に退こう！ 」このままでは我が軍は壊滅するぞ……

月光に輝く黒い長髪に右手には鞭を持つ女性　冥琳がそう叫ぶ  
ように叫んで来た。

「それは出来ない。反董卓連合が虎牢関を攻めて一週間も経たない内に全滅なんて洒落にならないわよ！ 私は天下の笑い者にはされたくない！！」

そう彼女　雪蓮は叫び返し迫り来る敵兵を斬り裂く。吹き出した返り血を浴びる。いつもならば興奮するのだが、それよりも焦り

の方が大きかつた。

「雪蓮！－！　後ろ！－！」

冥琳の叫び声が聞こえて來た。それと同時に背後から迫り来る殺氣を感じた。慌てて振り返ると、敵兵が槍でこちらを突こうとしている。

避けようにも間に合わない。防ぐ事も不可能だつ。このまま名も無き兵士に殺されるのか、そんな言葉が脳裏を駆け巡つた。

嫌だ。まだ死ねない。そう思つた所で雪蓮を貫こうとする槍が止まる筈も無かつた。迫り来る槍。貫かれた後に来るであろう痛みに備える雪蓮。

その時だつた。雪蓮を貫こうとしていた敵兵の左側頭部を矢が貫いた。その衝撃で敵兵は大きく吹き飛ばされる。

「雪蓮！　無事か！－！」

「え、ええ」

駆け寄つて来た冥琳にそう答える雪蓮。田の前の光景に驚愕しながら矢が飛んで来た方へ視線を向けた。すると、こちらへと向かって来る騎兵が十数騎。

「……お見事です」

「お前の淡々とした口調で言われても嬉しく無いぞ、高順。それに、あの程度の距離で当たらない方がおかしいだろ?」

「……昼間で徒步ならば、そうでしじょうが流石に今の条件では……」

先頭にいる青年が明るい口調で隣にいる青年と何か会話をしている。先程の矢を放つたのは先頭にいる青年だろう。その証拠に彼の右手には『』が握られていた。

「いやあ、それにしても大丈夫か?」

「……え、ええ。助かつたわ」

先頭にいる青年は急に雪蓮に向かって言葉を発して来た。それに若干、戸惑いながらも答える雪蓮。

「礼には及ばないよ。俺は姓が夏侯、名はえん……じゃなくて威、字を妙ひ……でもなくて李権だ」

「夏侯威といつと劉備軍か」

「おうよ

明瞭に答える青年 夏侯威。そこで雪蓮はある事に気が付いた。

（……もしかして、あの距離で射てたの！？）

先程、夏侯威達がいた場所から雪蓮がいた場所までは距離がある。しかし、矢が届かない範囲では無い。

だが届くのと当てるのでは全く違う。更に月明かりの中、しかも馬上で。驚異的と言つても過言では無い。

そんな事実に気付き愕然としていた時、だつた。二百騎程の軍勢がこちらに向かって来る。あちこちに燃え盛っていた火は既に鎮火しとおり月明かりも肝心の月が雲に隠れてしまい、何とか見える状態である。

「まったく、暗くなつて何も見えんぢ……げ、夏侯威！？」

「あ？ 何だ、張遼か。それに華雄まで」

「どうやら襲撃して来た敵の軍勢だつたらし。しかも、その軍勢の先頭にいる敵将の張遼に華雄だつた。

非常にマズい状況だ。雪蓮達の周りには五十名程の兵士しかいな。対する敵は一百の騎馬隊。完全に劣勢だ。雪蓮や隣にいる冥琳は獲物を構える中、夏侯威達の会話は続く。

「張遼、早く帰るぞ。援軍が来たら厄介だ」

「そやけど、今が絶好の機会やん！ ここであいつら討ち取つたら後々、楽になるやんか！！」

「俺もそつう思つたが、惜しかつたね。援軍、もつすべ到着するぞ」

他人事のよつと宣言の夏侯威。確かに後方から馬蹄の音が聞こえて来る。恐らく数百騎規模だらつ。

その事実に渋々、頷く張遼。どうやら撤退するらしい。雪蓮にし

てみても無駄な戦はしたくない。そう思つていたのだが。

「なー? もしや、あの旗印そしてこの静かで雄々しい馬蹄の音は  
あの方のー、スマン、張遼。私には大切な用事が出来たから先に帰  
還しておこしてくれ」

「アホウーー、どこに行こうとするんやー?」

「いや、あの方に少し挨拶と共に私の用兵術を見てもいいね」と

「あんたなあーー、自分で早よ帰るつて言つて、それかいな  
! ? ていうか、めつさ危ないで帰るでー!」

何故か先程とは逆に華雄が駄々っ子し始めた。それに逆ギレする  
張遼。その光景について行けず呆然とする雪蓮だった。

「あ、いや、少し待つてくれ! せめてあの方のお顔を間近で見て  
から」

「あかへん。帰るで」

「だ、だが。これまで四回も擦れ違つてゐるのだぞ。それに初めの

強襲の時だつてあの方が第三陣にいるのならば私だつて

「

「帰る」

「いや、待て張遼！ 話せば分かる。だから少し待つてくれ……」

「分からへん。帰る」

「た、頼む！ 頼むから、待つてくれ」

「聞けへん聞けへん。ほら、帰るで華雄ちん」

まるで親猫が子猫を運ぶように華雄の馬のくつわを掴みながら無理矢理連行して行く張遼。

思わず呆気に取られながら闇へと消え失せる背中を見送る。しばらく張遼の怒鳴り声が辺りに響き渡つていた。

「……それでも派手にやられたな

ポツリと呟いた夏侯威の言葉が雪蓮の胸に突き刺さる。雪蓮はそ

んな夏侯威を睨み付け文句を言おうとしたが、次に出て来た彼の言葉に遮られた。

「でも、お前らが無事で良かつたよ。助けに来たのに田の前で死なれたら夢見が悪い。それに、これからが反撃開始だ」

そう勇ましく言つ夏侯威の横顔を思わず見つめてしまつた雪蓮だった。

## 反撃の狼煙

「よし。皆、味方を助けに行くぞーーー。」

「はい、御主人様」

「皆！ 私に続けええええーーー！」

「鈴々達も続くのだーーー！」

一刀の叫びに応じる桃香、愛紗、鈴々。更に一刀の傍らには朱里や雛里もいる。そんな一刀の視界に広がる光景は悲惨な物であった。

反董卓連合と董卓軍の戦いは反董卓連合が優勢、その後に董卓が洛陽を放棄して終結するというのが一刀が知っている歴史。

多少の誤差があったとしても、歴史通り進む筈だと思っていた。少なくとも、今までが歴史通りだったのだから。

しかし現在、彼の視線の先に広がる光景は違っていた。曹操軍や公孫賛軍等の軍勢が押し負けている。呂布軍や張遼軍、華雄軍が

縦横無尽に暴れ回っている所為だ。一刀はそう判断していた。

夏侯霸は徐榮の事を一番の強敵みたいな言い方をしていた。確かに徐榮も強いと思つ。

だが、やはり呂布や張遼、華雄の方が強敵だと思っている。事実、派手に暴れている呂布軍達に対して徐榮軍は地味に動き回っているだけだ。

とにかく、一刀達は苦戦している味方の救援の為に出陣した。夏侯霸は裏で何かしているらしく、この場にいない。

夏侯威も袁術から新たに兵士を供給して貰つた孫策軍の再編成の手伝いでいる。星や焰耶達は夜襲の対応で疲れていると思い、待機させたままである。

それでも、ひらひらには愛紗や鈴々、いざとこつ時には朱里や雛里がいる。

呂布達以外には張濟や胡軫といった、あまり聞かない名前の将もいるが武力だけが秀でた猪突猛進の将だらつ。

ならば、こちらの方が有利だ。そんな一刀の思いを乗せて愛紗と

鈴々の軍勢は敵に突撃を仕掛けて行く。

晴天下の戦場に轟く喚声。まるで波のよじて退いて行く胡軒軍。流石は軍神関羽と猛将張飛、圧倒的だ。

「これだつたら行ける。」

「はい。このまま押し切りましょう」

そう朱里が言い、離里も頷く。胡軒軍が押された為だらうか、張濟軍もあっさりと退却して行く。

勝てる。このまま行けば確実に勝てる筈だ。一刀は興奮しながらそう思つ。このチャンスを逃してはいけない。

「よしーーーこの機に乗じて俺達も行こうーーー。」

一刀は大声で叫び、自分達も戦場に向かおうとする。体が震える。恐らく武者震いだらう。そのまま馬に乗り、駆け出そうとした。しかし

「悪いけど、行かせないよ

そんな声が背後から聞こえ次の瞬間、景色が一転し背中から重い衝撃が伝わって来た。背中から来る痛みに何も言えず、うずくまりながら呻く事しか出来ない。何とか落馬した事は理解出来た。

そして、いつの間にか辺りは兵士達の叫び声に包み込まれている。

「はあ。徐將軍も人使いが荒いよ。一寸間もこんな所に隠れていろ、だなんてさ」

一刀は何とか顔を上げて声の主を見上げる。視線の先には馬に乗つた凛々しい顔立ちの将がいた。

セミショートで藍色の髪と眼。そして、しなやかな柳のような体付き。

「ええと、貴方が天の御使い君だよね。初めまして樊稠という者です」

困ったように笑いながら、少しハスキーな声で言つて来た。しかし、その手には戟を携えている。刃から放たれる光は不気味に感じられた。

「悪いけど、ここで死んでもいい。月を討たせる訳にはいかないんだ。本当にごめん。せめて楽に死ねるようにするから」

そう言いながら戟を構える将 樊稠。陽光に輝く刃がこちらを向き、冷たい光を放つ。

体温が一気に下がったのだろう。身体の芯が恐ろしく寒い。そして、今すぐに逃げ出したいのだが身体が動かない。

力が入らない。身体が震え始める。無論、先程とは違う震えだ。呼吸も荒くなる。

怖い。一刀の心中、全てを恐怖が支配した。愛紗から叩き込まれた戦い方や対処方が全て頭の中から吹き飛んだ。

何をすれば良いのか分からぬ。分かつたとしても身体が動かない。ただ単に迫り来る死に恐怖するばかり。

何も出来ずに迫り来る白銀の刃を見つめ続けていた時だった。一瞬にして視界を遮る白い衣。鳴り響く甲高い金属音。

「おやおや、大丈夫ですか、北郷殿？」

「あ、あ……せ、星！？」

「クソ、援軍か」

涼やかな声が一刀の心に染み渡る。毒づきながら距離を取る樊稠。そんな樊稠と向き合ひ星の後ろ姿が頬もしい。

「退いてくれないかな。僕は彼を早く討たなくてはいけないんだよ」

「それは無理な相談だな。これは夏侯霸殿の御命令だからな」

睨み合ひ両者。一瞬たりとも気が抜けない空気が漂う。一刀はそんな光景に視線を逸らせずにいた。

「ああ、それとだな。一つ良い事を教えよう」

「ん？」

「虎牢関は落ちたで」

「何を言つ　」

星の言葉に反論しようとした樊稠の声が止まり、呆然としている。一刀も慌てて樊稠の先　　虎牢関の方を向いた。  
あると、そこにほ

「そ、そんな馬鹿な！？　何で虎牢関が燃えているんだ！…」

虎牢関からは幾つもの黒煙が上がっている。そして門も開いていた。

「な、何故、何故なんだ！？　どうして　」

「後ろから失礼します」

樊稠の言葉を遮るようにして場違いな程、穏やかな声が聞こえてきた。それと共に力尽きたように地面へと倒れる樊稠。

「さて、趙雲殿。御苦勞様でした。後は陣形を整えて洛陽へと向かうだけです」

「御意…」

樊稠の背後から現れたのは夏侯霸であった。夏侯霸の言葉を聞き、どこかへと向かう星。

夏侯霸は夏侯霸で氣絶している樊稠を部下に任せていた。何がどうなっているのか理解出来ない。

「北郷殿は、このまま關羽殿達と合流して下さい」

「え、いや、あの…… 一体どうなったんだ？」

訳が分からず尋ねる一刀。それに對して夏侯霸はいつものように穏やかに微笑みながら答える。

「時間が惜しいので簡単に説明しますと、昨晩の敵軍の夜襲部隊に紛れて孫礼殿が部下と虎牢関に潜入。そして、火を放った後に開門。その機会を逃さず夏侯威達が虎牢関を突つ切り洛陽へと直行」

淡々と話す夏侯霸。どうやら河北に残っていた孫礼を呼んだらしい。夏侯霸は更に言葉を紡ぐ。

「虎牢関は孫策軍に任せています。呂布、華雄、張遼は既に私が撃破し捕らえました。張濟軍と胡軒軍は張燕殿と、その他多数で囲っています。まあ、彼らまで来るとは思っていませんでした。ちな

みに諸葛亮殿達は救出済みです

そう言い、最後に苦笑する夏侯霸。一刀は視線を転じて戦場を見渡してみた。すると先程とは全く違う光景が広がっている。

呂布や張遼、華雄の軍勢は消え失せ、胡軒、張濟の軍勢は多数の部隊に囲まれていた。その中には黄巾党の残党らしき部隊までいる。

愛紗や鈴々、桃香の部隊は何がどうなっているのかさっぱり分からぬといった様子でうろづろしているばかり。

「さて、北郷殿。劉備様達の軍勢をまとめて速やかに洛陽へと向かいましょう。虎牢関は袁紹殿達の足を止めるには十分過ぎる程の餉ですからね」

あつさりと言い放つ夏侯霸。つまり、虎牢関を餉にして自分達だけで本命 洛陽を制圧するという事だ。

何とか理解する一刀。だが、実際に実行して成功出来るのだろうか。そもそもここまで作戦を思い付き更に実行して成功させるなんて信じられない。

素直に驚いた。凄いとも思つ。自分が夏侯霸を過小評価し過ぎて

いた事が恥ずかしくも思つ。

しかし、それと同時に少しだけ恐怖も感じた。いつも通りの夏侯霸の微笑みに恐ろしさを感じる一刀であつた。

## 『貸し』と『借り』

洛陽制圧戦。それは歴史に残る戦いだらうと評価を下す夏侯淵。

天を舐めるように燃え盛る虎牢関を突破し、一直線に洛陽へと向かつた夏侯淵率いる四千の軍勢。

無論、僅か四千の兵力で洛陽を落とす事など到底無理である。しかし、虎牢関での戦いが始まる前に洛陽にも何人か忍び込ましてある。

夏侯淵が洛陽を攻めると同時に城門を開ける算段だ。城内へ突入後、すぐさま董卓以下の首脳部を捕縛。それが無理であれば城門付近を制圧し、後続の為の橋頭堡を確保。

どちらにしても、この作戦は夏侯淵の十八番である。敵陣への強襲作戦。伊達に曹魏の將軍をやつていた訳では無い。

夏侯淵は駆けた。まるで風になつたかのよつに大気を切り裂き進む。

そして洛陽へと到着。手筈通り城門は開いていた。夏侯惇ばかりに負担を掛ける訳にはいかない。

そういう思い、雄叫びを上げ激しく攻め立てる 予定だった。

本当に少し……いや、大分……いや、結構……いや真面目に何なんだろうなと現在、物思いに耽っている。

空には雲も無く、まさに晴天だ。それが逆に悲しい。何をやつていたのだろうか。

いや、別に構わない。結果が全てである。むしろ損害が出なかつたから喜ぶべきだ。しかし、どこか虚しい。

結論を言つと 。

（……何で降伏するんだよ……）

複雑な気持ちになる夏侯淵。人が少ないものの賑わいを見せる洛陽。

つまり董卓は夏侯淵が洛陽へ突入する前に降伏したのだ。そもそも虎牢関が落ちたら降伏する予定だったらしい。

結局、一度も刃を交える事なく洛陽を制圧。既に董卓の軍勢は武装解除していた。

なので洛陽を攻め落とす筈だった夏侯淵の部隊は劉備軍本隊が到着するまで洛陽の治安維持の為に巡回する羽田し。

そして現在、微妙な気分になりつつ街を歩いている。夏侯惇達は後始末の為に諸侯と会談中。

つまり自分達がどれだけ活躍したかの自慢大会を開催しているといつ事である。

ちなみに帝や朝廷は反董卓連合が出来た時点で長安に引っ越したよつだ。その際、洛陽の民の一部も引っ越したようだ。

これは夏侯惇の計略通りなので問題無い。今、帝の下へ行つても劉備軍の力は弱く朝廷にこき使われるだけだ。

そして朝廷が洛陽に居たままで、すぐに曹操の勢力圏に入つてしまつ。朝廷を手中に收める時には曹操軍もかなり力を付けている筈だ。

といつ訳で長安に引っ越すように仕向けたのである。長安は漢王朝に忠義を誓つてゐる馬騰の勢力圏に近いので何とかなるだつ。

夏侯淵は歩きながら考え改めて夏侯惇の凄さに感嘆する。そういうしてゐる内に目的地へ到着したようだ。更に丁度良い具合に目的の人物が姿を現した。

「よう、孫策」

「ん？ どうかしたの、夏侯威？」

夏侯淵に言葉を返す孫策。 そう夏侯淵の目的地は孫策軍の駐屯地であり、そこにいる孫策に会つのが目的であつた。

「ああ、あの時の礼がしたくてな」

「あの時？」

夏侯淵の言葉に首を傾げる孫策。 そんな孫策に夏侯淵は言葉を紡ぐ。

「いや、俺が虎牢関を突破する時に關内の軍勢を止めてくれただろ。

「それの礼」

「ああ、それなら別に構わないわ。その前の夜襲の時に貴方に助けられてるから。これで貸し借り無しつて事で」

「あ？ それは貸し借りに入らないぞ。あれはお前を助ける事が任だつたからな。俺は『えられた任を果たしたまでだから』

楽しげに言う孫策に対し、そう答える。すると孫策は眉を潜めて、じちらを見て来る。そんな事を無視しつつ言葉を続けた。

「ところづでお礼にこれをするよ」

そう言い小さな布袋を孫策に投げ渡す。勿論、お礼の品はその中に入っている。偶然にも井戸の中で発見した物だ。

孫策は顔をしかめたまま布袋の中身を確かめる。そして確かめた瞬間、驚愕したような表情になった。

「い、これって」

「おひ、やねよ。別に俺らには必要じゃないしな

「で、でも、これって云国の玉璽」

「ん？ そうだけど。まあ、俺らにしてみれば金色の石ころだ。だけど、その石ころを高値で買い取る強欲商人もいるからな」

笑いながら答えてやる。ここで『強欲商人』とは袁術の事である。暗に独立する為の担保にしな、という事だ。

「これで本当に貸し借りは帳消しだからな」

「……割に合わないわよ」

「はあ？」

「割に合わないって言つてるのー。私達は、ただ単に突破するのを手伝つただけなのに……」これじゃあ割に合わないわよーーー！」

怒鳴る孫策。別に夏侯淵は割に合わないとは考えない。むしろ下手に持つても危険だ。

だから、それを有効に使える者に渡しだけである。夏侯淵の独断だが夏侯惇も怒らない筈だ。

「あー、そんなに怒鳴るなつて孫策」

「雪蓮よ」

「……はー?」

「だから雪蓮って呼んでつて言つてるのー。」

「いや……それってお前の真名だろ?」

少し驚きつつ訊く夏侯淵。その問いに孫策 雪蓮は頷く。

「真名つて命と同じく大事なんだろ? それじゃあ逆に俺の方  
が」

「はあー? こんな凄い物のお返しに真名を教えただけじゃあ足り  
ないわよーーー!」

「俺的にはお前の命の方が大事だぞ。玉靈なんて、たかが金ぴかの石ころだろ？んな物よりお前の命の方がよっぽど大切だ」

「…………え？」

何度も何度も喰い下がつて来るので正直に言つてやつた。すると何故か孫策は呆然とした表情になる。

どうやら、ようやく分かつてくれたようだ。全く女性は強情な奴が多いと失礼な事を考える夏侯淵。

「あ…………いや…………でも」

「あー。まあ、せつかく真名を教えてくれたんだから受け取らないと失礼だよな。だから真名だけは受け取つておくよ」

要するに面倒だから、これ以上の話題を引き延ばすのは止めようと言外に言つてているのだ。

しかし、何故か孫策 雪蓮は俯いてブツブツ何か呟いている。一体、どうしたのだろうか。

「んじや。俺、帰るから

「あ、ちょっと待った！」

「ん？」

「……もし、何かあつたら助けてあげるから」

夏侯淵を呼び止めた雪蓮は明後日の方向を見ながら言つて来た。その言葉に夏侯淵は雪蓮に笑い掛けながら答える。

「おひ。ありがとな雪蓮。んじや、またな

「……ええ。またね

何だかんだ言って良い奴だなと思いながら帰路に着く夏侯淵。また戦場を共にする事を期待しながら戦友の陣営から去つて行つた。

あまり広くない一室に漂う静かな空気。外からは小鳥達のさえずりが聞こえ、仕事で疲れた身体を癒してくれるような気がする。

椅子の背もたれに寄り掛かりながら体を伸ばす樊稠。長い時間、座っていた為か骨が鳴るのが分かる。

執務用の机に竹簡を置き、一息吐く。

虎牢関の戦いの後、劉備軍に参入して少し月日が経つ。劉備軍の雰囲気に馴染んできている。

月を始めとする旧董卓陣営の将や文官の大半、更には他勢力からも劉備軍に参入した者もいる。

旧董卓軍からは賈駒や華雄、張遼、呂布、張濟、胡軒、李儒その他多数がいる。他勢力での代表例は袁紹軍から朱靈や孔融軍から武安国やその他にも参入した。

樊稠としては幼なじみで親友である月の安全が保証されれば、どこでも良かった。少なくとも初めはそう思っていた。

しかし、今では劉備軍に入つて良かつたと心底思つてゐる。樊稠は顔を彼の方へと向ける。

そこには窓から差し込む光に反射し輝きを放つ艶やかな黒髪、瑞々しい肌を持ち切れ長の眼を内政の報告が書かれている竹簡へと注いでいる青年がいた。

最早、美女にしか見えない程の美しさである。そんな彼 夏侯霸と出会え、更には彼の副官に任命されたのだ。

これ程、光栄な事は無いだろう。様々な分野において尊敬出来る将であり、あの徐榮からも強敵と言われていたのだから。

君主である劉備 桃香は反董卓連合での功績により徐州の牧に任官された。自分達と戦った時の功績なので少し複雑な気分だが夏侯霸の下で働くなら問題無い。

しかし、夏侯霸は武官であるのに文官の仕事まで行う。その為に副官である樊稠も文官の仕事まで行わなければならなかつたりする。

しかも夏侯霸は武官の仕事も両立し、更に人の数倍は働く。なので物凄く忙しい。最近は慣れてきたが、最初の頃は悲惨だった。とにかく夏侯霸は物凄い将だという事である。

「樊稠、そろそろ休憩にしましょうか

「あ、はい。分かりました」

夏侯霸が穏やかに微笑みながら言つて來た。やはり綺麗だなあ、と思いつつ感じじる。

ちなみに最初の頃は名前の後に『殿』を付けられていた。立場上マズいので副官に『殿』付けは止めて欲しい、と言つて止めてもらった。

「それにしても樊稠がいてくれて本当に助かります」

「いえいえ、僕なんか全然ですよ」

尊敬する夏侯霸にそんな事を言われたら照れる。そして夏侯霸のよつな男前になりたいな、とも思つていていたりする。

「それにしても徐州ですか……」

溜め息を吐きながら言つ夏侯霸。彼らしくない事なのが最近、こんな事ばかり言つ。どうやら徐州はお気に召さなかつたようだ。

「夏侯霸殿はどうが宜しかつたんですか？」

「そうですね…… 荆州か益州ですね…… 徐州は守り難いですから

好奇心に負けて訊いてみたが結構深刻そうだ。しかし夏侯霸は『まあ、何とかしてみせますが』と付け加えた。

夏侯霸が何とかすると言つたら本当に何とかしてしまひそうだから凄い。

そのまま夏侯霸との会話は進んで行く。やはり彼との会話は有意義なものだった。夏侯霸の副官という事で長い時間、彼の傍にいる。毎日が勉強になる事ばかりだ。

「それにしても夏侯霸殿は凄いですね。黄巾党の残党や山賊にまで懐かれるなんて」

「いえ、そんな事ありませんよ。理を尽くして対話しただけですし

それが凄いと思ったが口に口に出さなかつた。夏侯霸は平原園にいた頃に黄巾党の残党や山賊達と、よく交流していたらしい。

詳しい事は知らないが、それに感激して虎牢関へ援軍として出陣したようだ。実際、樊稠が氣絶している間に張濟や胡軒と交戦していたようである。

胡軒曰く『國中の賊が、あんな奴らだつたら俺は一生、賊とは戦いたくねえ』らしい。張濟も同じような事を言つていた。

とにかくその後、劉備軍に参入したのだが元黃巾党や山賊の集まりという事で疎まれた。しかし夏侯霸は自分の部下にすると宣言し、本当に部下にしてしまつたのだ。

更に漢王朝直属の近衛軍が使用する筈だつた黃龍の軍旗を朝廷から貰い、それを元黃巾党や山賊の部隊の軍旗にしたのだ。

これに物凄く感激したらしく、その部隊全員が泣きながら夏侯霸に忠誠を誓つたという何やら物凄い感動秘話になつてゐる。

ちなみに夏侯霸の部隊は直属の騎馬隊以外は全て元黃巾党や山賊出身の者達である。

「あいつら全員、氣前の良い奴らですよね」

「やつですね。本当に良い人達ですね」

実は劉備軍で一番強い部隊は夏侯霸の部隊だつたりする。演習の時、関羽や張飛の部隊を散々に打ち破っていたのが印象的だ。

命言葉が『旦那の為なら火の中、水の中だぜ!』である。勿論、旦那とは夏侯霸の事だ。

そんな事を考えながら夏侯霸との会話を進めて行く。穏やかな微笑みを浮かべ涼やかな声を出す夏侯霸。全てを包み込んでくれるような温かさを感じる樊稠。

『こ』が徐榮とは違う所だ。確かに徐榮も尊敬出来る将だ。しかし叩き上げの軍人である為か、夏侯霸から感じる温かい優しさは無かつた。

だからと言つて徐榮が優しくないという訳では無い。ただ夏侯霸と一緒にいるだけで安心する。心地良いのである。

そんな夏侯霸と出会えて本当に良かつたと思う。『こ』で、ふと思いついた。

(徐將軍はどうなつたのだろうか……)

虎牢関の戦い後、董卓軍のほぼ全ての人員は劉備軍に組み込まれた。しかし、その中に徐榮の姿は無かつた。

もし、どこかの勢力に仕えていたら強敵になるのは間違いない。何たつて夏侯霸と同等の力を持つてているのだから。

「樊稠、どうかしましたか？」

「はい？……あ、いえ！　何でもありません！」

「そうですか？　ならば良いのですが」

涼やかな声を発し、安心したように微笑む夏侯霸。その微笑みを眺めながら自分も夏侯霸のような立派な将になりたい、と思ふ樊稠であった。

## 轟と綾那の闇（前書き）

まあが、こんなにも甘くなるなんて思いも……しました。

いや、正直甘く見ていただけですね……独り言です

陽光が輝きを放ち、風が火照る自分の身体を優しく撫でるのが心地良い。そう感じる靈。

光に反射し獰猛な煌めきを放つ偃月刀は空気を斬り裂く唸り声を発して回る。

右に左に自由自在に暴れる偃月刀を制御しながら目標に定めた空間を斬り裂く。

そして最後に偃月刀を大きく横に薙払い終了する。肺と脳が新鮮な酸素を求めて暴れる。それをなだめながら荒い息を吐く靈。

そして視線の先にいる夏侯霸へと向けた。艶やかな黒髪を陽光に煌めかせながら彼は物思いに耽るような感じで何か考えている。

その姿を絵にしたら結構な値段で売れるだろうと大変失礼な事を酸欠で少しモヤが掛かっている脳内で考えた。

「中々良くなつてますよ」

いつも通りの涼やかで心地良べなる声で言つてきた。しかし『ですが』と付け加える夏侯霸。

「一 点に焦点を合わせない方が良いですよ」

「……まあ？」

思わず疑問の声を上げてしまった。しかし何を言つてこるのか、さっぱり分からぬのだから仕方ない。

「せうですね……相手に焦点を合わせるので無く、へ無むせんでも焦点を合わせる感じで」

「……何を言つてるんか、さっぱり分からんのやけど……」

あいつと簡単そうに教える夏侯霸に張遼はさつ返した。すると夏侯霸は困ったように懸念して悩み始める。

「何と言つますか……その……ですね……ひむ」

腕を組みながら考える夏侯霸の姿は、どこか可憐へ見えてしまつ。更に『ひむ』と唸る声なんかは何も言えまつ。

そのまま夏侯霸は四苦八苦しながら説明して来た。しかしも理解するのに四苦八苦したが何とか理解出来た。

「あー……つまり、相手だけを見るんやなくて視界に入つとるもん全部を見るつて事かいな?」

「まあ、そんな所ですね」

微笑みながら答える夏侯霸。そんなにわざと言われても困る。理解するのと実際にやるのでは違う。

そして、それを行つて何の得があるのだろうか。そんな靈の心を読み取つたのだろうか夏侯霸は言葉を続ける。

「確かに、いきなり出来る物でもありません。十年、二十年と鍛練して身に付くかどうかですから」

夏侯霸は穏やかに言つ。その際、そよ風が彼の髪を弄りなびかせる。

「」の見方を習得すれば大抵の相手ならばどのような技を出すかが

予測する事が可能です。完全に自分の物にすれば、相手の僅かな視線の振れだけで動きを先読み出来ますよ」

「マジかいなー!？」

本当に凄い事だ。もし夏侯霸の言つている事が出来れば相手の力量が上でも十分に戦える。何たつて相手の動きを先読み出来るのだ。通る。

「……もしかしてウチらと戦った時も使ってたんか?」

「はい。勿論」

「……までも軽く答える夏侯霸。しかし納得した。一度だけ三対一で夏侯霸と打ち合った事がある。」

勿論『一』の方は夏侯霸。『二』は靈、華雄、呂布という顔触れだったのだが一度たりとも、こちらの攻撃が当たらず逆に夏侯霸に反撃されるばかりだった。

改めて夏侯霸の凄さを実感する　そして疑問も。夏侯霸は『いつ』このような技能を身に付けたのだろうか。

どこからどう見ても自分と同じくらいの歳にしか見えない。そう、彼には不可解な点が多いのだ。

その事を夏侯霸に訊いてみたい気がする。しかし彼の事だ。絶対に話さないだろう。

「ちなみに、この見方は軍勢同士のぶつかり合いでも有効です」

「……はい？」

「張遼殿は戦の時、敵陣のどこかに突撃しますか？」

大気を伝わり夏侯霸の涼やかな声が霞の鼓膜を震わせる。霞は率直に応じた。

「……敵の強い所やな」

「それは駄目ですね」

「え！？ 何でや！？」

強い敵と戦う。それがいけない事なのだろうか。それに強敵を倒せば、その後の戦も楽になる筈だ。

「わざわざ強い部隊に向かわなくとも弱い部隊、つまり他の箇所より兵の練度が低そうな部隊から突撃した方が良いのです。何故だか分かりますか？」

「……分からへん」

「確かに戦闘単位での戦いでは強い部隊も叩かなければならぬ時があります。しかしながら戦術単位、戦略単位では違います」

まるで親が子供に難しい問題の答えを教えるかのように言つて来る夏侯霸。ちなみに夏侯霸の言つ戦闘単位とは数百から数千規模の兵力。

戦術単位は数万規模の兵力、戦略単位は国の生産力等も交えた上に数十万規模の兵力である。

「戦術単位、戦略単位では戦闘単位とは違い、規模が大きいので一部の強い部隊だけでは戦になりません」

「……む？」

「簡単に説明すれば、互いに『十』の部隊がいます。その内で『三つ』が強い部隊、残りは普通、もしくは弱い部隊です」

そこで夏侯霸は張遼の頭に染み込ませるのを待つかのように一息入れ、再び話し始める。

「戦が始まり強い部隊以外は全滅しました。相手の残りは八部隊です。張遼殿、勝てますか？ ちなみに敵にも強い部隊がいて、一部隊生存しています」

「……無理……かな？」

「ええ。余程、素晴らしい策がなければ勝てません。つまり強い部隊だけでは戦は出来ないという事です」

成る程、と霞は感嘆した。確かに兵力に差があり過ぎれば、まともな戦にならない。敵の弱い箇所を削るのだから強い部隊と戦うよりも、損害は少なくなるだろう。

しかし、それと先程の見方がどう繋がるのだろうか。内心、首を傾げる。

「練度が低い部隊は進軍や陣形を整える時に、どうしても遅くなるのです」

「あ、つまり他の所よりも動きが遅い所に突っ込めば……」

「はい、そうです」

良く出来ました、と言わんばかりに優しく言う夏侯霸。極めれば視線の振れだけで相手の動きが分かるのだから動きの早さの違いも見分ける事は可能だろ？

夏侯霸に誉められて嬉しくなる霞。しかし、そこで新たな疑問が湧き上がった。夏侯霸は、それをいつ判断しているのだ？

動きを見極めるくらいの距離。その距離を考えて絶句する。霞の予想が正しければ敵陣へと突撃する最中。

そんな時、冷静に練度の低い箇所を探せるのだろうか。敵陣から

の矢が降り注ぐ中で。無理だ。少なくとも自分には出来ない、そう霞は思った。

「……ウチ、まだまだやな」

「張遼殿の歳で、その事実に気が付けば十分ですよ」

俯いた霞の咳きに夏侯霸は、そう返した。彼の言葉が優しく心に染み込んで来る。そんな言葉に礼を言おうと霞は顔を上げて動けなくなつた。

正確に表現すると夏侯霸の眼から視線を外せなくなつた。彼の眼には。

「……そう、後悔する前に己の力を見極める事が大事だ……」

低く通る声。しかし、いつもの穏やかな声ではなく何か重々しく、辛そうな声。先程、彼の声に癒された心が冷えて行くのが分かつた。

そして彼の瞳に映る感情の色が霞の心を搔き乱す。どこまでも深い闇。落ちたら一度と戻れ無い、そんな気分にさせられる。

その闇には様々な感情が映し出されていた。後悔、怒り、哀しみ、見ているこちらが変になりそうな程の数。

自分と同い年程度の人間が出せるような代物では無い。駄目だ、見ていられない。そう思つても何故か視線を逸らす事が出来ない。

胸が締め付けられるように苦しい。そして悲しい。彼を見ているだけで、こちらも悲しくなる。何故だ。そう自分自身に問うても答えは出なかった。

「さて、そろそろ戻りますか」

夏侯霸がそう言つ。いつも通りの声だ。先程の永遠に続くかのような苦しい時間が嘘のようだ。いや、一瞬だったのかも知れない。

「申し訳ありませんが張遼殿。私はこれから用事がありますので失礼しますね」

穏やかに微笑みながら礼儀正しく一礼し、霞に背中を向ける夏侯霸。いつもの微笑みだった筈だ。

しかし、どこか哀愁漂つ微笑みに見えてしまった。彼の背中も寂しく見えてしまう。

彼の過去に何があつたのだろうか。何が彼にあのような眼をさせてしまったのだろうか。よく考えたら彼の事は一つも知らない。知っているのは名前と出身地、強さだけだ。

知りたい。彼の事が、もつと知りたい。小さくなつて行く彼を見つめながら胸を押された。

苦しい。痛い。どんな傷の痛みでも堪えて来た。しかし、この胸の苦しさ、痛みは堪えられない。

「」の一つの感覚が何を意味するのか分からない。しかし彼の事をもつと知つたら、この苦しさや痛みは消えるかも知れない。

既に姿が見えない。しかし視線の先にいるであつて彼の事を思いながら胸を押さえ続ける霞 何故か自分の心音が高まつてている事に気が付きながら。

## 木漏れ日の川

張遼と別れた後、自室へと戻った夏侯惇はある物を用意する。布で巻かれた槍のように長細い物を持ち出掛けた。

政庁を抜け城外へと足を進める。城内の街は賑やかで活気に満ち溢れていた。

人々は笑顔で平和な日常を満喫している。店頭では店主が商品の説明をし、客はそれを頷きながら聞く。

道端では買い物中の女性同士が世間話に花を咲かせ子供達は元気良く駆け回る。

この光景を眺めているだけで嬉しくなる。どんな褒美よりも喜ばしく満足する事が出来る。

徐州に入つて大きな戦は起きていない。いや、起きないように努力した。

大きさを問わず大小様々な豪族と話して來た。

上から押さえ付けるのでは無く、対等な関係で話して來たつもりだ。それが功を奏し、豪族達も従つて來てくれる。

農地に置いても足を運び農民一人一人の意見を聞きそれを内政に反映出来るようにしてきた。

その結果が今、目の前に広がる光景だ。燐々と輝く太陽の下、人々は平和を享受する。

これが本来あるべき国の人姿。その為ならば、この命をも惜しまない。

商人や職人達から、よく挨拶をされたり話を求められたりした。城内の街では主に商人や職人と接して來たからだ。皆、好意的な態度で接して來る。

夏侯惇にとつてはそれも堪らなく嬉しい。努力した甲斐があつたと思える。

そんな際、会話をしていく中で気になる情報が幾つかあつた。

「曹操様の勢力範囲が急速に広がっております」

馴染みの行商人がそう話して來た。商人は情報に過敏だ。

あそこの地方で織物がよく売れる、こちらの地方では米がよく売れる等々そんな情報を把握しておかないと生きてはいけない職業だ。その為、正確な情報も多い。

「何でも凄い武将が仕官したらしいですよ夏侯霸様」

「その将の名は何と言つのですか?」

「確か……徐將軍という方らしいですよ」

恐らく徐榮の事だろ?。虎牢関の戦いの後、徐榮の消息が分からなかつたのだ。簡単に死ぬような将でも無い。

曹操軍の勢力圏の急激な拡大はこの為だろ?。気を引き締めなければならない。

「ああ、後ですね……袁紹様の勢力圏も広がっていますね。この前なんて公孫賛様と争つておられるのに青州をお取りになられましたから」

そう、これは夏侯惇も気になつっていた情報だ。袁紹の勢力圏の拡大が異常である。

公孫賛と争いながら青州を征服し、更に領内に点在する黒山賊の討伐も同時進行で進めている。

失礼だが以前に反董卓連合で会った袁紹からはそんな能力があるとは思えなかつた。誰か有能な者がいるに違ひない。

もしかしたら自分達と同じ国から来た者かも知れない。これも注意せねばならない事だ。

徐州は守り難い土地だ。東は海、西に曹操、北に袁紹、南に袁術と囲まれている。最悪の場合、逃げ場が無くなる。ちなみに孫策が袁術から兵を借りて揚州に入ったようだ。

「貴重な情報をありがとうございます」

「いえいえ、いつも御世話になつてている夏侯霸様に私らはこんな事でしか恩返し出来ません故に」

「いえ、物凄く有難いですよ。それでは御仕事を頑張つて下さい」

夏侯惇は一礼し、その場を後にした。これからどうするかだ。人材不足は将校階級の者を育て上げ補う事にした。

他にも色々と手は打つてある。しかし、それでも足りないだろう。

夏侯惇は懶みながり歩く。そして、いつの間にか風が変わった事に気が付いた。

先程までのよつな人々の熱氣が混じった風では無く静かな優しい風だ。

夏侯惇は辺りを確認する。

じつやう無意識の中に田的でと向かっていたようである。田の前には馴染みの森がそびえている。

夏侯惇は迷わず森の中に入つて行く。風が土と緑の香りを肺の中にまで運んで来る。

落ち着く香りだ。そして気持ちも、より穏やかになる。夏侯惇は目的地へと足を進める。

木の葉が騒めき鳥達がさえずり、淡い大地の香りが夏侯惇を優しく迎え入れる。

そして入り組んだ木々を抜けると田の前には清らかに流れる川が視界に飛び込んで来る。ここが田的池だ。

夏侯惇は川の傍に腰を下ろして布に巻かれた物を取り出す。一本の釣竿である。一本は自分の右隣に置いておく。

腰にぶら下げる袋から餌を取り出し、仕掛けに付ける。そして陽光の輝きを浴びて煌めき流れる川へと投げ入れる。

そう夏侯惇は釣りをしに来たのだ。ただし、夕飯の食材確保と気分転換の為にである。

夏侯惇の日々の食事は自分自身で採つて来た物を使用していた。ただし、野菜等は農家や市場から調達している。

正直、夏侯惇は食に対する興味が薄い。栄養が均等に摂れれば、それで良い。食事に金を掛けるくらいなら軍備や内政の費用に充てる割合は生活に最低限必要な費用である。

実際に夏侯惇の給料の九割は自分の部下の為に使っている。残りの一割は生活に最低限必要な費用である。

釣糸が引かれている。釣竿を引く。当たりだ。今日は、よく釣れる日かも知れない。

しばらく心地良い風に包まれながら釣りを続ける。一匹、一匹、  
二匹と釣れていく。光に反射し宝石よりも美しい輝きを放つ水面を  
眺めながら背後に向けて声を発した。

「何故、ここにいるのか訊きたいのですが宜しいでしょうか呂布殿  
？」

背後から身動きする気配がする。初めは獣だと思つてしまつた。  
こちらに近付いて来る気配がする。

「……ん？」

呂布は夏侯惇の左隣に座り込みながら首を傾げ、こちらを純粹無  
垢な目で眺めて来た。

「……何故、ここにいるのですか呂布殿？」

「……お散歩してたら夏侯霸、見付けた」

「……それで暇だったので付いて来たといつ哉ですか？」

「…………」

夏侯惇の問いに素直に頷く呂布。まるで、その姿は小動物だが。

「…………確かに貴方は街の巡回中ではなかつたですか？」

「…………ん？」

「…………その間と疑問符は何ですか？」

「…………ん？」

「『…………』では、ありませんよ呂布殿」

何度も、訊いても何も言わない呂布は何故か夏侯惇の方へと身を乗り出して来た。何をするのかと見ていたのだが。

「…………ん」

「……呂布殿」

「……ん？」

「何故、私の前に座つて来るのですか？」

何故か呂布は夏侯惇の目の前、正確に言つと夏侯惇の股の間に座り込んでくる。まるで夏侯惇が呂布を後ろから抱き締めるよつた形だ。

「…………」、落ち着く

「…………はあ。何を言つても退かないつもり…………ですよね」

「うん」

何故、そこだけ即答するのだろうか。少し咳き込みながら考える夏侯惇。

数日前から喉に違和感を覚えていたのだ。恐らく焼き魚の小骨でも引っ掛けているのだろう。

燃え盛るよつに紅い髪が先程から夏侯惇の鼻先をくすぐる。それ

に彼女の頭の所為で水面が見えない。しかし、よく釣れる。  
そこで、ふと気が付いた。

（まさか……呂布殿は私が釣りに行く事を知り、釣り上げた魚を分けて貰う為に付いて来たのでは……）

呂布が大食いなのは周知の事実だ。しかし呂布を眺めながら、そんな事は無いだろうと思い直した。  
そんな時だった。呂布が唐突に咳いて来た。

「……夏侯霸」

「はい、何でじょつか呂布殿？」

「……お母さんみたい」

矢が突き刺さった。深く深くえぐるように心へと。『お姉さん』と言われた事はあるが『お母さん』は流石に無かつた。

（私はいつの間に性転換をして子供持ちの親になつたのでしょうか……）

何と表現するれば良いのだろうか。そり、これは『諦め』だ。もしくは『絶望』。

「……夏侯霸の腕の中、落ち着く。恋にはお母さんいない。ずっと一人ぼっちだつたけど……多分、お母さんはこんな感じだと思つ」

「……今は一人ではありませんよ呂布殿。一応、私はお母さんみたいなのでしょう?」

呂布の頭を撫でながら言つ夏侯惇。呂布はまるで子犬のよひ受け入れ、頭をすり寄せて来る。

「……うん

そのまま呂布の頭を撫でながら釣りを続ける夏侯惇。呂布が腕の中で小さくななりながら『お母さん』と呟く。田から溢れてしまいそうな液体を今回だけ、本当に今回だけは頑張つて我慢しておこうと心に誓つた。

## 河北の勇将（苦勞人）

大地を搖るがす如く駆ける騎馬隊。触れる者全て喰い干切るような獰猛さを醸し出している。

旗印は『王』。公孫贊軍の將の旗印だ。土煙を上げ迫り来る騎馬隊の後方には歩兵もいるようだ。全軍で一万五千程。

対するこちらの兵力は八千。騎馬が三千、歩兵が五千なのだが彼の周りにいるのは騎馬が五百と歩兵一千だ。

装備が華美な事で有名な袁紹軍にしては珍しい地味でくたびれた装備の兵士達。

彼の隣に立つて『高』の旗も若干萎れて『見えて』いる。彼は溜め息を吐きながら兵士達に指示を下していく。

迫り来る馬蹄の轟き。

騎馬が先行し過ぎており、歩兵と間が広がっている。そんな光景を冷めた視線で眺める。

こちらの弩兵や弓兵が矢を放ち始めた。風を貫き轟音を響かせ迫り来る騎馬隊へと降り注ぐ。

何十人の騎兵が地に落ちるが、それでも騎馬隊の勢いが止まらない。自分達の命を喰らう為の刃が不気味な輝きを放つ。

しかし、それでも冷めた視線で眺め続けた。敵騎馬隊は道の両側に雑木林が生い茂っている場所に差し掛かつた。

そこを通り過ぎれば彼の目と鼻の先に敵の騎馬隊が来る。それでも彼は焦らなかつた。

雑木林から何かが飛び、敵の騎馬隊へと吸い込まれる。矢だ。それも一本や一本では無い。

敵は突然の事で混乱しているようだ。陣形に隙が出来る。彼がそれを逃す筈も無かつた。単純な命令を下した。

「全軍突撃！」

槍を脇に抱えて突つ込む。彼の後に五百騎が続く。その後ろからは歩兵一千。風が耳元で唸りを上げる。

矢の雨が止み、両側の雑木林から騎馬隊が出て来た。彼の部隊の

騎馬隊である。あらかじめ伏兵を仕掛けて置いたのだ。

挾撃を喰らい乱れる『王』の旗印。そこへ彼はそのまま突っ込んだ。一人目を槍で叩き落とし、二人目の体を貫く。

三人目は蹴り落とした。敵の騎馬隊、数は四千といった所だろう。その中央で乱れるながらも一塊になつてている奴らがいた。数は約百騎。

恐らく旗本だ。そこに敵将がいる。迷わず突っ込む。道を塞ぐ敵は倒す。鮮血で槍や身体を染め上げるが心は冷めたままだ。

昔のように熱くならない。それはそれで良いのかも知れない。まあ、今はどちらでも良い事なのだが。

彼はそう場違いな事を考えながら槍を振るう。

敵の旗本にぶつかつた。呆気なく旗本の塊を斬り裂いて行く。斬り裂き駆けた先に敵将らしき男がいた。

恐怖の為か何か分からぬが顔を歪ませていた。槍を構える。敵将が何か叫びながら剣を抜く。何と叫んだのか分からなかつた。

距離が縮まる。完全に彼の間合いに入った。しかし何もしない。

更に距離が近付き敵将が剣を振り落としてきた。

それに対しても彼は避けて敵将の顔面に右拳を叩き込んだ。馬から吹き飛び不様に地を転がつて行った。

止まつたものの動かない所を見ると氣絶したようだ。敵の騎馬隊は既に散り散りに逃げて行つた。

部下に氣絶した敵将を捕らえさせた後、伏兵部隊と合流し敵の歩兵部隊と一戦交えようと駆けた。

見付けた。しかし何か変だ。やる気が無いというか士気が極端に低い事が見て取れる。

何故だらうか。彼は疑問に思いながらも騎馬隊を二つに分けて攻め掛けた。

兵力差は侮れないのでじわじわ削る予定だった。

しかし三回程、繰り返し攻撃しただけで後退し始めた。罷かと疑つたが逃げ方に余裕が無い所を見ると伏兵はなさそうだ。

とにかく全軍で追撃する。騎馬隊で敵陣へ斬り込み緩んだ所に歩兵がぶつかる。そこかしこで絶叫が響き渡り、鮮血が大地を染める。

深追いは禁物なので適当な所で追撃を止めた。三千は討つただろ  
うか。騎馬と合わせると四千を越えるかも知れない。それに比べて  
こちらの被害は千にも満たない。

「……呆氣な過ぎだろ」

呟いた声は風に飲み込まれた。よくよく考えれば捕らえた敵将が、  
あの軍勢総大将だったのかも知れない。

（総大将の名前は王門。敵騎馬隊の旗印は『王』だった……って事  
は、あいつが王門だったのか？）

だとしても大将がやられたからといって、あんな簡単に撤退す  
るとは一体どんな指揮系統をしているのだろうか。これでは、まる  
で賊だ。

「……人選を間違えたって事かな……」

「はい？」

「いや、何でも無い」

独り言に反応した旗本の一人にそう答えた後、返り血を拭きながら溜め息を吐く。

「報告します。軍馬一百頭武具約三千、兵糧多数を獲得しました」

「ああ、分かった。御苦労さん」

報告に来た兵士に労いの言葉を掛け、全軍に本陣への帰還を通達した。

荷車に戦利品と負傷兵を詰め込み本陣へと進む。よつやく休める。正直、一ヶ月間は休暇が欲しい。

黄巾党との戦いからずつと戦い続けて来た。黄巾党の次は黒山賊。そして河北の各州攻め。また黒山賊。黄巾党の残党、青州攻め、またまた黒山賊に黄巾党の残党。

そして今回、対公孫賊戦。連戦に次ぐ連戦。本当に一ヶ月は休暇は欲しい。特に兵士達には「えてやりたい」。

そんな事をあの人人が許す筈があるのでどうか。普通だったら許さ

無いだれつ 普通だつたらだが。

色々と考えて いる内に本陣に到着。煌びやかな旗やら何やらかんやら。兵士達の鎧も見た目重視。

こんな所に金を掛けるなど言いたい といつが実際に言つたが聞く耳を持たない。

自分の軍勢を副官に任せて本陣の中央にある一際華美な天幕へと仕方なく向かう 本当は行きたく無かつたが。入る前に溜め息を先に吐いておく。

中がどんな惨状か想像もしたくない。だが行かなければならぬ。もう一度、大きく溜め息を吐いておいた。

「高幹ただ今、帰還しました」

そう言つて中に入つた瞬間、頭を抱えたくなつた。まさか、あいつらもいるとは思わなかつた。今日は厄日だ。そう思わずにはいられない。

「おーほっほっほっほー！」

「おーほっほっほっほー！」

「おーほっほっほっほー！」

「おーほつほつほつほー！」  
「おーほつほつほつほー！」

天幕に響き渡る高い声。最近では『つーほつほつほつほー』に聞こえてしまつ。

「元才さん」

「よくやつましたわ」

「やはり私達の指揮の」

「おかげですわ」

言葉を切り切りにしながら一人一人が繋げて言つて来る。よく似た声だ。

天幕の中には他の将や文官、軍師もいたが全員、無視している。ある者は目を閉じ、ある者は隣と話、ある者は地面に穴が開く程に見つめている。つまり全員下手に閑わりたく無いという事だ。

彼 高幹（字は元才）は溜め息を吐き、頭を抱えたいのを我慢して目の前の光景を直視する。

視線の先には元々、彼がいた国では伯父であつた筈の女性 袁紹が高笑いしながら立つてゐる。

その両隣には、これまで従兄弟であつた筈の女性達 袁譚、袁熙、袁尚がいた。

元々いた国では伯父の息子であつた筈の三人が伯父の妹になつてゐたり。そもそも伯父自身が女性になつてゐたり。

そんな彼女達は高幹の従姉妹だつたり。もつ何が何やら。だが既にこの国で十数年過ごした時間は伊達では無く慣れてしまつた。

再びこの国で『高幹』として生まれ変わつた時は、もう一度天下に霸を唱える機会が来た、と喜んだものだ。

だが、そんな喜びは一瞬にして潰えた。正直、発狂してしまいうだつた いや、発狂した方がマシだつたかも知れない。

生まれ変わつた、つまり赤子として生まれた訳であつて様々な事に制約を受けた。話す事も出来ないので自分の意志を他人に伝えられず。

動く事も出来ず一日中じつとしているだけの毎日。腹が減つても

泣き叫ばなければ飯を貰えず。更にその飯も味氣の無い母乳でしか無く、屈辱だった。

そして赤子なので動けず話せないので便所に行く事さえ出来なく死にたくなった。歯が無く噛む力も弱いので、舌を噛み切つて自害する事も出来ず。もう誰か殺してくれと心底願つたものだ。

何故、赤子に自我が無いのか心底分かつた気がする。こんな死にたくなる程の拷問生活を体験した所為で野望や野心やら、そんな物が全て消え去つた。

願うは、ただ一つ。ゆつくりひつそり穂やかに過ごしたい。だが、この国の袁紹の血縁として生まれたからにはそんな事が出来る筈も無かった。

しかも、袁紹ただ一人でも無茶苦茶なのに他に三人も袁紹モドキがいるのだ。この国での幼い頃から地獄だった。

「元才さん！」

「聞いて！」

「こりのー！」

「ですか！」

「聞いていますよ」

四人揃つと、いつもこつだ。一人一人会話を区切つて話して来る。本当に目障りだ。そして、これに慣れてしまった自分が悲しい。

この四人は昔から自分に全て押し付けて来た。その為、無駄に色々と出来るようになつていまつた。内政関係に始まり軍事、料理、はたまた裁縫まで。

どれだけ苦労すれば良いのだろうか。神は意地悪だ まあ、とつぐの昔に神など信じなくなつたが。

その後も適当に話を流しながらも休暇だけは貰えるように巧みに誘導した。この四馬鹿を誘導する技術は血縁者にとつて必須科目だ。しかしながら貰えた休暇は一週間だった。

再び高笑いを上げている四人を見る。全員、凄まじい螺旋髪だ。

次女、袁譚は腰に達するまで長い金髪を後頭部辺りに結んでいる。無論、螺旋髪。

三女、袁尚は背中辺りまで伸びてこむ金髪を後ろ首辺りで一つにまとめている。勿論、螺旋髪。

四女、袁尚の金髪は顎ぐら一の髪を二切り揃えている。一ぱりぱり先端辺りが螺旋。

ちなみに高幹の髪は黒で耳が隠れるぐら一の髪。螺旋は全く無い。もし、あつたら皿書している。

「それでは」

「軍議を」

「終わつ」

「ましょつ」

その言葉と共に一斉に皆天幕から出て行く。勿論、高幹も四馬鹿に捕まらなければ逃げた。

空は青々しく、ビルまでも広がる。その空を雲が悠々と泳ぐ。雲になりたいと思つた。

その時だつた。背中から衝撃を感じた。誰か背中に抱き付いて来

たのだ。ここでも溜め息を吐く高幹。

「おい文醜。何でお前は毎回毎回、俺に会つ度に抱き付いて来るんだ

「久々の高の匂いだぜ。えへへへ

抱き付いて来た張本人 文醜は、どうやら全く聞いていないらしい。ちなみに彼女から『高』<sup>ウエイ</sup>と呼ばれている。

「うへへへへ。あたいの高。うへへへへ

「おい。現世に戻つて来い

「うーん。うへへへへ

いつも抱き付いて来るが今回はかなり酷い。それよりも水浴びは毎日欠かさずやつていたが、本格的には体を洗つていな。

もしかしたら、その臭さで頭が逝かれたのかも知れない。まあ、ほつといたら治るだろ?と考えた。

「うーん。やっぱ触り心地も良いし、良い匂いだし。うーん、あた  
いの高うう。うへへへへ」

止めた方が良いのだろうか。何故か鎧の隙間から手を突っ込み身体を撫で回して来る。こいつは本当に何がしたいのだろうか。高幹には理解出来なかつた。

周りの者は『またか』という顔をしていたり、ニヤニヤ笑つたりしている 誰か一人でも良いから助けて欲しいのだが。

「うーん…………うにゅ」

そろそろ本格的に危ないかも知れない。医者を呼んだ方が良いだろ？と思いつつ雲を数え始める高幹。

文醜は何気に馬鹿力であるし高幹に抱き付いた時は更に強くなる。そんな文醜を離す事が出来るのは顔良しかいないのが現状。

どうせ顔良しかいないのだから彼女がここに来るまで暇だから雲の数を数える事にしたのだ。

今までの経験上、顔良以外の奴は手伝ってくれない。顔良を呼ぼ

うにも動けない。という訳で待ち続けた。

結局、顔良が来たのは大分時が経つた頃であったのだが顔良でさえ文醜を離すのが困難であつた為、更に時間が掛かってしまった。

闇夜の帝王、降臨（前書き）

……今回やつ過ぎましたね。本気で疲れて眠いのでレッジゾーンとの境界線を見誤っていると思います。

後悔も反省もしています。

もしかしたら編集し直す事になるかも知れませんので御了承下さい。  
誠に申し訳ありません。

闇夜の帝王、降臨

「ひー… 星ー」

「はつはつはつはあ！ まだまだですな、北郷殿」

中庭に轟く一刀の怒鳴り声。顔を真つ赤にする一刀を見ながら星は笑い声を上げた。

「星！ よくも、そんな羨まし……ではなく、破廉恥な事を御主人様に！…」

陽光が降り注ぐ中、愛紗の怒鳴り声も響き渡った。傍らにいる桃香も羨ましそうな顔をしていたりする。

「おや？ ただ単に首筋へと息を吹き掛けただけですぞ？ そんな事で、あの様に変な喘ぎ声を上げる方がどうかしていると思いますが？」

「うぐうー…？」

星の返答に変な声を上げる一刀を見て益々、面白く感じる星。中庭で愛紗や桃香と仲良く会話している一刀の首筋に息を吹き掛けただけなのに、この反応。本当にからかい甲斐がある。

「ふう」

「ひやわー?」

いきなり首筋へと息を吹き掛けられた。思わず変な声を上げてしまつ。誰がしたのかを確かめる為に慌てて振り返る星。

「フフ、趙雲殿も人の事は言えませんね」

そこにはいつものように穏やかな微笑みを浮かべている夏侯霸がいた。星は文句を言おうとしたが、それよりも早く夏侯霸が星の頭を優しく撫でて来たので言えなくなってしまう。

「劉備様、内政に関する報告書を」

「あ、ありがとうございます夏侯霸さん」

笑顔のまま桃香へと渡す夏侯霸。しかし何故か、その笑顔に違和

感を覚えた。

「いえいえ。本当は昨日、日が暮れた時に渡そうと劉備様の部屋に行つたのですが侍女から北郷殿の執務室におられると聞きましたので」

「そこまで言つて言葉を止める夏侯霸。一刀や桃香、愛紗は何故か固まつてゐる。何やら不穏な空気が漂い始めている。

「日が暮れたばかりですしある政務をしておられる時間帯でしたので執務室に向かつたのですが……何やらお楽しみの最中だったようでしたので、しばらく待たせさせて頂きました」

「なー? 貴様! 盗み聞きとは」

「仕事で赴いたのに盗み聞き呼ばばわいつですか?」

「うべつ……なら、せめて一言」

「皆様でお楽しみの最中に私に入れと?」

「ぬぐつ……うう……」

愛紗の言葉を「ことじ」とく論破していく夏侯霸。誰が見ても機嫌が悪い事が分かる。星の隣で穏やかに微笑んでいるが目が笑つていな  
い。

「それにしても随分と長くお楽しみだったようだ。ようやく終わつ  
たかと思ったら、又もや騒ぎ声が聞こえる始末。そりですね……明  
け方近くまで聞こえていましたかね」

その言葉に顔を赤らめる一刀達。星としては顔を赤らめるより先  
に謝つておいた方が良いと思つ。とこうより早く謝つておいて欲し  
い。

先程から夏侯霸から何か圧力のような物が湧き上がつていいよう  
な気がする。

「しかも何やら幼気な少女の声も聞こえたよつた。まさかとは思  
いますが北郷殿犯罪を犯してはいませんよね。『天の御使い』である  
貴方が、そんな幼女のような方を……ねえ？」

「え、あ、いや、朱里達とは同意の上で

「北郷殿、別に他人の私生活をとやかく言つつもりはありません」

そこで言葉を止め、三人に顔を向ける夏侯霸。『ひつ！？』と桃香が声を上げる。三人共、顔色が青を通り越して紫になつた。

顔色を紫にする暇があるのなら早く謝つて欲しい。先程から地面が揺れているような気がする。

「ただ明け方近くまで延々と待たせられ、聞きたくもない喘ぎ声を聞かされ、挙げ句の果てには昨日、貴方達が終えている筈の政務を押し付けられる始末。何でしうね、これは？」

「ひ……あ……あの、『じ、じめんなさい』…」

「あ、あのだな……済まない！…」

「う……ああ……わ、悪かった！…」この通り許して…」

三人共、夏侯霸に跪いて許しを請う。謝るなら初めからやらなければ良いのにと心底思う星。

夏侯霸はどんな表情をしているのか知りたいと思ったが、あまりにも怖いので出来なかつた。

「……分かりました。今回だけは許しましょう。ただし、今度したら本氣で」

そこで言葉を切る夏侯霸。その瞬間、辺りが真冬並みに寒くなつた。吐いた息が白くなつているようにも見える。跪いた三人はひたすら謝りながら逃げ去つて行つた。

「……夏侯霸……殿？」

「はい。何でしょうか？」

夏侯霸の顔を恐る恐る確認しながら名前を呼ぶ星。答える夏侯霸はいつも夏侯霸であつたので安心した。

「その……御苦労様です」

「いえいえ」

「夏侯霸殿、朝方まで……その、北郷殿達は……男女の喰みをしていましたのですか？」

「貴方には、まだ早い事なので知らなくて良いですよ」

星の興味本位の問いに夏侯霸は穏やかに答えた。しかし、星はこの答えに不服だった。

（何故、私を子供扱いするのだ！）

そう夏侯霸はよく星達を子供扱いする。誰に対しても紳士的に接する夏侯霸。特に女性に関してはとても丁重に接する。

しかし、よくよく考えれば子供扱いしているような気がする。先程、頭を撫でられた時でも妹を見ているような目付igidった。

それが堪らなく嫌だ。自分はしつかりとした大人の女性という事を分からせてやる、そう決心する星。

「夏侯霸殿、窓には注意して下さい」

「はい？」

「フフフ、何でもありませんぞ」

決行は今夜。最近、珍しく蒸し暑い夜が続いているので就寝前に窓を開ける筈だ。

夏侯霸が窓を開けた瞬間、そこから部屋に飛び込み夏侯霸に襲い掛かる。そして大人の女性である星の技量を見せ付けてやる。

夏侯威からの情報によれば夏侯霸の女性経験は、ほぼ皆無。初恋だけといつ純情振りだ。これならば勝算は十割の筈だ。

星は邪悪な笑い声を心の中で上げる。計画は完璧。もしかしたら初めての口付けを体験するかも知れないが夏侯霸を見返す為だから仕方ない。

そう何度も言い聞かせるように心の中で囁える星。夏侯霸が訝しげにこちらを見ていたが気にしない。

それよりも今夜が楽しみで仕方ない。夏侯霸と別れた後、自室に籠もり脳内で予行演習を何度も行う。

まず床に夏侯霸を押し倒し耳元で甘く囁く。そして首筋や耳に息を吹き掛け、体を優しく撫で回す。

抵抗すれば『私の事が嫌いなのですか』と涙ぐみながら囁けば優しい夏侯霸の事だ。下手に動けなくなる筈。後は煮るなり焼くなり好きに出来る。

そう考えながら、ふと鏡に映る自分の顔が見えた。物凄くにやけていた。

「いかんいかん。氣を引き締めなければ。相手は経験皆無の夏侯霸殿であつても油断は禁物だ」

自分に言い聞かせるように呟く。そつ備え有れば憂い無し。準備もしつかりしておいつゝ、やつ思に至る。

「まずは身体を洗わねばならんな」

思い至つたら即実行。湯の張つておぐよつ一度、部屋の前を通り掛かつた侍女に頼む。

しかしながら既に湯は張つていたらしく、すぐに入る事が出来た。どうやら愛紗が頼んでいたらしい。たまには気が利く、と失礼な事を思う星。

「丁寧に丁寧に、」これでもかといつ程に身体と髪を洗う。洗いながらも脳内演習は怠らない。

次は服だ。一応、予備の服に着替えておく。いつも着ている服と同じだが気持ちの問題だ。

後は夜になるのを待つだけだ。仕事は今日は無い。ちなみに下見は数日前から行っていたので問題無い。脳が高鳴る。早く夜になれ。そう願い続ける星。

（……そうだ。少し寝ておこう。」）あらも眠くては意味が無い）

そう思い、寝台に伏すが、全く眠れない。仕方ないので、そのまま寝台の上で「ロロロロ」と転がつておく。

胸が張り裂けそうだ。喉が異常に渴く。何度も水を飲み、何度も脳内演習を行う。本当に楽しみで仕方ない。

よつやく日も暮れ、月が上り漆黒の闇を優しく照らす。時は來たり。

しばらく待つた後に行動を開始した。しかし、開始したといつても夏侯霸の部屋の窓付近に隠れて待つだけである。

月光が辺りを照らす。闇の空に浮かぶ月が自分を応援しているようだ。

少々蒸し暑いものの耐えられない事は無い。ひたすら待つた。心音がうるさい程、激しく脈動する。

夏侯霸の部屋の灯りが消えた。遂に来た。見つからないように襲撃し易い位置へと移動する。

少し間が空いた後に窓がゆっくりと開く。呼吸が荒くなる。心音がつるさい。胸が高鳴る。大きく静かに深呼吸した。

窓が完全に開いた。今しかない。星は窓へと飛び込んだ。目の前には夏侯霸がいる。灯りを消したばかりだから、まだ暗闇に目が慣れていない筈だ。

それに完全な奇襲。最早勝つたも同然。星は勝利を確信して夏侯霸に飛び付いた 筈だった。

身体がふわっと浮かぶ。視界が周つていく。あれ?と疑問に思つた時には既に仰向けて床に倒れていた。

田の前には夏侯霸がいる。丁度、組み伏せられた状態だ。何故だ。完全に奇襲だつた筈。混乱する星に夏侯霸が囁く。

「暗殺者かと思えば、可愛い子猫ちゃんだつたか」

夏侯霸の言葉に思わず呆然としてしまう。彼は何と言つた？ 夏侯霸の顔を改めて見つめた。

そこには星の知る夏侯霸はいなかつた。いや、田の前にいるのは夏侯霸であるのは間違いない。彼をずっと見て来たのだから間違える筈は無い。

しかし違う。眼が違う。いつもは穏やかな光を放つ瞳に対して、今の彼は妖艶な光を放ち見る者全てを虜にしてしまいそうな瞳だつた。

「で、私の部屋に向か御用かい、可愛い可愛い子猫ちゃん？」

「ひゃー？」

耳元で甘く囁かれて思わず声を上げてしまった。夏侯霸はこんな言葉を吐く人では無い。一体全体、何がどうしたんだ。

混乱する頭で必死に考えようとしたが無理だった。

「戸惑っている表情も可愛いね。食べちゃいたいくらいだよ」

「ひやわづー？」

甘く囁かれた後、耳たぶを甘噛みされた。身体中がゾクゾクする。身体に力が入らない。

夏侯霸は何度も耳たぶを甘噛みしていく。その度に甘い衝撃が身体中を走り回る。

耳元で囁かれる度に脳がとろけそうな感じになり、頭の中にモヤが掛かる。何も考えられない。

「ひやわー!? ゃー!? あんー!」

甘噛みに加え赤子のように耳たぶを舐め始める夏侯霸。その間に手は優しく触れるか触れないかの絶妙な力加減で身体中を触り始める。

腕から始まり脇や肩、腰、腹、首筋、頭、太股、ふくらはぎまで。

だが女性の証である場所 つまり胸等は触らなかつた。

しかし、それでも星の理性を破壊するには十分過ぎる程だつた。  
夏侯霸に触れられる場所全てから甘い衝撃が走る。

自分が何か叫んだ気がする。しかし何を叫んだのか分からぬ。  
星の心を支配するのは夏侯霸から『えられる甘い衝撃のみ。

首筋を舐められた時には身体の震えが止まらなくなつた。夏侯霸  
に何か囁かれ脳内がとろけられる。

いつの間にか夏侯霸を抱き締めていた。夏侯霸に首筋をも甘噛み  
される。自分で驚く程、甘い声を上げた気がする。

気が付けば寝台の上に寝かされていた。先程と同じく夏侯霸に組  
み伏せられた状態だ。

「あ……う……いや

「フフフ、嫌なら逃げれば良いじゃないか。別に私は君を押さえ付  
けている訳では無いんだよ、子猫ちゃん？」

確かにそうだ。逃げようと思えば逃げられる筈だ。頭の片隅で僅かに残つた理性が囁く。しかし無理だ。否、嫌だ。

彼と一緒にいたい。自分がその先に何を望んでいるのか分からないが、とにかく一緒にいたい。

彼の囁き、彼の手、彼の身体、彼から発する熱でさえ感じていた。そんな思いが星を支配していた。

「可愛……い……かわ、いい……私の……こね」「ちや……ん」

彼はそう囁いて星に体重を乗せ身体を合わせて来た。直に感じる彼の体温や重さも甘い衝撃となつて彼女を支配する。

星は眼を閉じ改めて夏侯霸を抱き締めながら彼が動くのを待つた。しかし、いつまで待つても動かない。

その代わりに彼の規則正しい呼吸音が聞こえて来る。星は我に返り慌てて確認する。

するとどうだろ？か。穏やかな表情を浮かべ眼を閉じている夏侯霸がいるではないか。

(……眠つて……いる?)

。 いまだに混乱し続ける頭で何とか状況を整理し、出した結論は

(寝保けていた……とこう事なんだろ?か……)

そうとしか考えられない。確かに夏侯霸は明け方近くまで起きてい  
たらしい。つまり寝不足気味だったという訳で……。

先程とは違う意味で身体中が熱くなる星。恥ずかしい。とにかく  
恥ずかしい。穴があつたら入つて埋まりたい程、恥ずかしい。

とにかく星は夏侯霸の部屋から脱出し自室へと風の如き速さで戻  
り、寝台へと飛び込んだ。

恥ずかしくて顔から火が出そうだ。先程の事を思い出し悶える星。

しかし、何故か恥ずかしさと共に喜んでいる自分や残念がつてい  
る自分がいる事に気が付いていた。

それが何なのか。恐らく自分が思つてゐる通りの事なのだろう。

「これがやつなのかと考へると妙にしおへつへる。

「……これが　」

口の中で言つ。胸が少し摘まれたよつた感じ。甘い感じ。それが心地良い。やうかこれが、と納得する。しかし

（翌日からひつひつして夏侯霸殿と顔を会わせぬ良いのだ……）

恐いく、いや絶対まともに顔を見れなくなるだらつ　主に恥ずかしくて。

自分もまだまだ子供だと嘆く星だつた。

翌朝、恥ずかしさを堪えて何とか夏侯霸に昨晚の事を覚えているか探つてみたが　。

「いや、あまりにも眠くて窓を開けようとした所で記憶が途切れています」

「ひやう本当に寝剥けていたらしき。恥ずかしいやうばしこやら残念やう。複雑な気持ちの星。

ただ一つ分かる事は  
あつた。

『寝ぼけている夏侯霸には近付くな』で

## ある日の徐榮

天下の情勢は激動している。北では幽州の公孫賛が袁紹に敗れた。西では朝廷がある長安にまで勢力を拡げていた馬騰が死んだ。

南では孫策軍が着々と勢力を広げている。徐榮が所属している曹操軍でも洛陽にまで勢力を拡げた。

公孫賛は今までの善戦が嘘のように呆気なく前線を突破され敗れた。

徐榮が独自に集めた情報によると袁紹の血縁である高幹が全軍の指揮を採つたらしい。詳細は分からぬ。何故か巧みに隠蔽してあつた。

公孫賛は何名かの部下と共に消息を断つていたが、どうやら徐州の劉備の下へ行つたらしい。

制圧された幽州は既に民政が機能し始めている。流石は名門。優れた部下が豊富だ。だが河北全域を支配したものの、しばらくは動かないだろう。

西の馬騰は盟友である韓遂と共に朝廷からの要請で長安にまで勢

力を伸ばした。どうやら朝廷は馬騰達に朝廷を守りせる魂胆じし。

既に朝廷の主だった將軍は職を取り上げられ下野したので好都合だつたのだろう。

しかし、この後が不可解だ。馬騰が罪を犯したという事で処刑されたのだ。

そして馬騰の一族全員も処断されたらしい。

ただし馬騰の娘である馬超や馬岱等の何名かが行方不明。馬騰が持つていた全軍は韓遂の指揮下に入った。

じつ見ると韓遂が馬騰の全兵力を手に入れる為に朝廷を使って謀殺したようと思える。

しかし実際には宦官が謀殺したのだろう。この国は徐榮が元々いた国とは違ひ宦官の大量虐殺を行っていない。

つまり欲深い宦官達は生き残っているのだ。正義感が強い馬騰の事だ。恐らく宦官と揉めたのだろう。

宦官は自障りになつた馬騰を殺した。逆に馬騰の盟友である韓遂が馬超達を逃がす手助けをしたに違ひない。それだと辻褄が合つ。

馬騰が殺されたのは徐榮にとつて想定外の事態だ。そして、これは劉備軍にいる夏侯惇にとつても想定外の事態だつた筈だ。夏侯惇としては詰めが甘い。

血室で兵法書を読んでいた徐榮は、そう思った。恐らく宦官の欲深さを読み間違えたのだろう。

(……まあ、仕方の無い事なのだがな)

何故か知らないが、この国の宦官はかなり欲深い連中が多い。夏侯惇はこの事実を知らない筈だ。

それに精神年齢も若返つてるので思考や思想も幼くなっている。だが元々の記憶や経験も存在しているので、かなりややこしい事態になつてゐる筈だ。

徐榮もこの国に来た当初は、その事に悩んだものだ。それにしても夏侯惇は以前、戦つた時よりも強くなつた。

徐榮が死んだ後も戦闘し続け、更に鍛練し続けたのだろう。以前より格段に強くなつっていた。

そんな事を延々と考えていた時だった。扉を叩く音が聞こえて来る。

「どういわ」

「済まんな徐栄」

部屋に入つて来たのは、この国の夏侯淵。秋蘭であった。彼女はそのまま徐栄に近付いて来て言葉を紡いだ。

「徐栄、あのだな」

「秋蘭よ。お前が言おうとしている事に対しても私は構わんと言つていいの」

秋蘭の言葉が終わらない内に言い始める徐栄。更に言葉を続ける。

「だがな、春蘭自身にやる気が無い。やる気の無い者に教えても意味が無いぞ。それにやる気が無い者に構つていられる程、私は暇では無い」

「そり……だな」

徐栄の言葉に溜め息を吐く秋蘭。最近、秋蘭は姉である春蘭に兵法を教えてやつて欲しいと頼みに来ている。

別にそれは構わない。しかし、春蘭にやる気が無いのだから仕方ない。

曹操軍に加入した当初、徐栄は春蘭等の一部の者に散々馬鹿にされていた。

大抵、馬鹿にしている方が馬鹿なので相手にしなかったのだが徐栄の部下まで馬鹿にし始めたので気が変わった。

そして都合良く大規模な軍事演習があつたので徹底的に打ち負かしてやつたのだ。

それ以来、何人かが徐栄を避けるようになってしまったのである。その筆頭が春蘭だった。

「そもそも私が話そうとしたら逃げる。どうやって教えると？」

「……済まない」

うなだれながら謝罪する秋蘭。確かに徐栄自身、演習の時は本気でやつ過ぎたと反省している。

特に春蘭は開始早々、阿呆みたいに突撃して来たので伏兵を用いて一瞬で撃破してしまった。

それが原因で春蘭に存在した誇りや色々と打ち砕いてしまったらしく、夜な夜なうなされているらしく。

君主である曹操 華琳曰く『徐栄恐怖症』だとか。正直、そこまで言わると流石に傷付く。

「いや、本当に済まない。姉者には私が言つておくれ

「気にするな

兵法書を片付けながら答える。次はどの兵法書を読もうかと考えていたのだが先程から秋蘭の様子が変なのが気になつた。

彼女らしくも無く、何か言いたそうな顔をしている。それでいて何か言おうとするのだが、すぐに口を閉じる。

「どうかしたのか秋蘭」

「え、いや、何でも無い」

「……嘘を吐くな。正直に言え。何かあるのだ」

そう言つてやると秋蘭は深刻そうな顔をして押し黙つてしまつ。普段、冷静な秋蘭がこのような顔をするのだ。何か大変な事態が起きたのかも知れない。

それに彼女の瞳には迷いの光が表れていた。

「嫌ならば無理にとは言わん。だが、一人で抱えても辛いだけだ。私で良ければ話してくれないか」

少し語調を優しくして訊いてみた。すると何故か秋蘭の視線が忙しく動き始める。そして落ち着きも無くなつて來た。

（……私では駄目か。やはり女性の扱いは苦手だ……）

女性に対して、どう接すれば良いのか全く分からぬ。この女性ばかりの国では致命的な欠点だ。

冷静沈着な秋蘭が「」のような態度をするのだ。余程の事に違いない。心配する徐栄だが、どう対応すれば話してくれるのか分からない。

同僚が困つて「」のに向もしてやれない自分を歯痒く感じる。

「……済まん。私「」ときが口出ししてはいけない問題なのだな。迷惑を掛けて本当に済まん」

「え？ あ、いや、違」

「無理言つて悪かった」

何か言おつとした秋蘭に謝る徐栄。そして彼女の邪魔をしてはいけないと想い立ち上がつて皿室から出て行こうとした。

「あ、ちょっと待つてくれ……！」

「……どうしたのか？」

腕を掴まれて呼び止められた。理解出来ず秋蘭の顔を見つめる。

何故か秋蘭は頬を真っ赤に染めていた。

「いや……あのだな……私も兵法を学びたいと思つてな」

「何だ、それなら早く言え。いつでも貸すぞ」

「え、あ、いや、違」

秋蘭が何か言おうとしていた気がするが、それよりも兵法書だ。  
どうやら秋蘭は兵法書を貸して欲しかつたらしい。

ならば何故、頬を赤らめる必要があるのだろうか。とにかく机の  
片隅に置いていた数冊の兵法書を秋蘭に渡す。

「私は全部読み終えたから返すのが多少遅れても構わんぞ」

「いや……徐榮。その……だな」

「……どうした?」

何故か申し訳なさそうな顔をする秋蘭。心なしか先程より頬が赤

くなつてこるよつな氣がする。

「……ああ、そつか。済まなかつた。私が読んでいた兵法書か」

まだ途中までしか読んでいないが仕方ない。片付けた兵法書を取り出し秋蘭に渡す。

「いや、あのだな徐栄」

「……何だ？ まだ何か欲しいのか？」

何故か渡した兵法書を抱き締めるよつにじて「ひらを見つめる秋蘭。頬というより顔全体が真つ赤になつてゐる。

まだ何があるのだつうか。全く分からない。困惑するばかりだ。

「徐栄……あのだな……

「だから何だ？」

「わ、私にも……兵法を教えて欲しいのだが……」

「……なりば、やつだと呑く言へ」

どうやら自分の勘違いだつたようだ。しかし、それでも何故、顔を赤らめる必要があるのだろうか。やはり女性は分からぬ。

「私は別に構わんが、お前に教えるよつた事は無いと思つたのだが」

正直、徐栄は他人に教えるのは上手く無いと思つてゐる。それに徐栄が教えられるのは基礎基本とつけといた応用くらいだ。春蘭と違い、秋蘭には教える事は無いと思つ。

「いや……徐栄に教えてもらいたい」

「お前がそつとんであれば良いのだが……」

「済まない。感謝する」

秋蘭は安心したように息を吐きながら呑つてゐた。その表情には喜色が浮かんでゐる。

もしかしたら秋蘭は『自分も兵法を習っているのだから一緒に習  
おひ』と春蘭を説得するつもりなのだろうか。

しかし何故これ程にも喜ぶのだろうか。まるで徐栄に教えてもら  
うのが嬉しいような感じだ。

(……やはり女性は、よく分からん)

（……やはり教えよつか頭を悩ませながら、やがて徐栄であった。

## 前線部隊の亀裂

空一面に敷き詰められた灰色の雲。風は湿り氣を帯び身体にまとわり付く。

馬上で不快に思つ李通。彼の周りでは大地を踏み締め行軍する兵士達の足音が辺りを支配していた。

「はあ。よべやるねえ、敵さんも」

「……無駄口を吐くな」

独り言の呴いたつもりだったが、どうやら聞かれていたらしい。

声の主 高順が馬を寄せて來た。

「だけども、先月と今月で八回目だぞ。流石に嫌氣も差してくるぜ。高順もそうだろ?」

「……否定はせん」

李通の言葉に高順は静かに肯定する。先月から袁術軍が度々、徐州に侵入するようになつたのだ。

初めは数百規模だったが最近では数千規模にまで増加していた。  
間違いなく徐州を狙っているとしか思えない。

この侵入に対し君主である劉備 桃香は州境で迎撃する事に  
したのだつた。李通からしても妥当な作戦だと思つ。

袁術軍と劉備軍の兵力差は歴然としている。下手に攻めるよりも  
守りを固めた方が良い。

今回は前線基地でも作ろうと思つてはいるのか五千の兵力を動員し  
て来ている。それに対して、こちらは六千。兵力では勝っているの  
だが編成に不安が残る。

「高順様、李通様」

そんな言葉と共に一人の青年が馬を寄せて來た。

「……曹豹か」

「よつ、曹豹。というかいい加減に『様』を付けるのを止めてくれ

青年　　曹豹にそれぞれ言葉を投げ掛ける。曹豹は夏侯霸が鍛えた将校の一人である。流石に夏侯霸が鍛え上げたので中々良い戦をする。しかしながら欠点もある。

「いえ、自分のような者がそんなおじがましい事を」

「……あのなあ、曹豹。お前も一軍の将だろ？　別に構わないだろ」

「そ、そのような事は」

その言葉に溜め息を吐く李通。曹豹の欠点。それは徹底的に自分を卑下する所だ。これが無ければ良いのだが。

「無理ですぜ。曹豹はこんな奴ですから」

「今度は何儀か」

黄色い布を頭に巻いている男　　何儀が笑いながら近付いて来た。何儀は元黄巾党で最近、劉備軍に加わった男である。

しかし、本人は桃香ではなく夏侯霸の部下になつたと頑なに主張

している。

夏侯霸は元黄巾党勢力や異民族や山賊等に大人気である。劉備軍の軍馬も八割方が夏侯霸を慕う異民族から調達していると言つても過言では無い。

夏侯霸の配下の元黄巾党勢力も日に日に増えている。更に夏侯霸に対して絶対的な忠誠心も抱いていた。

そんな彼らの合言葉が『旦那の為なら火の中、水の中、空も飛んで、山だつて動かしてやるぜ！』である。気が付いたら以前よりも増えていた。

このままだと新しい宗教が出来そうな勢いである。無論、何儀も夏侯霸に対して絶対的な忠誠心を抱いていた。李通も彼らに負けない程、抱いているが。

「おい！ 貴様ら無駄口を叩くなー！」

そんな怒鳴り声が辺りに響き渡る。その声に全員がつんざりしている。

恐らく李通自身も顔をしかめているだろ。先程の高順の言葉と大差無いが籠もっている感情は全く異なっていた。

高順は弟とふざけて言い合ひのような温かみのある感じであったのに対し、こちらは人を見下したかのような感じだ。いや、実際見下してこるのである。

「おー、聞こえていいのか貴様らーー。」

「……どうかしましたか、陳登殿？」

誰も答えずにいたので、仕方なく李通が応じた。あの真面目な高順でさえ答えないのだ。余程、話すのが嫌なのだろう。

「話してこる暇があるのならば早く袁術軍を叩くぞーーそれが桃香様の御意志だーー。」

そう声高に宣言する女性 陳登。それに対し、全員何も答えない。恐らく冷たい目で見ているのだろう。いや、見ているだけでも奇跡かも知れない。

「あー、あのですね陳登殿。まだ敵の位置も判明していなー」

「それがどうした！」

「……何でもないですか」

「フン！ ならば話し掛けんな！――！」

その言葉に溜め息を吐く季通。陳登は優秀なのだが傲慢で他人を常に見下していた。そのくせ桃香を崇拜していたりする。

これが季通　いや、この場にいる全員が不安に思つ要素だ。

優秀な陳登だが桃香の事になると周りが見えなくなる。しかも桃香が直々に陳登に言葉を掛けたというのだから余計に不安だ。

うなじあたりまで伸ばした陳登の茶髪がなびく。誰もが無言の中、何儀が大きく溜め息を吐いた。

「おい！ 貴様、何か不満もあるのか！――！」

何故か噛み付いて来る陳登。いきなり怒鳴られた何儀は困惑している。

恐らく桃香から直々に言葉を掛けられたので、いつも以上に暴走しているのだろう。流石に呆れてしまった。

「あー、不満なんて無いですか」

「嘘を吐け！ どうせ金や身の安全の事を考えていたのだろう。これだから黄巾賊は信じられんのだ」

陳登の言葉に怒りを感じる李通。しかし、それよりも優先すべき事があった。李通は曹豹の方へ視線を向ける。

曹豹は顔を紅蓮に染め、陳登を睨み付けていた。曹豹は仲間を侮辱されるのが大嫌いなのだ。

それで豪族一人を斬り殺しそうになつた事がある。李通は高順に目配せする。高順はその意味を理解したのだろう。

頷きながら曹豹の前へと出る。曹豹も相手が仲間なので必死に怒りを抑えている筈だ。

侮辱された何儀はいつも通りな所を見ると氣にしていないようだ。

陳登は鼻を鳴らし、何儀に軽蔑の視線を送りながら去つて行つた。

「今日はヤバい……よな。」

「……ああ」

李通の言葉に高順が答える。その声には怒りの感情が見え隠れしていた。勿論李通も陳登の顔に拳を叩き込むのを我慢していた。

「どうやるよ。六十つて言つても、その内の四十は陳登の指揮下だ

「……上手くやるしかない」

もう全軍六千の内、四十は陳登が指揮する。李通達が指揮出来るのは一千のみ。これでまとめて戦えるのだろうか。

「……少し頭を冷やしてきます」

曹豹はさう弦を離れて行く。その背中になぜり場の無い怒りを持て余しているのが見て取れる。

「何儀、済まない」

「あ？ 何で謝るんだよ、李通？ 別に慣れてるから構わないって。  
んじゃ、俺は部下の所に行ってるから」

何儀は笑いながら、そう言いつつ去って行く。その背中を眺めながら、  
これからどうなるのか心配する李通であった。

古難（前書き）

少しやり過ぎたので書き直しました。御迷惑をお掛けしてしまいました。申し訳ありません。今回は短いです。

諸事情により更新が遅くなります。誠に申し訳ありませんが御了承下さい。

「……で？」

夏侯淵は寝台に横たわる夏侯惇に向けて多少、怒氣を含めて言い放つ。それに対して夏侯惇は不思議そうな顔を作りながら首を傾げる。

そう作っているのだ。夏侯淵が言わんとしている事を理解しながら、とぼけている。それが有り得ない程腹立たしい。

「『』で？』とは一体何ですか？」

「……元譲殿」

夏侯淵は唸るような声を夏侯惇に向けて放つ。本気でいい加減にして欲しい。若干顔を赤く染める夏侯惇は首を傾げたままだ。

「元譲殿、俺に何か言つ事はありませんか？」

「あ、はい、ありますよ。机の上に内政に関する書類がありますの

で、それを持って来て

「

「げ、ん、じょ、う、殿？」

怒りを大量に込め、彼に投げ付ける。夏侯惇は、そんな事を気にしていないようだ。本当に、この仕事病野郎が。

「あ、駄目ですか？ なら収支関連の書類を

「

「惇、てめえは熱出してんだろうが！ いい加減にしやがれよ！！  
医者が驚いてたぞ『何で過労死しないかが不思議だ』ってな！  
どんだけ働けば気が済むんだよ。て、め、え、は！」

「まだ大丈夫ですよ。若干意識が虚ろになるだけで

「

「普通、それが死にかけつて言つんだよ大馬鹿野郎！-！」

数日前、夏侯惇は高熱を出して倒れたのだ。夏侯淵が早急に救助したので大事には至らなかつた。

以前から魚の骨が喉に引っ掛かっている、と言つていたが高熱を出す前兆だったのだろう。

そして星の証言が決定的だった。『『最近、星の夏侯惇に対する態度が変だつたので問い合わせたのだ。』』

すると寝呆けた夏侯惇と遭遇してしまつたらしい。『『これは星自身が『己の恋心に気付く絶対の機会だ、と喜んだものだ。』』』

寝呆けた夏侯惇は恐ろしく可愛らしく女性の母性本能を物凄く刺激するよつなのだ。しかし、星は夏侯惇が妖艶だつたと証言した。

（今更だけど）元讓殿つて、普段、寝呆けている時と体調が悪い時に寝呆けてこるのでほぼ全く違つよつくなるからなあ）

染々と思ひ夏侯鴻。そして思い出したくも無い過去の体験が脳裏に蘇る。

（ていうか、普通に寝呆けた時もあいつが『これは私を誘つているのだな。襲つてくれ、と誘つているのだな』とか言つて……結局、俺が元讓殿の貞操を守る羽田に……）

辛く悲しく思い出したくも無い過去の記憶は更に続く。

（元讓殿が熱出した時も、看病していたあいつが『つい先程、惇に誘われたから身体を清めて今夜襲つてもいい』とか言い出しあがつて……結局、また俺が元讓殿の直操を守る羽田……）

眼から何かが溢れ出しそうな感覚がする。しかし、それを我慢する夏侯淵。

「はあ、一応報告だけはしておきます。陳登達、迎撃部隊は袁術軍を撃退し、その隙に孫策軍が袁術領に侵攻。袁術軍が孫策軍の迎撃に手一杯の時を見計らい、徐榮を大将にした曹操軍が袁術領北部に侵攻を開始しました」

「はい……御苦労様……です」

「……絶対安静にしておいて下さいよ」

眼が虚ろになり始めた夏侯惇に言つと部屋を出る夏侯淵。何か消化に良い物でも侍女に持つて来てもらおうかと考えつゝ各國の現状を考察し始める。

（……河北の袁紹が動き始めている。恐らく南下して来る筈だ）

河北を制覇した袁紹がに物資や軍を整えている。しかし、そこに

引っ掛かるのだ。

あからさま過ぎる。まるで『今から攻めますよ』とでも言わんばかりに。それに河北全域を制覇して田も浅いのに民政が完全に機能している。

有能な文官がいたとしても、これ程までに早く回り始める事が出来るのだろうか。政治関連は疎いと自覚している夏侯淵でも異常というのが分かる。

（余程、効率良く文官を配置したり色々工夫を凝らさなければならないと思うのだが……）

夏侯惇が独自の情報網を持っているのと同様に夏侯淵自身も規模は小さいが持っていた。

そこから集めた情報でも袁紹軍に、これ程まで手際が良い者はいない筈である。確かに武官文官に富んでいるが、それを無駄なく有効に使う人物はいない。

（袁紹軍の動員出来る兵力は一十万規模かな。それに対して曹操軍は十万規模。後は豪族がどちらに付くかだな）

悩みながら廊下を歩く夏侯淵。風が頬を撫で口が差す中、歩き続ける。

（……考えれば考える程、徐州は微妙な位置だな。北には袁紹、西には曹操、南には孫策、東は海……逃げ道が無いからキツい）

夏侯惇が伏している今、夏侯淵が代役を務めなければならぬだろ。諸葛亮達には他の仕事もあるようだから頼る訳にもいかない。

（将の質的には曹操軍かな。徐榮もいるし……だが、袁紹軍の手際の良さが不気味だ）

悩めば悩む程、分からなくなる。改めて夏侯惇の偉大さを再認識した そして自分がどれだけ夏侯惇に頼っていたかを。

「やるしか無いよなあ

夏侯淵の呟きは風にさらわれ、どこかに消えて行く。とにかく自分出来る限りの事をしよう。そう夏侯淵は心に決めた。

今回も短めです。

## 南下開始

広大な大地に轟く足音。風が馬上の高幹の顔にぶつかる。普段ならば心地良く感じるのだが、今の彼にそれを感じる余裕は無い。

徐栄が三万の軍勢を率いて袁術領へ侵攻を開始したのだ。各地の守りを考慮した上で現在、曹操が戦に動員出来る兵力は約十一万程度。

豪族の動きで多少上下するものの全戦力の四分の一を出陣させたのだ。この機を逃す訳にはいかない。

速さを重視する為、情報は垂れ流し状態だらう。逆に堂々し過ぎて他勢力は混乱しているかも知れない。とにかく徐栄が帰還するまでに何としてでも中原侵攻の為の橋頭堡を作つておきたいのだ。

恐らくその事を承知した上で徐栄は出陣したに違いない。何か罠を仕掛けたかも知れない。だが止まる訳にもいかないので。

「高幹様！ これ以上、強行軍を行えば兵が脱落し始めます！」

「構わない！ 少々脱落した所で、ここは我らの領地だ！ それに時間が無いのだ！」

副官の言葉に叫ぶように答えた。そう、時間が無いのだ。高幹が独自に調べた情報から推測すると夏侯霸と夏侯威は自分と同じ国から来た者かも知れない。

しかも名将と呼ぶに相応しい能力だ。自前の情報網を持っているが、調略や謀略にまで手を出していく所を見ると根っからの軍人だと考えられる。

そもそも軍人には謀略の類を良く思わない者が多いからだ。高幹もその一人であるし徐榮も戦う事だけに専念している。

それはさておき高幹は夏侯霸と夏侯威という名の将を知らない。自分が死んだ後に活躍した将なのか、はたまた偽名なのか分からない。

唯一分かるのは、そろそろ己を取り戻す頃合いだという事だ。鎧が擦れ合い、奏でる合奏を耳にしながら思つ高幹。

この国に来た時、肉体的にも精神的にも若返る。肉体面は別に良いのだが精神面は少々厄介なのだ。考え方や行動まで若い頃に戻るからである。

しかしながら、ある程度この国に慣れれば精神的に若返ったまま本来の自分を取り戻すという不思議かつ複雑で理解出来ない意味不明な現象が起こる。

まあ、赤子にまで若返った高幹としては本来自分を取り戻しても新手の拷問にしかならなかつたのだが。

過去の羞恥拷問の数々を思い出し若干憂鬱な気分になる高幹。とにかく、あれ程までに優秀な将が本来の自分を取り戻せば強敵になる事は間違いない。

(朝廷にも怪しい雰囲気が漂い始めているのに……まつたく厄介事だらけだ)

内にも外にも問題を抱える袁紹軍　　内は内でも『内』の『上』なのだが。

「高幹様！　黄河が見えてきました！」

高幹は副官の報告に頷いた。出陣準備が終えていた八万のみ連れて來たが、渡河には時間が掛かる。

無防備になる上陸中に敵が襲つて来ない事を祈りながら馬を進め

た。兵士達は疲れているものの、顔に出でなこみひじしてい。

「この程度の強行軍であからさまに疲れを見せていたら困る。そんな兵士が戦場で使えるとは思えないからだ。何へいらっしゃるのかも知れないが。

「思ったより時間が掛かるようだな」

「準備期間が短かつたですから」

高幹の咳きに心じる副官。確かに準備する期間は短い。だが、これ以上時間を掛ける余裕も無かつたのも事実。

「これは妥協するしか無い。岸に集めてある船を睨みながら、そう考えた。

「先に渡河した部隊は後続が渡り切るまで陣を固める。全軍が渡河した後、近場の敵拠点を制圧。この辺りの安全を確保する」

「戦をするには少々早過ぎたのではないでしょうか。後、一年……  
いえ半年あれば」

「今回の戦で袁紹軍が動員出来る兵力は豪族の兵力を合わせて約二十万。これ以上時を掛ければ二十五万まで達するだろ。しかし同時に相手にも時を「与える事になる」

「……確かに、そうですが」

副官が言葉を濁す。やはり、まだ時間が十分では無いと思つているのだろう。だが割り切るしかないのだ。

相手は曹操だ。こんな穏やかな国の曹操であるひつと氣を引き締めなければならぬ。

兵士が渡河用の船に乗り始める。そして兵士を満載した船が一つずつと岸から離れて行く。黄河に波紋を残しながら一船、また一船と。

「恐らく将の質、兵の練度は互角だ。兵力は、一からが上。地の利では、あちらが上」

「参謀陣の謀略合戦に期待しますか

副官の言葉の端々から嫌悪感が漂つていた。よくよく考えれば参謀陣も互角のような気がする。

「だが、ひちりは名門という看板がある」

「こんな時にしか役に立たないが、と内心弦く高幹。やはり名門といつ看板は何かと役に立つのは事実。

しかし名門だからといって能力があるかと問われれば、否だ。高い者もいれば低い者もいる。人とは難しい生き物だ。

「一度で良い。一度でも明白な勝利をすれば、日和見の豪族達がこちうけ付く」

「そうなれば、かなり楽になります」

「ああ」

その明白な一勝が難関なのだ。肯定の言葉を口にしながら思つ。辛勝でも、何となく手にした勝利でも駄目なのだ。

誰の眼からも、はつきりとした勝利。しかしそう簡単に、その勝利を手にする事が出来る相手では無い。

「おまえは橋頭堡だ」

対岸を睨みながら自分に言い聞かせるように呟く高幹。長く辛い戦になる。空を舞う鳥の声が虚しく辺りに響き渡った。

## 黄河のほとりで（前書き）

久々の更新。遅くなってしまい申し訳ありませんでした。

## 黄河のほとりで

まずは初戦。とにかく本隊が到着するまで守り抜かなければならぬ。陣中に響き渡る兵士達の騒めきを耳にしながら改めて考える高幹。

そんな時、一人の伝令が額から汗を流しながら慌ただしく近寄つて来て報告を行つて来る。

「報告します！ 岳曠様が皆を落としました！」

「損害は？」

「どうやら皆の曹操軍は完璧に油断していたようだ、これといった損害は受けておつません」

「そうか。それで物資の方は？」

「はい。かなりの物資が蓄積されておりました」

その後、伝令から詳しく報告を聞き少し安堵する高幹。実は強行軍を続けた為あまり兵糧を持って来れなかつたのだ。

持つて来た兵糧は、どれだけ節約しても約四日分であつたので敵拠点から調達しなければならなかつた。

呂曠に攻めさせた曹操軍の拠点に兵糧があつたから良かつたものの無ければ非常に苦しい展開になつていた筈だ。

その後、呂曠の部隊に違ひ伝令を送り幕僚達を集め軍議を開く。

今回、参軍しているのは皆を制圧した呂曠を含め沮授、高覽、呂翔、鄒丹である。ちなみに鄒丹は旧公孫賛軍からの降将である。

「これで多少は楽になりますな」

「そうですね」

簡素な幕舎で沮授の言葉に頷く呂翔。しかし沮授は言外に皮肉つてゐるのだろう。初めから兵糧を持って来れば良かつたのだ、と。

呂翔に関しては素直に安心しているようだ。そして鄒丹は黙り込み、高覽は沮授の言葉に苦笑いしている。

確かに初めから兵糧を持つて来れば、このような事態にならぬこと済んだのだが少々訳があるので仕方ない。

それに八万もの軍勢を素早く渡河させなければならないのだ。大きな船には軍馬や武器を載せなければいけない。

「さて本題ですが曹操軍はすぐに来るでしょう」

「やうだな」

沮授の單刀直入な言葉に答える。すると、その言葉に対し驚きの表情を浮かべる呂翔と鄒丹。高覽の表情は固くなっている。

「普通、ここのよつな最前線の拠点に物資を集めのか？」

「やうこえば……」

「いむか……」

高幹の言葉に呂翔と鄒丹は、それぞれ反応を示す。呂翔は今、初めて気が付いたように。鄒丹は顔をしかめて唸つている。

「異だつた、といつ事ですな」

「いや、どちらかといひ戦場を選びたかつたのでしょうか」

「ああ、確かに。曹操軍の騎馬隊は精強。こゝら一帯の地形からして騎馬隊の機動力が存分に活かせる、といひ戦ですな」

「やうなつますね」

高覧の意見を肯定する沮授。その肯定の言葉を聞いて高覧は、こゝりに視線を向け納得したような表情を浮かべる。

「成る程、だから兵糧の代わりにあれ程までの数を持つて來た訳ですか」

「まあ、やういう事だ。曹操自身、騎馬隊での戦闘を最も得意としているからな。恐らく戦場は平坦な土地なるだらうと予想はしてた。流石に餌まで用意してくれていたとは思わなかつたが」

「流石は高幹殿ですね」

高幹に、そんな言葉を掛ける高覧。呂翔と鄒丹は呆然としている。

「騎馬対策とは言えども私は、あまり賛同出来ませんでしたが」

沮授が微妙な表情を浮かべながら、そう言って来た。彼の瞳に映る感情の光も揺れ動いていた。

「沮授殿は知っていたので？」

「ええ。確かに納得は出来ます。しかしながら、あまりにも博打過ぎます。我らの方が兵站に関しては不利なのですぞ」

そう、沮授の言つ事も正しいのだ。領土境での戦闘とはいえ地の利は、あちらにある。

侵攻側である袁紹軍よりも守備側である曹操軍の方が兵站に関する負担が少ない。更に曹操軍の方が兵糧に余裕があるので。

元々、高幹がいた国での曹操は戦い続けていた。その為、兵糧の消耗が激しく袁紹軍との戦いでは常に兵糧不足に陥っていた。

それに比べ袁紹軍は公孫賛と黒山賊以外に目ぼしい敵はおりず、兵糧にも余裕があつた。

しかし今回は全くの逆である。袁紹軍は河北を統一して、それ程時間が経つておらず、更には連戦に次ぐ連戦であつたので兵糧に不安がある。

それに比べ曹操軍は反董卓連合の後、大きな戦を行つておりず兵糧も潤沢だ。

徐榮が三万の軍勢を引き連れ袁術討伐を行つたといふのも南下の理由の一つだが兵糧も理由の一つなのだ。それに時間を掛ければ曹操の勢力は確実に拡大する。

つまり今が絶好の機会なのだ。ちなみに、このよつた時に名門といふ称号が有利に働く。商人や豪族から多少無理を言つて兵糧を借りたりする。

本当にここのような時、名門という力は助かる。心底、そう思つ高幹だつた。

「今更、言つても仕方がないのでは？」

「ええ、そうですね。ただ言つただけです。私は文官ですので戦以外の事に関しては躊躇い無く言います」

「これも戦に入るのではありますか?」

「……そこは、それぞれの判断という事です」

言い合ひのような高覽と沮授の会話だが実際には「人共、仲が良いのである。仲が良いから」いや「己」の意見を相手にぶつける事が出来るのだろう。

「それで曹操軍は、どのくらいで来ますか?」

「恐らく一、二日以内」

「いえ、今日、明日には来るでしょう」

呂翔の問い合わせに対する高覽と沮授。高幹としては今日中に来ると予想していた。

「分かりました。とにかく出陣の準備はしておけば良いのですね」

「ああ、そうだな」

高幹の返答に頷く呂翔。鄒丹も固い表情のまま頷く。恐らく曹操軍は騎馬隊で押して来るだろ。う。

それに対抗する策はあるのだが、こちらの騎馬隊の数が少々痛い。

やはり、どうしても軍馬を大量に運ぶ事が出来なかつたので歩兵が主戦力だつた。

もう少し騎馬隊が欲しかつたが今更言つても仕方ない。後はどこまでやれるかだ。

今後に付いて話し合いながら、そう思つ高幹。幕舎の中に置かれた机を見つめる。そこには周辺の地形が細かく書き込まれていた。

脳裏に浮かび上がる地形と照らし合わせる。耳を澄ませば聞こえる黄河の騒めきが、そんな自分を嘲笑つているかのように感じる高幹であつた。

御連絡（前書き）

誠に申し訳ござりません。今回は私から皆様への御連絡です。

この作品を御覧して頂き誠にありがとうございます。

大変身勝手ながら、この作品を一から作り直す事に決めました。

理由は多々あります、全ては私の勉強不足と力量不足の所為です。

私自身が納得出来て、そして皆様にも楽しんで読んでもらえるような作品を作りたいと思っています。

中途半端でこの作品を打ち切るという大失礼な事をし、更に皆様に多大なる御迷惑を掛けてしまう事になり、誠に申し訳ありません。

どうか御了承の程を宜しくお願い致します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2749m/>

---

真・恋姫無双～蒼き忠将～

2011年1月15日18時17分発行